

東京市神田區錦町貳丁目貳番地

發行者 **東京法學院**

東京市麴町區內幸町壹丁目三番地

代表者 菊池武夫

東京市麴町區下六番町十七番地
同勞舍

印刷者 松澤 瓦三

大審院判決錄

大審院判決錄

凡 例

- 一本書ハ大審院民刑各部ノ判決ヲ輯録ス
- 一本書ハ毎月發兌シ前月ノ判決ヲ登錄ス
- 一本書編次ノ體裁ハ民刑ヲ區分シテ二卷トシ其輯録ノ順序ハ宣告日
附ノ前後ニ依ル
- 一目録ヲ分テ總目錄、事件目錄、いろは索引、法文表、月日目錄、及ヒ人名音
字目錄ト爲ス
- 一件名ノ次ニ判決ノ要旨ヲ摘録ス事件異ナルモ其判旨同一ナルモノ
ハ前例ヲ參照シテ特ニ重録セズ
- 一上告ノ論點ト判決ノ説明トノ間ニ○ヲ施シ區劃ヲ明ニシ亦タ判決
要旨ニ適合スヘキ説明ニハ、、、、ヲ施シ閱覽ニ便ス
- 一丁數ノ上ニハ關係ノ事項ヲ掲ク
- 一年度末ニ至リ全部ニ通スル諸目錄ヲ作成シ搜索ニ便ス

大審院民事判決錄

總目録
民法

溪水ノ上流沿岸所有者ハ其下流沿岸所有者ノ使用權ヲ害セサル範圍ニ於テ
溪水ヲ使用スル權利ヲ有ストノ事……………一
戸主カ隱居ヲ爲ス場合ニ於テ特ニ其財産ノ一部ヲ留保シテ依然自己ノ所有
ト爲スハ有效ナリトノ事……………九
出訴期限規則ノ適用ニ關スル事……………一〇
不確定ナル事實ノ到來ヲ以テ期限ト爲スコトヲ得ルトノ事……………二四
雙務契約者ノ一方カ一部ノ履行ヲ爲サ、ルテ理由トシテ他ノ一方ハ必スシ
モ全部ノ履行ヲ拒ムヲ得ストノ事……………二六
要素ニ錯誤アル契約ハ民法實施前ト雖モ無効ナリトノ事……………四六
親權ヲ有スル實母カ自ラ其幼兒ノ後見ヲ爲サ、ルモ之ヲ以テ親權ヲ拋棄シ
タルモト云フヲ得ストノ事……………五〇
債務者カ其債權者ニ對シ無資力ナルコトヲ示シ債權ノ減額ヲ求ムル目的ヲ

以テ賣買ニ託シ其財産ヲ他人ノ所有名義ト爲シタルハ不法ナリトノ事..... 五六

不法ノ原因ニ依ル請求ハ法律ノ保護スヘキモノニアラストノ事..... 五六

事實裁判所ハ事情ニ依リテハ契約書ノ明文ニ反シテ契約ノ旨趣ヲ解釋スル
ヲ得ヘントノ事..... 八三

相續人カ責任ヲ負フ可キ前戸主ノ行爲ハ相續以前ニ係ルモノニ止マルトノ
事..... 一〇四

先代カ隠居後ニ受ケタル裁判ノ效力ハ其相續人ニ及ハストノ事..... 一〇五

出訴期限規則ヲ援用スル者ハ辨濟ノ事實ヲ主張スルヲ要ストノ事..... 一〇九

手附流ノ契約ト雖モ履行時期ノ徒過ハ其義務ヲ消滅セシムルモノニアラス
トノ事..... 一一〇

契約ノ解除權ヲ失フ場合ノ事..... 一二四

商 法

運送人ノ連帶責任ノ事..... 一二

番頭ト稱スル雇人ノ爲シタル行爲ハ通常其主人ノ代理資格ヲ以テ爲シタル
モノト認メ得ヘントノ事..... 七

會社登記前ノ株式ノ讓渡ハ無効ナリトノ事..... 二四

豫約株ノ賣買ハ無効ナリトノ事..... 二四

民事訴訟法

商業帳簿記入事項ノ眞否ハ事實裁判所ノ自由ナル心證ニヨリ判斷スヘキモ
ノナリトノ事..... 六六

事實裁判所ハ證言ノ各事項ニ付キ一々説明ヲ與フルノ責務ナントノ事..... 一四

確認ノ訴訟ヲ提起シ得ヘキ場合ノ事..... 三三

確認訴訟ハ其權利關係ヲ即時ニ確定スルコトノ必要アル場合ニアラサレハ
之カ提起ヲ許サストノ事..... 四一

控訴狀ノ書式ニ關スル事..... 四六

控訴狀ノ末尾ニ判決ノ表示トシテ第一審判決正本ノ全部ヲ謄寫シテ添付ス
ルモ違式ニアラストノ事..... 五〇

再審訴訟ノ本案ノ判決主文ニ關スル事..... 六一

辯論ヲ再審許否ノ點ニ制限シタル場合ニ其辯論ニ列席セサル判事カ該裁判ニ關與シタルハ不法ナリトノ事……………六一

民事訴訟法第四百六十九條第三號ニ所謂偽造證書ノ意義ノ事……………六二
私證書類ハ其作製ニ關與セサル者ノ否認ノミニ依リ其證據力ヲ失フモノニ

アラストノ事……………六三
離婚ノ請求ト復籍ノ請求トハ獨立セル二個ノ請求ニアラストノ事……………六九

職權調査ニ屬セサルモノコシテ原院ニ提出セサルモノハ上告論旨ノ基礎ト
爲スヲ得ストノ事……………七六
裁判ノ言渡ニ付テハ其裁判ニ參與セサル判事カ加ハルモ違法ニアラストノ事……………七六

法律上代理人タル資格ナキ者ニ於テ提起シタル不合法ノ訴訟ト雖モ其欠缺ハ追認ニ因テ補正セラルヘシトノ事……………九〇
判事ノ心證ノ材料ハ必スシモ當事者ノ中立テタル事項ニ限定セラルヘキモノニアラストノ事……………九四

事實裁判所ハ鑑定ノ結果ヲ信認スルノ理由ヲ説明スルノ責務ナシトノ事……………一〇一

府縣會規則

土地臺帳記名者ハ其土地ニ對シ納租ノ義務アリ從テ府縣會議員選舉權ヲ持
續ストノ事……………六六

事件目錄

事 件	關 係 事 項	判 決 日 月	番 號	訴 認 關 係 人	丁 數
水利妨害排除引水差止請求ノ件	溪水ノ使用權	二月一日	三十七年 四七七號	上告人 春日六郎外十七名 被上告人 宮原善夫	一
賣掛代金請求ノ件	商業帳簿ノ證據力	二月二日	三十七年 一六二號	上告人 野澤松次郎 被上告人 佐藤久則	六
貸金請求ノ件	月主、出訴期限規則ノ適用	二月二日	三十七年 三七五號	上告人 岩間保藏平 被上告人 小島忠助	九
謝金請求ノ件	證言採否ノ說明	二月七日	三十七年 三十一號	上告人 八木伊助 被上告人 宮内惣右衛門	二
積荷損害要償ノ件	運送人ノ責任、連帶	二月八日	三十七年 二四〇號	上告人 山中友七 被上告人 長谷川善次郎	三
預金請求ノ件	義務履行ノ期限、不確實ナル事實ノ到來	二月九日	三十七年 三九四號	上告人 鏡子銀造 被上告人 和山清左衛門	四
宅地建築貸渡代金請求ノ件	租賃契約、一部ノ履行	二月九日	三十七年 四二二號	上告人 具島太助 被上告人 阿部安次郎	三
鑛業特許權無效確認ノ件	確認訴訟、訴訟ノ提起	二月十日	三十七年 二四三號	上告人 宮崎萬太郎外十名 被上告人 中山信	四
借地條件確定請求ノ件	確認訴訟ヲ許ス場合	二月十日	三十七年 三八〇號	上告人 宮崎萬太郎外十名 被上告人 中山信	四
損害要償ノ件	控訴狀ノ書式、契約ノ要素、錯誤	二月十三日	三十七年 三八七號	上告人 伊藤清造 被上告人 伊藤清右衛門	四
地所取戻登記名前替請求ノ件	控訴狀、判決ノ表示、親権	二月十三日	三十七年 三八九號	上告人 狩野野輪七 被上告人 狩野野輪七	五
取込金請求ノ件	假裝ノ賣買、不法ノ原因	二月十四日	三十七年 六三三號	上告人 草野嘉市郎外一名 被上告人 足立マチ	五

民事事件目錄

- 貸金請求訴訟再審ノ件
- 株式公賣效果不成立確認請求ノ件
- 離婚復籍請求ノ件
- 藍葉引渡請求ノ件
- 保費義務履行請求及保費義務消滅確認反訴ノ件
- 地所取戻並ニ損害賠償請求ノ件
- 分配金請求ノ件
- 縣會議員選舉人名簿削除請求ノ件
- 不法讓與取戻請求ノ件
- 立替金請求ノ件
- 土地收用補償金請求ノ件
- 貸金請求ノ件
- 約定金取戻請求ノ件
- 不當利得金取戻ノ件

再審訴訟ノ本案ノ判決主文、辯論ニ列席セザル判事ノ裁判ノ偽造ノ證據	再審訴訟ノ本案ノ判決主文ノ證據力	離婚請求ノ復籍請求、獨立セル二個ノ訴	番頭ノ爲シタル商行爲、主人ノ代理	上告論旨ノ基礎、原院不提出ノ事項	裁判言渡ノ形式	契約ノ解釋	土地臺帳記名者、納租ノ義務、府縣會議員選舉權	不法讓與訴訟、本人若クハ法律上代理人ノ追認	心證ノ憑據	鑑定ノ結果、説明ノ責任	相續人ノ責任、前戸主ノ行爲、隱居後ニ受ケタル裁判ノ效力	出訴期限規則ノ援用、辨論ノ立證手續流ノ契約、履行時期ノ経過	契約解除權ノ喪失、會社ノ登記前、豫約株ノ賣買
十四日	十五日	十六日	十八日	二十日	二十日	二十一日	二十二日	二十二日	二十三日	二十三日	二十三日	二十八日	二十八日
三十一一年一八六號	三十一一年一七號	三十一一年二〇八號	三十一一年四一六號	三十一一年一八八號	三十一一年二一九號	三十一一年四七一號	三十一一年七七號	三十一一年二二三號	三十一一年二四四號	三十一一年二五七號	三十一一年四一四號	三十一一年五三四號	三十一一年九八號
上告人 鷺山孫太郎	上告人 寺垣庄三郎	上告人 平田好外三名	上告人 藤田仙助外十三名	上告人 三國義雄外一名	上告人 新井太右衛門	上告人 須永中五郎	上告人 吉川金藏	上告人 森信正市藏	上告人 古城甚右衛門	上告人 小坂宗一郎	上告人 大竹逸藏外一名	上告人 青木庄太郎	上告人 武藤宗彬
被告 戸部庄次郎外一名	被告 横井日子	被告 中川新兵衛	被告 吉川右内	被告 勝間田稔	被告 鈴木善八外五十二名	被告 佐藤榮治	被告 生田柳治	被告 水口兵次郎	被告 中村衛平	被告 木村權右衛門	被告 竹原友三郎外一名		

いろは索引

此索引ハ專ラ法律上ノ用語ニ依リ其頭音ヲ取テいろはノ順ニ從テ排列編纂ス止ムテ得ザルニ非サレハ形容詞若クハ普通名詞ヲ用ヒス〇頭音ハ必スシモ字音ノ假名遣ニ拘ハラズ人ノ通常音ノ所ノ音聲ニ據ル例之ほうヲ入ルカカシ

〔イ〕 隠居

(戸主) 参看

一部ノ履行

(債務契約) 参看

隠居後ニ受ケタル裁判ノ效力

先代カ隠居後ニ受ケタル裁判ノ效力ハ其相續人ニ及ハサルモノトス

〔ロ〕 判決ノ表示

(控訴狀) 参看

賣買

(假裝ノ賣買) 参看

判決主文

(再審訴訟ノ本案ノ判決主文) 参看

賣買

(豫約株ノ賣買) 参看

番頭ノ爲シタル商行爲

番頭ト稱スル雇人、常ニ主人ノ爲メニ商行

民事いろは索引

〔ハ〕 法律ノ保護

(不法ノ原因) 参看

本人若クハ法律上代理人ノ追認

(不法ノ原因) 参看

辯論ニ列席セザル判事ノ裁判

辯論ヲ再審許否ノ點ニ制限シタル場合ニ其辯論ニ列席セザル判事カ再審許否ノ裁判ニ干與シタルハ不法ナリ

辨濟ノ立證

(出訴期限規則ノ援用) 参看

獨立セザル二個ノ訴

(離婚請求ト復籍請求) 参看

土地臺帳記名者

土地臺帳記名者ニシテ其所有權ヲ他人ニ移

〔ニ〕

爲テ爲スヲ通例トスルカ故ニ其行爲ハ主人ノ代理資格ヲ以テ爲シタルモノト認ムルヲ得可シ

〔ホ〕

爲テ爲スヲ通例トスルカ故ニ其行爲ハ主人ノ代理資格ヲ以テ爲シタルモノト認ムルヲ得可シ

〔ヘ〕

爲テ爲スヲ通例トスルカ故ニ其行爲ハ主人ノ代理資格ヲ以テ爲シタルモノト認ムルヲ得可シ

〔ト〕

爲テ爲スヲ通例トスルカ故ニ其行爲ハ主人ノ代理資格ヲ以テ爲シタルモノト認ムルヲ得可シ

民事いふは索引

轉スルモ其移轉登記ヲ爲サトシ間ハ尙ホ土地登記名者タルノ故チ以テ依然其土地ニ對スル地租ヲ納ムルノ義務アリ從テ納租ニ附隨スル府縣會議員選舉權ヲ持續スルモノトス

登記前ノ株式ノ讓渡

(會社ノ登記前)參看

履行ノ拒絶

(債務契約)參看

履行

(債務契約)參看

離婚請求ト復籍請求

復籍ハ離婚ヨリ生スル當然ノ結果ナルヲ以テ離婚請求ト復籍請求トハ獨立セル二個ノ請求ニアラス故ニ一ノ訴ヲ以テ此ノ二個ノ請求ヲ爲スモ明治二十三年法律第百四號第三條ニ違反スルモノニアラス

立證

(出訴期限規則ノ援用)參看

履行時期ノ徒過

(手附流ノ契約)參看

確認訴訟

二四 元 六 三 一〇 一〇 三

確認訴訟ハ當事者間ノ法律關係ヲ即時ニ確定スルノ必要ナキ場合ニハ之ヲ提起スルヲ許サトルモノトス

確認訴訟ヲ許ス場合

權利存在ノ確認ヲ目的トスル確認訴訟ハ其權利關係ヲ即時ニ確定スルコトノ必要アル場合ニ非サレハ之レカ提起ヲ許サトルモノトス

假裝ノ賣買

債務者カ將ニ身代限ト爲ラントスルニ際シ其債權者ニ對シ無資力ナルコトヲ示シ債權ノ減額ヲ求ムル目的ヲ以テ名ヲ賣買ニ假裝シ其財産ヲ他人ノ所有名義ト爲シタル行爲ハ不法ナリ

鑑定ノ結果

事實裁判所ハ鑑定ノ結果ヲ信認シテ採用スルモ其理由ヲ説明スルノ義務ナシ

解釋

(契約ノ解釋)參看

解除權ノ喪失

(契約解除權ノ喪失)參看

株式ノ讓渡

二四 元 六 三 一〇 一〇 三

〔よ〕

(會社ノ登記前)參看

豫約株ノ賣買

商法第百八十條ノ規定ハ豫約株ト稱スルモノ、賣買ニモ亦適用スヘキモノトス

代理

(番頭ノ爲シタル商行爲)參看

連帶

(運送人ノ責任)參看

雙務契約

雙務契約者ノ一方カ一部ノ履行ヲ爲サトシ場合ニ於テハ他ノ一方ハ之ニ應スル一部ノ履行ヲ拒ムヲ得ヘキモ他ニ特別ノ理由ナキ限りハ之ヲ以テ全部ノ履行ヲ拒ムコトヲ得ス

訴訟ノ提起

(確認訴訟)參看

訴訟

(不合法ノ訴訟)參看

相續人ノ責任

相續人カ前主ノ行爲ニ付キ其責任ヲ負フヘキ場合ハ其相續以前ニ係ルモノニ止リ其以後ニ於ケル行爲ニ付テハ責任ナシトス

民事いふは索引

二四 元 六 三 一〇 一〇 三

〔う〕

追認

(不合法ノ訴訟)參看

無効ノ契約

(契約ノ要素)參看

運送人ノ責任

運送人ニ於テ同業者カ引受ケタル貨物ヲ引受ケ遞次運送ヲ爲ストキハ各運送人ハ荷主ニ對シ連帶シテ運送ニ付テノ責任ヲ負擔スルヲ以テ一般ノ慣行ナリトス

納租ノ義務

(土地登記名者)參看

會社ノ登記前

會社登記前ノ株式ノ讓渡ハ商法第百八十條ニ依リ無効ナリトス

溪水ノ使用權

溪水下流沿岸所有者ニシテ既ニ其溪水ヲ以テ田地養水ト爲シ居ル以上ハ上流沿岸所有者ハ其下流所有者ノ使用權ヲ害セサル範圍ニ於テ溪水ヲ使用スヘキハ本邦古來ノ慣行ナリ

契約ノ要素

契約ノ要素ニ錯誤アルモノハ民法實施前ト

二四 元 六 三 一〇 一〇 三

民事いゝは索引

雖モ當然無効ナリ

契約

(手附流ノ契約)參看

原院不提出ノ事項

(上告論旨ノ基礎)參看

契約

(雙務契約)參看

契約ノ解釋

事實裁判所ハ事情ニ依リ契約ノ眞意ト其契約書ノ明文トカ相符合セサルモノト認ムルトキハ其明文ニ反シテ契約ノ旨趣ヲ解釋スルコトヲ得可シ

原因

(不法ノ原因)參看

契約解除權ノ喪失

契約ノ解除權ヲ有スル者カ自己ノ行爲又ハ過失ニ因テ契約ノ目的物ヲ滅失セシメ爲メニ相手方ヲ原狀ニ回復セシムルコトヲ得サルニ至ラシメタルトキハ其解除權ヲ行使スルコトヲ得サルモノトス

不確定ナル事實ノ到來

(義務履行ノ期限)參看

不法ノ原因

不法ノ原因ヲ濫據トスル請求ハ法律ノ保護スヘキモノニアラス

復籍請求ト離婚請求

(離婚請求ト復籍請求)參看

府縣會議員選舉權

(土地登記名者)參看

不合法ノ訴訟

法律上代理人タル資格ナキ者ニ於テ提起シタル不合法ノ訴訟ト雖モ其人若クハ正當ナル法律上代理人カ之ヲ追認シ其訴訟ヲ受繼スル以上ハ既往ノ欠缺ハ之カ爲メニ自カヲ補正セラルモノトス

戶主

戶主カ隱居ヲ爲ス場合ニ於テ特ニ其財産ノ一部ヲ留保シテ依然自己ノ所有ト爲シ得ルハ本邦ノ慣例ナリ

控訴狀ノ書式

控訴狀ニ控訴セル原判決ハ如何ナル判決ナルヤヲ表示シ次ニ此判決ニ對シ控訴ヲ爲スノ旨趣ヲ前後ノ文詞ニ於テ表出シタルトキハ其控訴狀ハ適式ノモノト看做シ受理スル

ニ妨ケ無キモノトス

控訴狀

控訴狀ノ末尾ニ判決ノ表示トシテ第一審判決正本ノ全部ヲ附寫シテ添付シアルトキハ原判決ノ表示ヲ缺キタリト云フヲ得ス

手附流ノ契約

手附流ノ契約ト雖トモ履行時期ノ徒過ハ契約解除ノ原因タルニ止マリ之カ爲メニ其義務ハ當然消滅スルモノニアラス

財産ノ留保

(戶主)參看

錯誤

(契約ノ要素)參看

再審訴訟ノ本案ノ裁判主文

再審訴訟ノ本案ニ付テ裁判ヲ爲スニ當リ再審ノ訴ヲ理由ナキモノトシテ不服ヲ申立テラレタル判決ト同一ノ判決ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ前判決ヲ維持スル旨ヲ言渡スヘキモノナリト雖トモ其判決主文ニ不服ヲ申立テラレタル判決ト同趣旨ノ文字ヲ記載シテ言渡ヲ爲スモ結局前判決ヲ維持スルノ旨趣ニ歸スルトキハ必スシモ不法ト云フヲ得ス

民事いゝは索引

四

六

六

六

九

六

六

一五

六

六

六

二

六

五

裁判言渡ノ形式

裁判ノ言渡ニ付キテ辯論及ヒ裁判ニ參與セサル判事カ加ハルモ違法ニアラス

裁判ノ效力

(隱居後ニ受ケタル裁判ノ效力)參看

義務履行ノ期限

不確定ナル事實ノ到來ヲ以テ義務履行ノ期限ト爲スコトヲ得サルモノニアラス

期限

(義務履行ノ期限)參看

偽造ノ證書

民事訴訟法第四百六十九條第三號ニ所謂判決ノ憑據トナリタル證書カ偽造ナリシトキトハ必スシモ訴訟當事者ノ偽造シタル事實アルヲ要スルモノニアラス

讓渡

(會社ノ登記前)參看

使用權

(溪水ノ使用權)參看

商業帳簿ノ證據力

商業帳簿記入事項ノ眞否ハ事實裁判所カ帳簿ノ體裁記入ノ順序方法其他諸般ノ事情ヲ

審察シ自由ノ心證ヲ以テ判斷スヘキモノトス

出訴期限規則ノ適用

債務者ニ於テ既ニ債務ヲ履行シタルコトヲ陳述スルモ特ニ出訴期限經過ノ申立ヲ爲スニアラサレハ裁判所ハ出訴期限規則ヲ適用シテ裁判ヲ爲スヘキモノニアラス

證言採否ノ説明

事實裁判所ハ證人ノ陳述シタル各事項ニ付キ一々採否ノ説明ヲ與ヘサルヘカラサルノ責務ナシ

親權

親權ヲ有スル實母カ自ラ其幼兒ノ後見ヲ爲サスシテ他人ヲ其後見人ニ選定スルモ之ヲ以テ其實母ハ全ク親權ヲ拋棄シタルモノト云フヲ得ス

實母

(親權)參看

身代限

(假裝ノ賣買)參看

私證書ノ證據力

私證書類ハ其作製ニ關與セサル者ノ否認ノ

ミニ依リ直ニ其證據力ヲ失フヘキモノニアラス

證據力

(私證書ノ證據力)參看

證書

(偽造ノ證書)參看

主人ノ代理

(番頭ノ爲シタル商行爲)參看

商行爲

(番頭ノ爲シタル商行爲)參看

上告論旨ノ基礎

職權調査ニ關セサルモノニシテ原院ニ提出セサルモノハ上告論旨ノ基礎ト爲スヲ得ス

心證ノ憑據

判事カ心證ヲ以テ證據ヲ取捨スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テ其心證ノ憑據トスヘキモノハ必スシモ當事者ノ申立テタル事項ニ限定セラルヘキモノニアラス

出訴期限規則ノ援用

出訴期限規則ヲ援用スル者ハ必スヤ辨濟ノ事實ヲ主張スルヲ要ス而シテ其主張ノ事實ハ立證ヲ要セス

説明

(簽書採否ノ説明)參看

選舉權

(土地登記帳記者)參看

説明ノ責務

(鑑定ノ結果)參看

前戶主ノ行爲

(相續人ノ責任)參看

法 文 表

商法

丁
數

一八〇條……………三四

民事訴訟法

四六九條……………六

明治二十三年法律第百四號

三條……………七〇

民法法文表

月日目錄

判決月日
二月一日
二月二日
二月七日
二月八日
二月九日
二月九日
二月十日
二月十日
二月十三日
二月十三日
二月十四日

番號
三十四年
四七七號
三十四年
一六二號
三十四年
三七五號
三十四年
二二一號
三十四年
二四〇號
三十四年
三九四號
三十四年
四一二號
三十四年
二四三號
三十四年
三八〇號
三十四年
三八七號
三十四年
三八九號
三十四年
六三三號

判決結果
破毀
破毀
棄却
棄却
棄却
棄却
破毀
破毀
棄却
棄却
棄却
棄却
棄却
破毀
破毀
棄却
棄却
棄却
棄却
棄却
棄却

原控訴院
東京
東京
東京
大阪
大阪
函館
東京
東京
長崎
廣島
大阪
長崎
長崎
長崎

丁數
一
六
九
四
二
三
四
三
四
三
四
五
五
六

民事月日目錄

二月十四日
 二月十五日
 二月十六日
 二月十八日
 二月二十日
 二月二十一日
 二月二十二日
 二月二十三日
 二月二十三日
 二月二十三日
 二月二十八日

三十二年 一八六號
 三十二年 一一七號
 三十二年 二〇八號
 三十二年 四一六號
 三十二年 一八八號
 三十二年 二一九號
 三十二年 四七一號
 三十二年 七七號
 三十二年 二二三號
 三十二年 二四四號
 三十二年 二五七號
 三十二年 四一四號
 三十二年 五三四號
 三十二年 九八號

破 破 破 破 破 破 破 破 破 破 破 破 破
 毀 毀 毀 毀 毀 毀 却 却 却 却 却 却 却

大 大 東 東 東 東 宮 大 大 東 東 大 大
 阪 阪 京 京 京 京 城 阪 阪 京 京 阪 阪

二 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三
 二 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

總計二十六件

棄 却 十五件
 破 毀 十一件

人名音字目錄

人名	番 號	原控訴院	丁數
(5) 岩間保 <small>藏被上 告人</small>	三十二年	大阪	一〇
伊藤清造對伊藤清右衛門	三十七號	大阪	一〇
伊藤清右衛門 <small>被上 告人</small>		奧	一七
生出柳 <small>治被上 告人</small>	三十二年	函館	一五
長谷川善次郎對蛭子銀造	三十九號	函館	一五
戶部庄次郎外一名 <small>被上 告人</small>	三十二年	東京	一七
和田助左衛門對小山清左衛門	四一二號	東京	一六
鷺山孫太郎對寺垣庄三郎	三十二年 一八六號	大阪	一六
春日六郎外十七名對宮原善夫	三十年 四七七號	東京	一
貝島太助對阿部安次郎	三十二年 二四三號	長崎	三
狩野輪七對狩野キナ	三十二年 三八九號	長崎	五
狩野キナ <small>被上 告人</small>		長崎	五

民事人名音字目錄

[よ]	勝間田 稔對鈴木善 八外五十二名.....三十二年 二五七號 東京.....一〇一
	吉川 金藏對森信正市.....三十二年 一八八號 廣島.....七六
	横井 ヨ 禾對横井ミナ.....三十二年 二二三號 大阪.....九〇
	横井 ミナ 十被上告人.....九〇
	吉川 右 内被上告人.....三十二年 三三五號 東京.....九四
[た]	立川 雲 平對岩間保藏.....三十二年 三七五號 東京.....一〇〇
	竹原友三郎外一名被上告人.....二五
[な]	中山 雷 響被上告人.....四一
	中川 新兵衛對吉川右内.....三十二年 二四四號 大阪.....九四
	中村 衛 平被上告人.....二〇
[む]	武藤 宗 彬對戸部庄次郎外一名.....三十二年 七七號 宮城.....八七
	野澤松次郎對佐藤久則.....三十二年 一六二號 東京.....六
[の]	大竹 逸 藏外一名對青木庄太郎.....三十二年 四七一號 東京.....八三
[く]	草野嘉市郎外一名對足立マナ.....三十二年 六三號 長崎.....五
[や]	八木 伊 助被上告人.....二四

[ふ]	山中 友 七被上告人.....二
	藤田 仙 助外十三名被上告人.....七
[こ]	小島 忠 里對八木伊助.....三十二年 二二一號 大阪.....四
	小山 清左衛門被上告人.....二九
	古城 甚右衛門對小城宗一郎.....三十二年 三一九號 長崎.....六
	小城 宗 一 郎被上告人.....六
[え]	蛭子 銀 造被上告人.....三五
[て]	寺垣 庄三郎被上告人.....三三
[あ]	阿部 安次郎被上告人.....三三
	足立 マナ 十被上告人.....五
	新井 太右衛門對須永半五郎.....三十二年 四一六號 東京.....七
	青木 庄太郎被上告人.....八
[さ]	佐藤 久 則被上告人.....六
	佐藤 榮 治對生出柳治.....三十二年 四一四號 宮城.....一〇五
[さ]	木村 權右衛門對竹原友三郎外一名.....三十二年 九八號 大阪.....二五

〔五〕	宮原善夫 <small>被告上告人</small>	三十二年	大阪	一
	宮内惣右衛門對山 中友七.....	三十二年	大阪	二
	宮崎萬太郎外十名對中山 雷響.....	三十二年	廣島	三
	三國キヨ對三國義雄外一名.....	三十一年	東京	四
	三國義雄外一名 <small>被告上告人</small>	三十一年	東京	五
	水口兵次郎對中村 衛平.....	三十一年	東京	六
〔六〕	平田好外三名對藤田仙助外十三名.....	三十一年	大阪	七
〔七〕	森信正 <small>被告上告人</small>	三十一年	大阪	八
〔八〕	須永半五郎 <small>被告上告人</small>	三十一年	大阪	九
〔九〕	鈴木善八外五十二名 <small>被告上告人</small>	三十一年	大阪	一〇

大審院民事判決録 第五輯 第二卷

○水利妨害排除引水差止請求ノ件

明治三十年第四百七十七號
明治三十二年二月一日第二民事部判決

○判決要旨

一 溪水下流沿岸所有者ニシテ既ニ其溪水ヲ以テ田畑養水ト爲シ居ル以上ハ上流沿岸所有者ハ其下流所有者ノ使用權ヲ害セサル範圍ニ於テ溪水ヲ使用スルハ本邦古來ノ慣行ナリ(判旨第二點)

第一審 長野地方裁判所上田支部 第二審 東京控訴院

上告人 春日六郎 訴訟代理人 日置佐三郎

外十七名

被上告人 宮原善夫 訴訟代理人 中村福太郎

右當事者間ノ水利妨害排除引水差止請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年十月五日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

溪水ノ使用權

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第一點ハ原判決ハ「字荒井二千七百七十六番畑地ヨリ湧出スル水ニ就テハ控訴人ニ於テ何等ノ舉證ナキヲ以テ被控訴人主張ノ如ク該水ハ全ク被控訴人ノ私有地ヲ通過スルモノト認ム可シ」ト判示シ「甲第二號證ニ坂城村字荒井(中略)ヨリ湧出スル諸流云々トアルモ此ノ荒井ノ湧出水ハ果シテ右畑地ヨリ湧出スル水ヲ指シタルモノト認ムルヲ得ス」ト甲第二號證ニ就テ説明セラレタリ然レトモ全體ニ付證明セラレタル以上ハ其一小部分モ亦證明セラレタルモノト看ルヘキハ理ノ當然タリ果シテ然ラハ原院ハ甲第二號證ニ依リ已ニ荒井ノ湧出水ニ就テ立證セラレタリトスル以上ハ其荒井ノ一小部タル二千七百七十六番畑地ヨリ湧出スル水ニ就テモ亦立證セラレタリトスヘキハ看易キ道理ナルニ原院ハ該水ニ就テハ何等ノ舉證ナキモノトシ却テ反證ナキ被上告人ノ主張ヲ採用シ前顯ノ如ク上告人ニ不利益ナル判決ヲ與ヘタルハ證據法上ノ通則ニ違背シテ不當ニ事實ヲ確定シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ○依テ原判文ヲ查閱スルニ(前略)字荒井二千七百七十六番畑地ヨリ湧出スル水ニ就テハ控訴人(上告人)ニ於テ何等ノ舉證(甲第二號證ニ坂城村字荒井(中略)ヨリ湧出スル諸流云々トアルモ此ノ荒井ノ湧出水ハ果シテ右畑地ヨリ湧出スル水ヲ指シタルモノト認ムルヲ得ス)ナキヲ以テ被控訴人(被

上告人)主張ノ如ク該水ハ全ク被控訴人ノ私有地ヲ通過スルモノト認ムヘシトアリテ原院ニ於テ甲第二號證ヲ認メタルコト明カナリ已ニ之レヲ認メタル以上ハ本訴字荒井二千二百七十六番畑地ヨリ湧出スル水モ該證ノ所謂字荒井ヨリ湧出スル諸流中ニ包含セルモノトスヘキハ當然ナリトス何トナレハ何等ノ區別ヲモ明示セスシテ單ニ字荒井ヨリ湧出スル諸流云々ト表示セシ以上ハ總テ字荒井ヨリ湧出スル水ヲ指示シタルモノトスヘキハ辯ヲ要セサル所ナレハナリ然ルニ原院ニ於テ甲第二號證ヲ認メナカラ何等ノ理由ヲモ付セスシテ甲第二號證ニ坂城村字荒井ノ湧出水ハ果シテ右畑地即チ字荒井二千二百七十六番畑地ヨリ湧出スル水ヲ指シタルモノト認ムルヲ得スト判定シタルハ解釋法ニ違背シタルモノニシテ破毀ノ原由アル不法ノ裁判タルヲ免レス

上告第二點ハ我國古來ノ習慣ニ依レハ田地養水ノ如キ既ニ一定ノ使用者アル場合ニ於テハ上流ノ沿岸所有者タリトモ擅ニ其流水ヲ使用シ以テ養水使用者ノ權利ヲ害スルヲ得サルモノトス換言スレハ養水ハ使用權ノ存スル者ニ損害ヲ及サ、ル程度マテハ沿岸所有者ニ於テ之レヲ使用スルヲ得ヘキモ他人ノ使用權ヲ害スルコトアルモ尙自由ニ之レヲ使用シ得ヘキ道理ハ存セサルモノトス故ニ養水使用權ノ如キハ或ハ一定ノ人ニ專屬スル證據ナケレハトテ他人カ擅ニ之レヲ使用シ得ヘキ條理ナキモノナリ今本件原判決ヲ見ルニ「甲第二號證ニ依リ云々我田地ニ灌漑シ來ル事實ヲ立證シ甲第三號證ニ依リ給水ノ不足スル事實ヲ立證シ云々」甲第六號證ハ云々其誤リ人六右衛門カ從來水ヲ勝手ニ使用シ得サル除地

ニ濫リニ論水ヲ引用シタルニヨリテ成立シタルモノ云々トアルノミナラス原院ニ於テ被告上告人カ本
 訴ノ水ヲ使用シ(本件争ノ點ナリ)其餘水ハ論水ニ落ツルト申立タルニ對シ上告人ハ絶對ニ之レヲ否認
 シタルノ事實ニヨリ本件論水カ上告人ノ從來使用シタル養水ナルコト上流沿岸所有者ニ於テ勝手ニ使
 用シ得サルコト並ニ之レヲ使用スヘキ程ノ水量ナキコト實ニ明カナリ然ルニ原院カ「係争ノ溪水ハ
 被告上告人(被告上告人)主張ノ如ク公共ニ於テ使用スル權利ヲ有スルモノト認メサルヲ得サルヲ以テ被控
 訴人カ之ヲ使用スルモ亦不法ニ非ス」ト判定シタルハ前述ノ法則ヲ不當ニ適用シタルモノトス何トナ
 レハ上告人カ從來使用シタルコト其水量ノ不足ナルコト並ニ沿岸所有者ニ於テ濫リニ使用シ得サルコ
 ト明カナル以上ハ是即チ他人之レヲ使用シ得可カラサル證據ノ存スルモノニシテ特ニ控訴人以外何人
 ト雖モ之レヲ使用スル權利ヲ有スルモノトストアレトモ被告上告人又ハ他人ノ之レヲ使用スル程度ハ極
 ナキノミナラス被告上告人ノ地目ヲ變換シテ水田トナシ以テ論水ヲ引用スルコトハ獨リ現今所争ノ反別
 (本訴ハ被告上告人カ是迄引用セサル畑地ヲ田地トナシ引水セル爲メ起リタルナリ)ニ止マラサルカ故ニ
 若シ此判決ニシテ確定スルニ於テハ終ニ他人ノ引水ニ任セ一滴ノ水タモ上告人ノ田地ニ流下セシムル
 コトヲ得サルニ至ルカ故ナリト云フニ在リ◎依テ按スルニ河川溪水等ノ沿岸所有者ハ其流水ヲ使用シ
 得ヘキハ勿論ナルモ我國古來ノ慣行ニ依レハ溪水ノ如キ流水ニ付キ既ニ一定ノ使用者アリテ之レヲ以
 テ田地養水ト爲セル場合ニ於テハ上流ノ沿岸所有者タリトモ後日ニ至リ新ニ田地ヲ開キ擅ニ其流水ヲ

判旨第二點

使用シ以テ從來使用シ居リタル下流沿岸所有者ノ養水使用權ヲ害スヘカヲサルモノトセリ而シテ此慣
 行ハ裁判所例ニ於テモ亦是認スル所ナリ何トナレハ此慣行ヲ是認セサルニ於テハ溪水等ノ水流ノ上流
 ニ於テ新ニ田地ヲ開ク者アル毎ニ下流ノ田地所有者ハ其養水ヲ失ヒ漸次田地ヲ廢シ畑地ト爲サルハ
 得サルカ如キ地位ニ陥リ管ニ下流沿岸所有者ノ利益ヲ害スルニ止マラス國家ノ公益ヲ害スルニ至レハ
 ナリ故ニ溪水ヲ以テ其田地養水ト爲セル者アルニ於テハ上流沿岸所有者ノ溪水使用權ハ下流所有者ノ
 使用權ヲ害セサル範圍内ニ止リ擅ニ之レヲ使用シ以テ下流所有者ノ從來ノ使用權ヲ害スルヲ得サルモ
 ハトス而シテ本件上告人ハ古昔ヨリ本訴溪水ヲ以テ其所有田地ノ養水ト爲シ來レルモ常ニ其不足ヲ感
 スル處ナルニ被告上告人ハ明治二十八年ニ至リ新ニ上流ニ於テ田地ヲ開キ右ノ溪水ヲ使用シ以テ上告人
 從來ノ專用權ヲ害スルニ付キ被告上告人ニ於テ之レヲ使用スル權利ナシトノ判決ヲ受ク度ト請求スル者
 ナルコトハ原院法定調書ニ徴シテ明カナリ左スレハ原院ニ於テ上告人ハ古來ヨリ本訴溪水ヲ以テ其所
 有田地ノ養水ト爲シタルヤ否被告上告人カ新ニ上流ニ於テ田地ヲ開キ右溪水ヲ其養水ト爲シタルカ爲メ
 果シテ下流ナル上告人田地ノ養水ニ實害ヲ及ホスヤ否ヲ審理シ以テ本件ノ曲直ヲ判斷スヘキ筋合ナル
 ニ事茲ニ出テス單ニ本訴溪水使用權ハ獨リ上告人ニ專屬シテ他人之レヲ使用シ得ヘカヲサル確證ナシ
 トノ理由ノミニ依リ上告人ニ敗訴ノ言渡ヲ爲シタルハ上告人所論ノ如ク不法ノ裁判ニシテ破毀ノ原由
 アルモノトス

右ノ理由ニ依リ原判決全部ヲ破毀スヘキモノトスル以上ハ上告第三點ノ當否ヲ判斷スルノ必要アルナ
シ依テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ尙ホ同第四百四十八條第一項ニ從ヒ更
ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ原院ニ差戻スヘキモノトス

○賣掛代金請求ノ件

明治三十一年第四百六十二號
明治三十二年二月二日第一民事部判決

○判決要旨

一 商業帳簿記入事項ノ眞否ハ事實裁判官カ帳簿ノ體裁記入ノ順序方
法其他諸般ノ事情ヲ審察シ自由ノ心證ヲ以テ判斷スヘキモノトス

第一審 水戸地方裁判所下妻支部 第二審 東京控訴院

上告人 野澤松次郎 訴訟代理人 平野鹿之助

被上告人 佐藤久則 訴訟代理人 野村大五郎

右當事者間ノ賣掛代金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十二年三月十二日言渡シタル判決ニ對シ上告
人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件ハ裁判所構成法第四十九條ノ規定ニ依リ民事第一部及ヒ第二部聯合シテ審問及ヒ裁判ス

理由

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

上告論旨ハ原判文ニ曰ク「右ノ如ク被控訴人カ延拂ヲ以テ控訴人ヨリ買入レタル物品ハ果シテ被控訴
人主張ノ如キ多數ニシテ其延滞代金及ヒ運賃ハ請求ノ如クナルヤ否ヤヲ審察スルニ之レカ證據タル甲
第一號證甲第十四號證乃至十六號證ハ共ニ被控訴人ニ於テ認ムル如ク控訴人ノ商業帳簿ナレハ反對ニ
其記載事項ノ不實ナルコトヲ證セラレサル以上ハ眞實ノモノト推測セサルヲ得ス而シテ右各證ヲ調査
スルニ其結果ハ訴狀ニ添付セル計算書ノ如クニシテ控訴人ハ被控訴人ニ對シテ本件ノ債權ヲ有スルコ
ト甚タ明カナリ」ト是レ全ク商業帳簿ノ證據力ニ關スル現行ノ法則ヲ不當ニ適用シタルモノナリ抑モ
現行法ニ於テハ商業帳簿タルモノニ記載方ヲ規定シタルモノナキヲ以テ今日實際ノ事情ニ於テハ各商
人思ヒ々々ニ勝手ノ記載ヲ爲セリ故ニ後日ニ於テ書入ヲ爲スコトモ得ヘク又期日ノ前後スル所モアル
ヘシ故ニ今日ニ於テ若シ商業帳簿ヲ以テ反證ナキ限リハ眞實ト看做スヘキモノトセハ甚タシキ弊害ヲ
來スチ免レヌ故ニ商業帳簿ニ對シテ反對ナキ限リハ之レヲ眞實ト看做シ得ルノ證據力ヲ與フルニハ商
業帳簿ニ關スル法律ノ實施トナリ各商人ハ必ス帳簿ヲ備ヘ整然且明瞭ニ日々ノ取引其他財産ニ影響ヲ

及ホスヘキ一切ノ事項ヲ記載スルヲ要スル場合ナラサルヘカラス今日ノ法則トシテ當事者隨意ノ記載ナレハ相手方ノ認メサル以上ハ全ク證據力ナキカ少クモ裁判官ノ心證裁斷ニヨリ其證據力ヲ定メサルヘカラス當事者ニ於テ其記載事實ヲ否認シタル以上ハ反對ノ證據ナキ限りハ全然眞實ト看做スヘキノ法定ノ證據力ヲ與フヘキモノニ非サルナリ然ルニ原院カ甲第十四號證乃至十六號證カ被上告人自身ノ隨意ノ記載ニシテ上告人ニ於テ其記載ノ事實ヲ全然否認シタルニ拘ハラヌ反對ニ其記載ノ不實ナルコトヲ證セラレサル以上ハ眞實ノモノト推測セサルヲ得スト判決シタルハ商業帳簿ノ證據力ニ干スル現行ノ法則ナ不當ニ適用シタル失當ノ裁判ナリト云フニ在リ

因テ案スルニ凡商業帳簿ハ相手方ニ於テ其記入事項ヲ否認スルモ絶對的ニ證據力ヲ有セサルモノニ非ラス又之レト同時ニ反證ノ存セサル限リハ其記入事項ヲ以テ當然眞實ナルモノト看做サル可カラサルモノニ非ラス其記入者ノ利益ナル事項ニ付キテ殊ニ然リト爲ス而シテ其記入事項ノ果シテ眞實ナルヤ否ヤハ裁判所カ帳簿ノ體裁記入ノ順序方法其他諸般ノ事情ヲ審案シ自由ノ心證ヲ以テ判斷スヘキ事柄ナリトス現行商法ノ下ニ於テハ各商人ハ完全ナル商業帳簿ヲ備フルノ責任アリ且之レニ記入ス可キ事項ノ規定アルニ拘ハラヌ尙其記入ノ證據力ニ至テハ裁判所カ事情ヲ斟酌シテ之レヲ判斷スヘキモノト爲セリ現行商法實施以前ニ於テハ上告人論スルカ如ク商業帳簿ニ記入スヘキ事項ニ付キ何等ノ規定ナキハ勿論商人ハ之レヲ備ヘサル可カラサルノ責任スラ之レアリシニアラス其當時ニ於テ商業帳簿ハ反證ナキ限りハ必ス充分ナル證據ト爲

サ、ル、可、カ、ラ、サ、ル、モ、ノ、ト、爲、ス、ト、キ、ハ、相、手、方、ノ、危、險、ハ、殆、ト、名、狀、ス、ヘ、カ、ラ、サ、ル、ノ、ミ、ナ、ラ、ス、條、理、上、ヨ、リ、之、レ、ヲ、論、ス、ル、モ、決、シ、テ、正、鵠、ヲ、得、タ、ル、モ、ハ、ト、謂、フ、コ、ト、ヲ、得、ス、而、シ、テ、本、件、訴、訟、ハ、現、行、商、法、實、施、以、前、ニ、起、リ、タ、ル、事、件、ナ、ル、ヲ、以、テ、其、當、時、ノ、法、則、ニ、依、リ、之、レ、カ、當、否、ヲ、判、斷、セ、サ、ル、可、カ、ラ、サ、ル、モ、ハ、ナ、リ、然、ル、ニ、原、判、決、ハ、被、上、告、人、ノ、商、業、帳、簿、ヲ、甲、第、一、號、證、及、甲、第、十、四、號、乃、至、第、十、六、號、證、ノ、記、載、ノ、事、項、ハ、其、不、實、ナル、コ、ト、ノ、證、明、ナ、キ、以、上、ハ、法、律、上、必、ズ、眞、實、ノ、モノ、ト、推、測、セ、サ、ル、ヲ、得、サ、ル、カ、如、ク、說、明、シ、之、レ、ニ、因、テ、被、上、告、人、ニ、利、益、ノ、裁、判、ヲ、爲、シ、タ、ル、ハ、不、法、タル、ヲ、免、カ、レ、ス、而、シ、テ、此、不、法、タル、ヤ、原、判、決、ノ、全、部、ニ、影、響、ヲ、及、ホ、ス、ヲ、以、テ、其、全、部、ヲ、破、毀、ス、ル、ノ、理、由、ト、爲、ス、ニ、足、ル、モ、ト、ス

以上説明スル理由ハ本院カ明治二十八年十月二十二日言渡シタル判決ト相反スルヲ以テ民事聯合部ニ於テ民事訴訟法第四百四十七條第一項及ヒ第四百四十八條第一項ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

○貸金請求ノ件

明治三十一年第三百七十五號
明治三十二年二月二日第二民事部判決

○判決要旨

一 戸主カ隱居ヲ爲ス場合ニ於テ特ニ其財産ノ一部ヲ留保シテ依然自

戸主○隱居○出訴期限規則ノ適用

己ノ所有ト爲シ得ルハ本邦ノ慣例ナリ(判旨第三點)(第四輯第三十一卷所
三百十三號)
判決參看)

一 債務者ニ於テ既ニ債務ヲ履行シタルコトヲ陳述スルモ特ニ出訴期
限經過ノ申立ヲ爲スニアラサレハ裁判所ハ出訴期限規則ヲ適用シ
テ裁判ヲ爲スヘキモノニアラヌ(判旨第四點)

第一審 長野地方裁判所上田支部 第二審 東京控訴院

上告人 立川雲平 訴訟代理人 青柳正喜

被上告人 岩間保藏

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十一年五月十九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨ
リ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之レヲ棄却ス

理 由

上告第一點ハ凡原被告ノ資格ナルモノハ起訴當時訴狀提起ノ記載ニ依リテ拘束セラル、モノダリ然ル
ニ被上告人ハ「亡岩間範藏相續人原告岩間保藏」トシテ起訴シナカラ中途ニ於テ其不當ナルヲ知ルヤ新
ニ訴ヲ提起スルコトヲ爲サスシテ「亡岩間範藏相續人」ノ數字ヲ削除シ岩間範藏家ヲ脱離シテ別戶外籍

タル岩間保藏カ原告タリ削除シタル數文字ハ沿革ノ記載ニ過キスト云フモ一件記録中其變更ヲ爲シタ
ルモノナルコトハ明瞭ナリ然ルニ此變更ヲ不當ニモ認メタル第一審ノ判決ヲ認可シタル原判決ハ家族
制ノ舊慣ヲ無視シテ法則ヲ適用セサル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○本案訴訟記録ヲ査閱スルニ
據日ニ被上告人カ岩間範藏ノ相續人トナリタルニ因リ本案係争ノ債權ヲ被上告人カ承繼シタリトノコ
トニ就テハ當事者間ニ毫モ争ヒナキ事實ナリ而シテ被上告人ノ主張ハ其承繼シタル債權ハ今尙被上
告人ニ留存シアルヲ以テ上告人ニ對シ之レカ辨濟ヲ請求スト云フニ在リ故ニ被上告人カ本按ノ原告タ
ル資格ハ已ニ備ハルモノナレハ本按訴訟提起ノ際被上告人カ現ニ岩間家ノ戸主タルト否トハ其原告タ
ル資格ニ關シ何等ノ影響ヲ及ボサ、ルモノトス然ルヲ以テ第一審裁判所カ其判文ニ「被告ハ原告カ當
初訴狀ノ肩書ニ範造相續人ト記セシヲ以テ起訴其者カ不當ナリト抗辯スレトモ右ハ原告カ主張スル如
ク現時ハ其相續人ニアラサルモ本案ノ債權ハ其相續人ナリシトキニ相續ニ因テ得タルモノナルコトヲ
表示シタルモノニ過キスト認ムルヲ以テ之レアルカ爲メ本訴ニ何等ノ不都合ヲ見ス況ンヤ之レカ削除
ヲ爲シタルニ於テ「ヤ」ト説明シタルハトテ毫モ違法ノ點アルコトナシ從テ原院カ之レヲ認可シタル
モ亦タ不法ノ判決ニアラサルナリ

上告第二點ハ被上告人カ中途ニ於テ亡範造ノ相續人タリシコトヲ削除シ始メヨリ範造家ト族制上關係
ナキ岩間保藏ヲ以テ起訴シ亡範造相續人ノ數字ハ沿革ノ記載ナリトシテ資格ヲ變更シタルハ不當ナリ

トノ點ヲ爭ヒタルコト拘ハラヌ此點ヲ判定セサル原院ノ判決ハ法則ヲ適用セサル不法ノモノナリト云フニ在レトモ○原判文ヲ査閱スルニ原院ハ上告第一點ニ於テ説明シタルカ如ク訴狀ノ肩書ニアル亡岩間範造相續人ナル文字ノ變更ハ被上告人カ本訴ノ原告タル資格ニ於テ何等ノ影響ヲ及ボサル事實ヲ認メ而シテ本訴ノ債權ハ被上告人カ依然保有シ來リタルニ依リ其債務者タル上告人ニ對シ辨濟ヲ求ムルノ權利アル旨ヲ判定シアルコトハ該判文ニ於テ瞭然タリ由是觀之ハ原院カ其資格變更ノ爭點ニ對シ判定ヲ爲サスト云フヲ得ス故ニ原判決ハ上告論旨ノ如キ不法ナキモノナリ

判旨第三點

上告第三點ハ假リニ一步ヲ讓ルモ戸主カ退隱スルトキハ一切ノ權義ハ家名ト共ニ其跡相續人ニ移ルヲ以テ慣例トストハ御院カ明治二十九年五百十四號ノ判決ニ於テ判決セラレタル至當ノ判例ナリ乃チ上告人カ債權ノ貯存(原院ノ判旨ニ假據シ)セルコトヲ認知シタリトノ證憑ナキ以上ハ表見ノ相續人ヨリ訴求セラルヘキハ至當ナルニ此ノ點ノ如何ヲ論及セスシテ岩間保藏ノ起訴權アルモノ、如ク判決シタルハ不法ニ法則ヲ適用シタルモノナリト云フニ在レトモ○本院ニ於ケル明治二十九年第五百十四號ノ判例ハ其上告ニ係ル原判決ニ於テ隱居ニ因ル家督相續ハ絕對ニ其資産ヲ相續人ニ讓與スヘキモノニアラスト判定シタルカ故ニ之レニ對シ本院カ隱居ニ因ル家督相續ハ必スシモ退居者カ一部ヲ所有スルヲ許サルニアラサルモ戸主カ退隱スルトキハ一切ノ權義ハ家督ト共ニ其跡相續人ニ移ルヲ以テ普通ノ慣例ナリト説明シタルモノニシテ此判例ハ隱居ニ於テ其一部ノ財産ヲ留存スルコトヲ許スノ慣例ナリ

認メタルモノナリ故ニ原院ニ於テ戸主カ退隱スル場合ニ於テ必ラスシモ其有スル總テノ權利ヲ相續人ニ讓ラサル可カラサルモノニアラサルコトハ本邦ノ慣例ナリト説明シタルハ彼此同一意ニ歸シ毫モ牴觸シタルモノニアラス然而シテ原院ハ岩間範造ノ供述其他ノ證憑ニ據リ本案係争ノ債權ヲ被上告人カ涉ニ讓與セスシテ自己ニ留存セシコトヲ認メ以テ其請求權アルコトヲ判定シタルモノナレハ原判決ハ上告所論ノ如キ不法ナキモノナリ

上告第四點ハ本件債務ノ辨濟期日ハ甲第一二號證ニ明記セルカ如ク明治二十三年十一月二十六日ニシテ被上告人カ本訴ヲ提起セシハ明治二十年四月八日ナリ即チ辨濟期日ヨリ五年五ヶ月ノ後ニ於テ起訴セシモノナルヲ以テ當時ノ法律タル出訴期限ヲ經過シタル出訴ニ係ルヲ以テ上告人ハ既ニ其債務ヲ辨濟シ了リタリトノ抗辯ヲ爲セリ故ニ良シ乙第一號證ニシテ能ク辨濟ノ事實ヲ立證スルニ足ラストスルモ期限ノ經過ニ依リ上告人ハ其辨濟ノ事實ヲ立證スルノ責任ナキモノナルニ原院カ參考人岩間涉ノ陳述ニ據リ上告人ノ舉證乏シキモノト爲シ此辨濟ノ抗辯ヲ排斥セラレタルハ法則ヲ適用セサル不法アルヲ免レサルモノト云フニ在レトモ○出訴期限經過ノ效ハ當事者ノ申立アルニアラサレハ裁判所ニ於テ出訴期限規則ヲ適用スヘキモノニアラス而シテ上告人ハ原院ニ於テ單ニ岩間涉ニ對シ本訴係争ノ負債ヲ辨濟シタリトノ申立ヲ爲シタルノミニシテ出訴期限經過ノコトハ毫モ申立タルコトナキハ原院ノ口頭辯論調書ニ於テ明カナルノミナラス當院ニ於テ上告人モ亦タ自ら供述セル所ナレハ原院カ出訴期間

規則ヲ適用セザリシハ當然ニシテ原判決ハ不法ニアラサルナリ
右説明ニ來ルカ如ク上告ハ總テ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ照ラシ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

○謝金請求ノ件

明治三十一年第二百十一號
明治三十二年二月七日第一民事部判決

○判決要旨

一事實裁判所ハ證人ノ陳述シタル各事項ニ付キ一々採否ノ說明ヲ與ヘサルヘカラサルノ責務ナシ(判旨第五點)

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 小島忠里

被上告人 八木伊助 訴訟代理人 平岡萬次郎

右當事者間ノ謝金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年四月六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理由

上告論旨第一點ハ原院カ原判決「事實及爭點」ノ部ノ末尾ニ「爭點ハ會テ當事者間ニ爲サレタル訴訟代理委任ニ付謝金チ一千圓ト爲ス合意ノ成立シタルモノナルヤ否ヲ審究スルニ在リ」ト明示シ「理由」ノ部ノ末尾ニ「當事者間ノ委任事項ニ付キ報酬金一千圓ノ合意成立セサルモノトシ主文ノ如ク判決セリ」ト明示シタルハ辯護士カ訴訟代理ノ事務履行ノ後ニ至リ委任者ニ報酬ヲ請求スル權利ヲ豫メ報酬金額ヲ契約シタル場合ニ限リタルモノニシテ不當利得ノ法則即チ「他人ノ勞務ニ依リ利益ヲ受ケ之カ爲メニ他人ニ損失ヲ及ホシタルモノハ其利益ノ存スル限度ニ於テ之ヲ返還スル義務ヲ負フ」トノ法則ヲ適用セサル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○原判決ノ摘示スル事實及ヒ爭點其他本件ノ記録ニ徴スルニ本訴ハ全ク訴訟委任ノ報酬ノ契約ヲ原因トスルモノニシテ不當利得ノ事由ノ如キハ原院ニ於テ會テ主張セラレザリシコト明白ナレハ原判決カ不當利得ノ法則ヲ適用セザリシハ洵ニ相當ナリトス依テ本點ノ論旨ハ其理由ナシ

其第二點ハ本件訴訟代理委任契約ニ付委任者被上告人ハ受任者上告人ニ對シ報酬ヲ與フル義務ヲ負フ

コトヲ自白シタリ即チ義務ノ原因ニ付テハ當事者間ニ争ヒナク只其數額ニ付テノミ争ヒアルモノナル
 カ故ニ原院カ金額ニ付テノ合意成立セストシテ上告人ノ請求金額ヲ全部排斥シタルハ不當ニ事實ヲ認
 定シタル不法ノ判決ニアラザレハ契約法理ヲ適用セサル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○原院ハ上
 告人ノ供述ニ依リ上告人ヲ以テ専ラ契約ニ基キ謝金一千圓ヲ請求スルモノニシテ他ノ金額ヲ請求スル
 ノ意思ナキモノト爲シテ判決ヲ與ヘタルコトハ原院口頭辯論調書ニ記載スル裁判長ト控訴人(上告人)
 トノ問答及ヒ原判決ノ摘示スル争點ニ徴シテ明白ナリ故ニ原院カ謝金一千圓ヲ授受スヘキ契約成立セ
 サルモノトシ上告人ノ請求全部ヲ排斥シタルハ相當ニシテ決シテ上告論旨ノ如キ不法ノ點アルコトナ
 シ

其第三點ハ原判決理由ノ部ニ於テ「各自其主張及防禦ノ事實ヲ證スルハ前審ノ證人ノ證言ニ在リ然ル
 ニ證人松延正次ノ證言ハ控訴人ハ一千圓ノ報酬ヲ求メ各務平七ハ之ヲ六百圓ニ減少センコトヲ請ヒシ
 モ控訴人承諾セサリシト云ヒ證人各務平七ハ控訴人ニ對シテ三百圓ノ報酬ヲ與フルコトヲ申出テ其承
 諾セサリシ迄ニテ一千圓ヲ與ヘヨトノ申込ハ十月二十日ニシテ即チ判決後初メテ聞キタリト云ヒ兩名
 ノ陳述逕庭アリテ一ハ控訴人ノ利益一ハ被控訴人ノ利益ナル證言ナリ斯カル場合ニ於テハ其證據カ均
 等ニシテ優劣ナシ然ラハ則チ控訴人ハ義務ヲ求ムル主張者ノ地位ニ在ルヲ以テ右自己ニ利益ノ證言ニ
 照應スヘキ證據ヲ舉示セサル可カラサルニ他ニ證據ノ視ル可キモノナキヲ以テ當事者間ノ委任事項ニ

付報酬金一千圓ノ合意成立セサルモノトシ主文ノ如ク判決セリト判決シタルハ原院ニ於テ上告人カ
 提出シタル「被上告人カ上告人ヨリ報酬金一千圓ノ請求ヲ受ケタル後依然上告人ナシテ口頭辯論ニ出
 席セシメタル行爲ハ上告人ノ請求ヲ承諾シタル證據トスルニ充分ナリ」トノ舉證ヲ無視シ即チ提出シ
 タル證據ヲ提出セスト云フモノニシテ探證ノ法則ニ違背シタル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ○原
 判文其他訴訟記録ヲ閱スルニ原院カ上告人(控訴人)ノ證據トシテ論述シタル事實ヲ無視シタリト視ル
 ヘキ事蹟一モ存セサルヲ以テ果シテ之ヲ無視シテ判決ヲ爲シタルモノト認ムルニ由ナシ而シテ原判決
 理由ノ末尾ニ「然ラハ即チ控訴人ハ義務ヲ求ムル主張者ノ地位ニ在ルヲ以テ右自己ニ利益ノ證言ニ照
 應スヘキ證據ヲ舉示セサル可カラサルニ他ニ證據ノ視ルヘキモノナキヲ以テ當事者間ノ委任事項ニ付
 報酬金一千圓ノ合意成立セサルモノトシ主文ノ如ク判決セリ」トアルニ由リテ之ヲ觀レハ原院ハ上告
 人カ充分ノ證據トシテ論述スル事實ハ未ダ以テ上告人ノ主張ヲ證明スルニ足ラサルモノト爲シテ之ヲ
 排斥シタルモノナルコト自ラ明白ナルヲ以テ本點ノ論旨モ亦タ其理由ナシ

其第四點ハ原院ニ於テ上告人カ辯論シタル數多ノ攻撃方法ノ中ノ主要ノ攻撃方法タル「辯護士ハ訴訟
 代理人ノ事務終了ノ時ニ至レハ謝金額ノ豫約有無ニ拘ハラズ其事件ノ大小難易ヲ標準トシ相當ノ謝金
 額ヲ請求スル權利ヲ有ス」トノ攻撃方法ニ對シ原裁判所カ判斷ヲ與ヘサリシハ民事訴訟法第二百三十
 條第一項ニ違背シタル不法ノ判決ナリ上告人カ右ノ攻撃方法ヲ提出シタルコトハ控訴狀中「不服ノ程

度及控訴ヲ爲ス旨ノ陳述」ノ部第四點ニ「辯護士ハ訴訟依頼人ニ對シ訴訟代理事務終了ノ時ニ至レハ謝金額ノ豫約有無ニ拘ハラズ其事件ノ大小難易ヲ標準トシ相當ノ謝金額ヲ請求スル權利ヲ有スルモノナルコトヲ遺忘シ「原告ニ於テ被告ニ對シ金一千圓ヲ請求スヘキ權利ナキモノニ付主文ノ如ク判決ス」ト説明シタルハ不當ナリ」ト記載シ又原院口頭辯論調書中「辯論」ノ部ニ「控訴人(上告人)ハ凡ソ訴訟委任ヲ爲ス人カ田夫野人ニテ辯護士ヲ待遇スルノ道ヲ知ラサルモノナレハ初メニ謝金ノ契約書ヲ取ルモ然ラサル人ニテ待遇ノ道ヲ知ル人ハ契約書ハ取ラス」ト記載シタルヲ以テ明確ナリ此點ニ付キテハ御院ノ判例ヲ援用スト云フニ在レトモ○上告人陳述スルカ如キ攻撃方法ハ控訴狀中ニ記載シアルモ原院ノ口頭辯論ニ於テハ之ヲ陳供セザリシモノト認メサルヲ得ス何トナレハ原院口頭辯論調書ニハ「控訴人(上告人)ハ原判決ニ據示スル事實ノ通り申立タリ」トアリ而シテ第一審判決ニハ上告人陳述スルカ如キ攻撃方法ノ記載ナシ又原判決ノ摘示スル所ニ依レハ當事者間ノ爭點ハ訴訟代理委任ニ付キ謝金チ一千圓ト爲ス合意ノ成立シタルヤ否ヤノ一點ニアリト爲シ他ニ爭點ノ存在セザリシヲ知ルコトヲ得可ケレハナリ故ニ本點ノ論旨ハ結局提出セザリシ攻撃方法ニ對シ判斷ヲ與ヘサルコトヲ以テ原判決ヲ批難スルニ歸着スルヲ以テ其理由ナシ

其第五點ハ原判決「理由」ノ部ニ於テ「明治三十年十月八日口頭辯論期日前即チ同月四日ニ至リ報酬金額ヲ取極ムヘキ必要ヲ感シ右平七ヲシテ控訴人ニ承諾セシム其結果ニ付控訴人ハ一千圓ノ報酬額ト爲

ス合意成立スト主張シ被控訴人ハ否ラスト防禦スルモノニシテ各自其主張及防禦ノ事實ヲ證スルハ前審ノ證言ニ在リ然ルニ證人松延正次ノ證言ハ控訴人ハ一千圓ノ報酬ヲ求メ各務平七ハ之ヲ六百圓ニ減少センコトヲ請ヒシモ控訴人承諾セザリシト云ヒ證人各務平七ハ控訴人ニ對シテハ二百圓ノ報酬ヲ與フルコトヲ申出テ其承諾セザリシ迄ニテ一千圓ヲ與ヘヨトノ申込ハ十月二十日ニシテ即チ判決後初メテ聞キタリト云ヒ兩名ノ陳述逕庭アリテ一ハ控訴人ノ利益一ハ被控訴人ノ利益ナル證言ナリ斯ル場合ニ於テハ其證據カ均等ニシテ優劣ナシ然ラハ則チ控訴人ハ承諾ヲ求ムル主張者ノ地位ニ在ルヲ以テ右自己ニ利益ノ證言ニ照應スヘキ證ヲ舉示セサルヘカラサルニ他ニ證據ノ視ルヘキモノナキヲ以テ當事者間ノ委任事項ニ付報酬金一千圓ノ合意成立セサルモノトシ主文ノ如ク判決セリ」ト判決シタルハ原院ニ於テ上告人カ提出シタル證據即チ證人各務平七ノ陳述中上告人カ被上告人ヨリ訴訟代理ノ委任ヲ受ケタル事件ノ口頭辯論前ニ謝金一千圓ヲ請求シ居リタルコトヲ被上告人ヨリ聞キタリトノ證言ヲ遺脱シ立證ナシトシテ敗訴ヲ言渡シタルモノナルカ故ニ探證ノ法則ニ違背シタル不法ノ判決ナリ右原院ニ於テ上告人カ證人各務平七ノ證言ヲ證據トシテ提出シタルコトハ原院口頭辯論調書「證據調」ノ部ニ左ノ通り記載アルヲ以テ明確ナリ「カ、ミ平七ノ證言ニテ千圓ヲ請求シテ居リシコト(中略)ヲ證ス」右提出シタル證人各務平七ノ證言ハ左ノ如ク證人各務平七訊問調書中第四問答ノ中「親族ヨリ神戸ノ太田辯護士ヲ依頼スルコトヲ勸メラレ依頼シタルニ小島ハ立腹シ他ノ人ヲ依頼スルナラハ斷ル就テハ金千

圓吳レトノ事ニテ云々(中略)其上松延ヲ伊助カ呼ヒニ遣リ話ヲ聞クニ大同小異コテ自分ニ依頼スルト
 ノ事ナリ然ラハ其太田ヲ斷ハレハ宜敷ナラン斷レハ自分カ應スルカ應セサルカ知ラサルモ公平無私ノ
 眼ヲ以テ相當ノ報酬ヲ定ムヘシト申シタリ」同調査中第六第七問答「問千圓ニ減スルコトヲ聞キシヤ答
 聞キタルコトナシ尤モ他ノ辯護士ヲ頼ミタルトキニ千圓ト申シタルコトヲ聞ケリ問其事ハ何人ヨリ聞
 キシヤ答松延正次八木伊助ヨリ聞ケリ」此上告理由ニ付御院ノ御判例ヲ引用スト云フニ在レトモ○原
 院カ證人各務平七ノ陳述ノ一部ヲ遺脱シテ判決ヲ與ヘタリト視ルヘキモノナシ元來事實裁判所ハ證人
 ハ陳述全體ヲ審察シ其證據力ノ如何ヲ判斷シ以テ爭點ヲ判定スレハ充分ニシテ證人ノ陳述シタル各事
 項ニ付キ一々採否ノ説明ヲ與ヘナル可カラサルモノニアラス故ニ原判決ニ於テ上告人援引セシ證言ニ
 付キ特ニ排斥ノ理由ナキモ之ヲ以テ證言ヲ遺脱シテ裁判シタルモノト謂フコトヲ得ス故ニ本點ノ論旨
 モ亦タ其理由ナシ

以上辯明スル如ク本件上告ハ一モ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條ニ從ヒ棄却スヘキモノト

○積荷損害要償ノ件

明治三十二年第二頁四十四號
 明治三十二年二月八日第三民事部判決

○判決要旨

一 運送人ニ於テ同業者カ引受ケタル貨物ヲ引受ケ遞次運送ヲ爲スト
 キハ各運送人ハ荷主ニ對シテ連帶シ運送ニ付テノ責任ヲ負擔スル
 ナ以テ一般ノ慣行ナリトス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 宮内惣右衛門 訴訟代理人 丸岡東治

被上告人 山中友七

右當事者間ノ積荷損害要償事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年四月十日言渡シタル判決ニ對シ上告代
 理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ且被上告人ハ期日出頭セサルニ付闕席ノ儘判決アリタキ旨申立
 テタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ差戻ス

理由

上告理由第一點ハ原院ハ本件ニ於テノ貨物運送ハ先ツ上告人カ貨主ヨリ運送ノ委託ヲ受ケ若干ノ運送

運送人ノ責任ニ連帶

チナシタルノ後次ニ之レヲ伊豫組ニ委託シテ若干ノ運送ヲサシメ伊豫組ハ又事實ヲ認め而シテ本件ノ如ク運送品ニ滯損等ノ損害アリテ第一ノ受託者ナル上告人(被控訴人)ニ於テ荷受主ニ對シ賠償ヲナシタリト主張シ其賠償ヲ要スル場合ニアツテハ先ツ第二ノ運送者ナル伊豫組ニ對シ要求スヘキ順序ナルニ之レヲ攔ぎ直ニ被上告人(控訴人)ニ對シ賠償ヲ求ムルハ其當ヲ得サルモノトノ理由ヲ付セラレタリ要スルニ運送人ノ過失ニ據リ貨物ニ損害ヲ加ヘタルトキハ貨主ハ自ラ委託シタル第一ノ運送人ニ其賠償ヲ求メ第一ノ運送人ハ其賠償ヲ爲シタル後第二ノ運送人ニ更ニ求償スヘク第三第四ノ遞次後者運送人ニ賠償ヲ求ムヘキモノニシテ即チ委託ノ順序ニ依ルニアラサレハ賠償ヲ求ムヘカラスト云フニ在リ抑モ或運送人ニ於テ引受ケタル運送ヲ次テ他ノ運送人之レヲ引受ケ即チ數人相次テ運送ヲナス場合ニ於テハ各運送人ハ貨物ノ損害ニ付キ連帶シテ賠償ノ責ニ任スルハ運送營業ニ關スル爭フヘカラサルノ法理ナリ故ニ各運送人ハ委託者ニ對シテ委託者ノ選擇スル運送人ガ賠償ノ要求ニ應セサルヘカラスナルナリ然レトモ運送人間ニ於テ畢竟損害ヲ負擔スヘキ者ハ損害ヲ生セシメタル過失者ニアルコト勿論ナリ又連帶債務者中ノ一人ガ債權者ニ債務ノ履行ヲナシタルキハ他ノ債務者ニ對シ其負擔分ニ付キ求償ヲナシ得ルコトハ連帶ノ性質上言フナ俟タサル處ナリ本件ニ於ケル損害ハ第三運送人タル被上告人ノ過失ニ因ツテ生シタルコト明カナリ然レトモ上告人ハ貨主ヨリ其賠償ヲ要求セラレタルヲ以テ連帶責任上止メテ得ス貨主ニ對シ其責任ヲ盡シタルナリ即チ連帶債務者ノ一人ナル上告人ガ債務ノ辨濟

ヲナシタルヲ以テ上告人ハ他ノ債務者ノ負擔分ヲ求償スヘキノ權利ヲ生シタルナリ原院カ上告人ト被上告人トノ中間ニ位ストナシタル伊豫組並ニ被上告人ヲ以テ其負擔ヲ區分スヘキモノナリトセハ上告人ハ各自ニ對シ求償スヘキ筋合ナレトモ本件ノ損害ハ被上告人ノ過失ニ依テ生シタルモノナルヲ以テ上告人並ニ伊豫組ハ貨主ニ對シ責任ヲ有スルノミニシテ損害ノ負擔ハ全然被上告人一人ノ責任ニ歸スルヲ以テ上告人ハ伊豫組ニ請求セシテ全部負擔者タル被上告人ニ對シ求償權ヲ行使シタルモノナリ故ニ上告人カ被上告人ニ對シ賠償ヲ求メタルハ決シテ其當ヲ失シタルモノニアラス然ルニ原院ハ運送委託ノ順序ニ依テ賠償ヲ求ムヘキモノトシタルハ運送營業ニ關スル法理ヲ誤リタルモノナリト云フニ在リ○依テ審案スルニ運送人ニ於テ同業者カ引受ケタル運送物ヲ引受遞次運送ヲ爲ストキハ各運送人ハ荷主ニ對シ連帶シテ運送ニ付テノ責任ヲ負擔スルハ運送人間一般ノ慣行ナリ此慣行タルヤ運送人營業上ノ必要ヨリ生シタルモノナレハ各運送人ニ於テ之レヲ遵守セサルヘカラス何トナレハ此慣行ヲ是認セサルニ於テハ荷主ニ對スル擔保尠ク之レニ損害ヲ被ムラシムル虞アリ從ツテ運送人ハ荷主ニ對シ信用ヲ得ル能ハス爲メニ運送業ノ發達ヲ妨ケラレ其利益ヲ見ルコト難タケレハナリ運送人間ニ於テ此慣行アル以上ハ損害ヲ受ケタル荷主ハ其運送ヲ爲シタル運送人中ノ一人又ハ數人ヲ選擇シテ損害賠償ノ請求ヲ爲シ得ルハ勿論其損害ノ賠償ヲ爲シタル運送人ハ荷物ニ對シ實際損害ヲ加ヘタル運送人ニ向ツテ其求償ヲ爲シ得ヘキハ法理ノ當然ナリ然ルニ原院ニ於テ運送人間ノ連帶責任ヲ否認シ第一ニ荷物

運送ノ委託ヲ受ケタル運送人ニ於テ損害ヲ賠償シタルトキハ第二ノ運送人コ係リ其求償ヲ爲シ第二ノ運送人ハ第三ノ運送人ニ對シ遞次求償ヲ爲スヘキ筋合ナルヲ以テ第一ノ運送人タル上告人コ於テ第二ノ運送人ヲ差擱キ直ニ第三ノ運送人タル被上告人ニ對シ求償ヲ爲スハ不當ナリトシ上告人敗訴ノ言渡ヲ爲シタルハ上告人所論ノ如キ不法ノ裁判ニシテ破毀ノ原由アルモノトス既ニ此點ニ依リ原判決ヲ破毀スヘキモノトスル以上ハ上告理由第二點ニ付キ説明スルノ必要アルナシ仍テ之レカ説明ヲ爲サス以上説明スル如クナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ依リ原判決ヲ破毀シ同第四百四十八條第一項ノ規定ニ從ヒ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大坂控訴院ニ差戻スヘキモノトス

○預金請求ノ件

明治三十一年第三百九十四號
明治三十二年二月九日第一民事部判決

○判決要旨

一 不確定ナル事實ノ到來ヲ以テ義務履行ノ期限ト爲スコトヲ得サルモノニアス(判旨第一點)

第一審 根室地方裁判所

第二審 函館控訴院

上告人

長谷川 善次郎

訴訟代理人

石原毛登馬

被上告人

蛭子 銀造

右當事者間ノ預金請求事件ニ付函館控訴院カ明治三十一年六月二十二日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ今般破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之レヲ棄却ス

理 由

上告論旨第一點ハ原判決ハ甲第一號證ノ「御出京ノ節云々」トアルヲ期限ヲ定メタルモノナリト認定セラル其理由トスル所ハ「被控訴人先代カ明治十五年二月十三日頃ニ在テハ舊根室縣廳ニ奉職中ノモノナリシ事實ナレハ官吏タル限リハ固ヨリ永ク同所ヲ立去ルヘカラスト期シタルニ非サルヲ推知スルニ足ルノミナラス其際又同人カ出京ヲ要スル事ノ爲メ根室ヲ引拂ハサルヘカラサルヲ豫想シ其間該證ノ金員ヲ控訴人ニ預ケタルモノト認メサルヲ得ス云々」ト云フニ在レトモ抑期限ヲ定ムルニハ或事實ノ發生ニ係ラシメタル場合ニハ其豫想ノ事實カ必ス發生スルコトカ確定シ居ラサルヘカラス否ラズンハ期限ニ非スシテ寧ロ條件ト解スヘキナリ原判決ノ謂ユル上告人先代カ根室縣ノ官吏タル事實ノミニ因リテハ同人カ該地ニ永住スルヤ否根室ヲ引拂フヤ否出京スルヤ否等ノ事實ヲ推定スルニ足ラサル

義務履行ノ期限○不確定ナル事實ノ到來

カ故ニ證書ニ謂ユル「出京」カ確定ノ事實ナリト云フコトヲ得ス又當事者ニ於テ出京ヲ要スル事ノ爲メ根室ヲ引拂ハサルヘカラサルヲ豫想シテ預金ヲナシタリトモ當事者ノ豫想ノミニテ事實カ豫想ニ反スルコトナキニ限ラサルヲ以テ是亦出京ノ事實カ確定シ居タルヘキコトヲ認ムルニ足ラス果シテ然レハ出京ノ節ナル文字ハ必ス發生スヘキ確定ノ事實ニ係ラシメタルモノニ非ルヲ以テ之レヲ期限ナリト認定スルハ法則ヲ不當ニ適シタル不法アリ又出京スヘキ事實ヲ以テ必ス發生スヘキ事實ナルコトヲ確定セスシテ期限ヲ定メタルモノト判定セラレタルハ理由ヲ付セサル不法アリト云フニ在レトモ〇或不確定ナル事實ノ發生ヲ以テ義務履行ノ時期ト爲ストキハ期限ヲ定メタルニ非スシテ單ニ條件ヲ付シタルモノトス可キ法理法則ノ存スルコトナシ從テ不確定ナル事實ノ到來ヲ以テ期限ト爲スヲ得サル謂ハレナケレハ原院カ必然發生ス可キ事實ナリト謂フヲ得サル上告人先代長谷川義方カ根室引拂ノ時期ヲ以テ本訴預ケ金返濟ノ期限ト爲シタルモノト認メタルモ毫モ論告ノ如キ法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ廉アルコトナシ又原判決ハ出京即チ原院ノ解釋ニ因リ根室引拂ノ事實カ必然發生ス可キモノナルカ故ニ其時期ヲ以テ期限ナリトシタルニアラサレハ後段ノ論告ハ原判旨ニ副ハサルモノニシテ其理由ナシ

同第二點ハ原判決ハ甲第一號證ニ明カニ「御出京ノ節云々」トアリテ疑義ナキニ拘ハラス根室引拂ノ時期ヲ以テ返濟期限ヲ定メタルモノト解釋セラレタルハ契約解釋法ニ違フ違法アリト云フニ在レトモ〇

本論告ハ要スルニ事實裁判所ノ職權ニ屬スル證書ノ解釋ヲ非難スルニ過キサレハ其理由ナキモノトス同第三點ハ原判決ハ上告人先代カ明治十七年八月山形縣屬ニ轉シタル事實アルニヨリ根室引拂ヒナル期限ハ到來シタリト認メラレタリト雖モ此事實ハ果シテ當事者カ契約ノ當時ニ豫想シタルモノニ屬スルヤ否ヤヲ確定セサルヘカラヌ何トナレハ豫想外ノ地ニ行クカ爲メニ根室引拂ヲナスモ豫定ノ期限到來シタリト云フヘカラサレハナリ然ルニ之ヲ確定セザリシハ理由ノ不備ナリト云ヒ」第四點ハ原判決上告人先代カ出京ヲ要スル事ノ爲メ根室ヲ引拂ハサル可カラサルヲ豫想シテ其間暫ラシ金員ヲ被上告人ニ預ケタルモノト認メラレナカラ其後文ニ至リ甲第一號證ニ「御出京ノ節」トアルハ根室引拂ノ時期ヲ返濟期限トシタルモノト解釋スルヲ相當トナス旨判示セラレ單ニ根室引拂ハ出京ニ必ラス伴隨スヘキ事實ニ非サルヲ以テ根室ヲ引拂フモ引拂ハサルモ免ニ角出京ヲ要スル事實ノ到來ヲ以テ期限ナリトセサルヘラス故ニ出京ノ節トハ即チ期限ヲ定メタルモノトスル原判旨ヲ正當ナリトシテモ單純ナル根室引拂ヒハ期限ノ發生ニ非ス然ルチ原判決ハ單ニ根室引拂ノ時期ヲ返濟期限ト定メタルモノト解釋セラレタルハ不法ニ事實ヲ確定シタル違法アリト云フニ在リ〇然レトモ原院ハ被上告人先代長谷川義方カ出京ヲ要スル爲メ根室ヲ引拂ハサルコトヲ得サル可カラサルコトヲ豫想シテ上告人ニ甲第一號證ノ金員ヲ暫ク預ケタルコトヲ認メ其所謂出京トハ單ニ東京ヘ行ク意ニ非スシテ何レノ地ヘ移住スル爲メナルトチ問ハス單ニ根室引拂ノコトヲ意味スルモノナリト解釋シタルハ判決ノ全趣旨殊ニ「御出京ノ

節云々トアルハ義方カ根室引拂ノ時期ヲ以テ返濟期限ニ定メタルモノト解釋スルチ相當ト爲ス云々」ナル文詞ニ徴シテ瞭然タリ然レハ義方カ東京以外ノ地ニ行ク必要生シタルカ爲メ根室ヲ引拂フ時チモ本訴金員ノ返濟期限ト爲ス當事者ノ最初ヨリノ意思ナリト認メタルコト明カナレハ上告論旨第三點ニ謂フカ如キ不法ノ裁判ニ非ス從テ同第四點ハ原判旨ニ副ハサル攻撃ナルチ以テ是亦其理由ナシ以上説明ノ如クナルチ以テ本件上告ハ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ之ヲ棄却スヘキモノトス

○宅地建家賣渡代金請求ノ件

明治三十一年第四百十二號
明治三十二年二月九日第一民事部判決

○判決要旨

一 雙務契約者ノ一方カ一部ノ履行ヲ爲ササル場合ニ於テハ他ノ一方ハ之ニ應スル一部ノ履行ヲ拒ムチ得ヘキモ他ニ特別ノ理由ナキ限リハ之ヲ以テ全部ノ履行ヲ拒ムコトヲ得ス

第一審 長野地方裁判所 上田支部 第二審 東京控訴院
上告人 和田助左衛門 訴訟代理人 岡崎正也
林登金太

被上告人 小山清左衛門

訴訟代理人 立川雲平

右當事間ノ宅地建家賣渡代金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年七月六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告第二點ハ原院ニ於テ「又控訴人^{上告}ハ被控訴人^{被上}ハ貳拾圓ヲ付支拂チ拒ミ得ルモ全部ノ支拂チ拒ムコトヲ得サル者ナリト主張スレ共被控訴人^{被上}ハ控訴人^{上告}カ乙第一號證ノ契約ニ違背シタルチ以テ代金全部ノ支拂チ拒ミタルハ當然ナルノミナラス且其代金ハ分ツヘキ者ニアラサルチ以テ控訴人ノ主張ハ採用スルチ得ス」ト説明セラレタレトモ乙第一號證中第一第二契約中第一ニ關係ナキ原院ニ於テ「瓦葺木造平家建物一棟」此坪拾三坪」ハ訴外人小山宗兵衛賣主ナリシ事ハ當事者間ニ異議ナキ處ナリト認定セラレタル乙第一號證第二號^甲號ノ建物味噌藏カ小山拾吉ト無期限賃貸ノ契約アルチ以テ乙第一號證契約違背ト主張セルモノニシテ其建家ハ代金ニ拾圓ト定メ小山宗兵衛ヨリ被上告人へ賣渡ニ係ルモノニシテ其代金ハ既ニ貳拾圓ト分割明定シアルノミナラス本訴代金ハ乙第一號第一ノ物件代金ヲ甲一號約旨ニ基キ要求スルモノナレハ殘代金四百二拾五圓全部支拂拒絶ノ權利之レナキニモ拘ラス

原院ニ於テハ全部支拂ヲ拒ミタルハ當然ニシテ且ツ其代金ノ分割シアルニ之ヲ分ツヘカラサルモノト判決セラレタルハ賣買代金支拂拒絶ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ。案スルニ雙務契約者ノ一方カ其債務ノ履行ヲ提供スルマテハ他ノ一方ニ於テ自己ノ債務ノ履行ヲ拒ムコトヲ得ヘキハ普通ノ法理ナリ從テ其一方カ一部ノ履行ヲ提供セサル場合ニ於テハ他ノ一方ハ之レニ應スル一部ノ履行ヲ拒ムコトヲ得ヘキニ他ニ特別ノ理由アルコアラサルニ於テハ決シテ全部ノ履行ヲ拒ムコトヲ得ヘキニアラス然リ而シテ原文ノ要旨ハ當事者間ニ賣買セシ物件中乙第一號證ノ一ニ記載シアル瓦葺二坪二合但シ味増部屋トアル建物一棟及ヒ乙第一號證ノ二ニ記載シアル瓦葺平家建物一棟ハ小山捨吉カ永借權ヲ有スルヲ以テ乙第一號ノ約旨ニ基キ上告人ニ於テ其永借權ヲ排除スヘキ義務ヲ負フモノナルニ上告人ハ其義務ヲ盡サ、ルヲ以テ被上告人ハ其買受代金全部ノ支拂ヲ拒ミタルハ當然ナリト云フニ在リ然レトモ上告人カ排除ノ義務ヲ盡サ、リシハ其一小部分ナル二棟ノ建物ニ關スルノミナレハ其代金ノ支拂ニ於ケルモ亦タ其義務不履行ノ限度ニ應スル一部ヲ拒ミ得ヘキニ過キサルコトハ前顯ノ法理ニ照シテ明カナリ然ルニ原院カ前顯判旨ノ如ク其代金全部ノ支拂ヲ拒ミタルヲ當然ナリト判定シタルハ違法ナリ若シ夫レ原院判旨ニ「此永賃貸借ノ契約アルカ爲メ被控訴人ハ現ニ本訴係争物ノ全部ヲ使用スルコト能ハサルニ至リシ事實アルヲ以テ」云々トアル文詞ヲシテ一部ノ賃貸借アルカ爲メニ其他ノ物件モ使用スル能ハストノ意ヲラシメハ其障礙カ全部ニ及フヲ以テ原院カ其全部

ノ代金ヲ拒ミタルヲ當然ナリト判定セシハ不法ニアラスト雖トモ之レニ反シ一部ノ賃貸借ノ存スル部分ヲ使用シ得サルカ爲メニ(他ノ部分ハ使用シ得ルモ)其全部ノ使用ヲ全フシ得サリシトノ意ヲラハ其障礙全部ニ及ホサ、ルヲ以テ其使用シ得サル物件ニ應スル代價ノ支拂ヲ拒ミ得ヘキノミ原院判旨ハ其執レナルヤナ明知シ得ヘカラサルヲ以テ此點ヨリ論スレハ理由不備ノ瑕瑾アルノミナラス原院判旨ニ「其代金ハ分ツ可キ者ニアラサル以テ」云々トアレトモ代金ノ如キハ性質上可分ナルカ故ニ當事者ノ契約ニ於テ一部ノ履行ヲ許サ、ルカ如キ場合ハ格別本案ノ場合ニ於テ當然不可分ナリト云フヲ得サルモノナリ然ルニ原院ハ何ノ故ニ其不可分ナルヤノ理由ヲ附セザリシハ是亦理由不備ノ瑕瑾アリ然ルヲ以テ原院判旨ハ結局破毀ノ原由アルモノトス已ニ此點ヲ以テ原院判決ヲ破毀スヘキモノタルニ由リ他ノ上告點ニ對シ之レカ説明ヲ爲スノ要ナシ

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項及ヒ第四百四十八條第一項ニ照ラシ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

○鑛業特權無効確認請求ノ件

明治三十一年第二百四十三號
明治三十二年二月十日第二民事部判決

○判決要旨

一 確認訴訟ハ當事者間ノ法律關係ヲ即時ニ確定スルノ必要ナキ場合
ニハ之ヲ提起スルヲ許ササルモノトス(判旨第一乃至十點)

第一審 福岡地方裁判所 第二審 長崎控訴院

上告人 貝島太助

訴訟代理人

江木 嘉道
松原 豊吉

被上告人 阿部安次郎

訴訟代理人

高木 豊三
小出 五郎

右當事者間ノ鑛業特許權無効確認事件ニ付長崎控訴院カ明治三十一年四月二十九日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ原判決中被控訴人ハ明治二十九年二月七日特許第七十九號福岡縣筑前國鞍手郡笠松村大字四郎丸字京野外九字民有地石炭場二十二萬三百八十坪ノ被控訴人名義ノ鑛業特許權中元所有者古野三郎入江惣兵衛ノ持分タリシ共有部分ノ無効ナルコトヲ確認スヘシトアル部分及ヒ訴訟費用ノ負擔ニ關スル部分ノ破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判 決

原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ判決スル左ノ如シ

第一審判決ヲ廢棄シ本件ノ訴ヲ却下ス

訴訟費用ハ總テ被上告人ノ負擔トス

理 由

上告第一點ハ本件ニ於ケル被上告人ノ請求ハ上告人名義ナル特許第七十九號鑛業特許權ハ無効ナルコトヲ確認スヘシト云フニ在リ云其請求ノ原因ハ農商務省カ上告人名義ニ鑛業特許證ヲ書換ヘタルハ被上告人カ訴外人古野三郎入江惣兵衛ニ對スル債權保全ノ爲メ該特許權ヲ差押ヘタル後ナルヲ以テ上告人ノ鑛業特許權ハ農商務省カ鑛業特許證ヲ書換ヘタル後ニ於テモ不成立ニシテ效力ナシト云フニ在ルコト口頭辯論調書(控訴狀ニ基キ演述シタリトアル記載)ニ由リ明白ナリ即チ被上告人ハ本訴ニ於テ上告人ト古野入江外一名間ニ於ケル特許權讓受渡契約ノ無効ヲ主張スルニアラス又上告人ハ今日鑛業特許權ヲ有スルモ之レヲ以テ被上告人ニ對抗スルヲ得サルモノナルコヨリ被上告人名義ニ鑛業特許證ヲ書換フル義務アリト云フニモアラス全ク上告人カ農商務省ノ許可ニヨリ得タル鑛業特許自身ノ存在セサルコトヲ主張スルモノナリトス然ルニ鑛業條例ハ其第二十條第二項ニ於テ鑛業特許證ノ記名人ニ限リ鑛業特許權ヲ有スル旨ヲ定ムルヲ以テ鑛業特許證ノ記名人モ鑛業特許權ヲ有ストハ全ク同條例ニ違背スル不當ノ主張ナリトス同條例ノ規定ニヨレハ當事者間ノ如何ナル私法上ノ關係アルモ鑛業特許證ノ名義ニ非サレハ鑛業人即チ鑛業特許權ノ所有者タル資格ヲ得ル能ハサルモノナリ此事タルヤ原院ニ於テモ上告人ト古野入江外一名間ノ讓受渡ハ農商務省ノ許可アリタルトキ始メテ效力アルモノト判定

シタルニ由リ明認スル所ナリ果シテ然ラハ農商務省ノ許可ヲ得テ鑛業特許證ノ記名人タル上告人ニ鑛業特許權存在セス鑛業人タル資格ナシトノ請求ハ鑛業條例ニ違背セル不法アルモノトシテ直ニ之レヲ排斥セサルヘカラサルニ却テ之レヲ採用スル旨ノ裁判ヲ下シタルハ法則ヲ適用セサル不法ノ判決ナリト云ヒ』其二點ハ本件被上告人ノ請求ハ第一點ニ述ヘタル如クナルヲ以テ本件ニ於ケル主要ノ爭點ハ假差押ノ效力ハ當然農商務省ノ與ヘタル特許其者ニ及ヒ鑛業特許證ノ記名人モ鑛業人タル資格ナキヤ否ヤニ在リ然ルニ原院ハ上告人ト元所有者間ニ於ケル處分行爲ハ被上告人カ爲シタル假差押ニ對抗シ得ルヤ否ヲ以テ本件主要ノ爭點トナシ恰モ被上告人カ上告人ニ對シテ特許證名義ノ書換ヲ請求シタル場合ナルカ如ク被上告人ハ古野入江ノ兩人カ處分行爲ヲ禁セラレタル後ニ農商務省ノ許可ニ由リ特許權ヲ得タルモノナレハ被上告人カ爲シタル假差押ニ對抗シ自己ノ權利ヲ主張スルヲ得サルモノトストノ理由ヲ以テ直ニ特許權ヲ無効ナリト裁判シタルハ判斷スヘキ主要ノ爭點ヲ誤リ判決主文ト理由ト相添ハサル不法ノ裁判ナリト云ヒ』其三點ハ本件被上告人ノ主張ハ第一點ニ述ヘタル如ク上告人ニ鑛物探掘權ナシト云フニ在ルヲ以テ本訴ノ目的ハ農商務省ノ鑛業特許證書換ナル行政行爲ノ效力ヲ否認スルニ在ルヤ明カナリ故ニ上告人ハ原院ニ於テ本件ハ上告人ニ依リ請求スヘキモノニアラス又私法上ノ爭ニ非ストノ防禦方法ヲ提出セリ(控訴答辯書第五點及ヒ末尾)此防禦方法ハ其性質上先決問題タルニ拘ハラス原院カ全ク之レヲ不問ニ附シタルハ必要ナル爭點ヲ遺脱シタル不法ノ裁判ナリト云ヒ』其四點

ハ本件ニ於ケル原院判決ノ要旨ハ鑛業特許證ノ記名人カ其探掘權ヲ他人ニ讓渡スノ契約ヲ結ビ鑛業條例第二十條第二項ニ從ヒ鑛業特許證書換ノ願書ヲ農商務省ニ提出シタル後未ダ書換アラサル前ニ裁判所ヨリ讓渡人ニ鑛業特許權差押ヘノ命令ヲ發シタルトキハ農商務省ハ曩ニ提出シタル特許證書換願書ヲ許可スルヲ得ス之レヲ許可スルモ當然無効ナリト云フニ歸着スルカ如ク然レトモ鑛物探掘權ナルモノハ鑛業條例ニ定メタル手續ニヨリ政府ヨリ與フル特別權利ニシテ之カ與奪ハ一ニ行政官廳ノ權内ニ在リテ普通ノ財産權ニ均シカラス故ニ農商務大臣カ鑛業特許ヲ與ヘ若クハ之レヲ取消ス行爲ハ一ノ行政處分ニシテ私法上ノ行爲ニアラス其既ニ得タル探掘權ノ移轉ヲ許否スルカ如キハ亦然リ而シテ行政官廳カ行政處分ヲ爲スニ就テハ司法裁判所ノ裁判ニ羈束セラルヘキ理由ナキヲ以テ假令鑛業特許證ノ記名人カ裁判所ヨリ如何ナル命令ヲ受ケ居ルモ之レカ爲メニ農商務省ノ特許證書換ナル行政處分カ當然無効トナルヘキノ條理ナシ故ニ農商務省ニ於テ鑛業特許證ヲ上告人名義ニ書換ヘタル上ハ上告人ハ何人ニ對シテモ正當ナル鑛業人ニシテ他ニ鑛業人ノ存スヘキ筈ナシトス尤モ本件ノ事實以外ニ上告人ハ被上告人其他ノ第三者トノ間ニ於テ私法上ノ關係アルトキハ上告人ヨリ更ラニ特許證名義ヲ他人ニ書換ヘサルヘカラサルカ如キ場合ナキコ非ラサルヘシト雖モ此場合ニ於テモ上告人ノ特許權カ無効ナルニ非スシテ完全ニ成立シ居ルカ故ニ其權利ヲ他人ニ移轉スルカ爲メニ特許證書換ヲ必要トスルモノナリトス要スルニ原院カ裁判所ノ差押命令ハ農商務省ノ特許證書換ナル行政處分ヲ無効ナラシムル效力

アルモノトシテ上告人カ其行政處分ニ依リ得タル特許權ヲ無効ナリト判斷シタルハ差押命令ノ效力ヲ誤リタル不法ノ裁判ナリト云ヒ』其五點ハ鑛業特許證ノ記名人ニ對スル特許權ノ差押ハ民事訴訟法第六百二十五條第二項ノ規定ニ從ヒ權利ノ處分ヲ禁スル命令ヲ債務者ニ送達スルニアラサレハ其效ナキモノトス然ルニ甲第二號證ノ假差押命令ニハ單ニ「鑛業特許權ハ之ヲ差押フルモノトス」トアリテ權利ノ處分ヲ禁スル旨ヲ命令シタルコトナク又上告人ハ其命令アリタルコトヲ知ラズト陳述シタルコト拘ハラス被上告人ハ債務者ニ送達セラレタル日時ヲ證明セズ則チ此假差押命令ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ハサルモノニシテ鑛業特許權ニ對スル假差押ノ效力アルモノニアラス然ルニ原院カ其命ヲ有效トシテ(上告人カ送達日時ヲモ認メタルモノ、如ク誤認シ)被上告人ノ請求ヲ採用シタルハ不法ノ裁判ナリト云ヒ』其六點ハ假差押ハ將來ニ向ツテ送達ヲ受ケタル當事者ノ行爲ヲ禁示スル效力ヲ有スヘキモ既往ノ行爲ヲ無効トシ得ヘキモノニアラス本件ニ於ケル假差押ハ上告人ト古野外一名トノ鑛業特許權讓受渡契約成立シ且ツ鑛業條例ノ規定ニ從ヒ鑛業特許證書換願書ヲ所轄鑛山監督署ヲ經テ農商務大臣ニ提出シタル後ニ發セラレタルモノナルコトハ當事者間ニ爭ナキ事實ナレハ其命令ノ送達ヲ受ケタル當事者ハ最早禁止セラルヘキ行爲ヲ爲スノ餘地ナク上告人ハ農商務大臣ノ許可ノミヨリ鑛業人タル位地ヲ得ヘキ場合ニ在リタルナリ而シテ農商務大臣ハ假差押命令ニ羈束セラレサルヲ以テ上告人ノ出願ニ許可ヲ與フルノ行爲ヲ爲シ得サルノ理ナク農商務大臣ノ許可ニヨリ上告人カ得タル鑛業特許權ハ何等環

瑾アルコトナシ然ルニ原院カ假差押ノ命令ハ既往ニ完了セル當事者ノ行爲ヲ無効タラシムルモノ、如ク誤解シ上告人ノ特許權ヲ無効ナリト判決シタルハ不法ノ裁判ナリト云ヒ』其七點ハ假差押命令ノ效力ハ既往ノ行爲ヲ無効トスルモノニ非サルコト前述ノ如クナルヲ以テ上告人カ古野入江兩人ト連署シテ農商務省ニ差出シタル特許證書換願ハ假差押命令送達後ト雖トモ有效ニ成立シ居ルハ論ヲ俟タズ而シテ被上告人ハ競落ニヨリ古野入江兩人ノ承諾ヲ得タルト同シク特許證書換願ヲ農商務省ニ提出シ得ルニ至ルトスルモ其出願ノ效力ハ上告人カ古野入江ノ任意承諾ニヨリ差出シタル出願ノ效力ト何等軒輕アルコトナシトス此均等ノ效力アル二個ノ出願中何レヲ採用シ何レヲ排斥スヘキハ農商務大臣ノ職權ニ存スルヲ以テ被上告人カ未ダ願書ヲ提出セサル今日ニ於テ上告人カ農商務大臣ノ許可ニ由リテ得タル特許權ヲ以テ被上告人ニ對抗シ得サルノ理由アルコトナシ然ルニ原院ハ競落ニ依リテ古野入江兩人ノ承繼人トナルヘキモノハ兩人ノ承諾ニヨリ承繼人トナルモノヨリモ優等ノ權利(特ニ其競落ノ時ニ於テ特許權ノ既ニ上告人ニ移轉シタルコトヲ熟知シタルノ事實爭ナキニ拘ハラズ)ヲ有スルモノト誤認シ上告人ハ被上告人ニ對抗シ自己ノ權利ヲ主張スルコトヲ得サルモノト判決シタルハ不法ノ裁判ナリト云ヒ』其八點ハ原院ハ假差押命令カ鑛山監督署ノ公簿ニ登錄セラレタリトノ事實ニ重キヲ置キ假差押ノ效力ヲ定メタルカ如クナレトモ鑛業特許權ノ差押ハ民事上ニ於テハ民事訴訟法第六百二十五條第二項ニ從フヘキモノナレハ鑛山監督署ハ法律上假差押命令ノ送達ヲ受クヘキモノニアラス假令

其送達ヲ受クルモ何等ノ效力ヲ生スルコトナシ故ニ原院カ其送達日時ト農商務大臣許可ノ日時ノ前後ニヨリ假差押ノ效力ヲ定メタルハ不法ナリ假リニ數歩ヲ譲リ鑛山監督署ハ假差押命令ノ送達ヲ受ケ及
 其命令執行ノ權利義務アルモノトスルモ鑛山監督署ハ將來受理スル願書ニ就テノミ其權能アルモノニ
 シテ本件ノ如ク既ニ農商務大臣ニ進達シ自己ノ管理内ニ存セサルモノニ付テ何等ノ處分ヲ爲スノ權能
 アルコトナシ然ルニ原院カ願書進達後ニ假差押命令カ鑛山監督署ニ送附セラレタルコトヲ認メナカラ
 差押ノ效力アルモノ、如ク判定シタルハ亦不法ノ裁判ナリト云ヒ其九點ハ原院ハ上告人名義ノ鑛業
 特許權中元所有者古野三郎入江惣兵衛ノ持分タリシ共有部分ノ無効ナルコトヲ確認スヘント判示シタ
 レトモ上告人ハ其何等ノ意義ナルカヲ解スル能ハス此判決ニヨリテ原院カ無効ナリトシタル所謂特許
 權中ノ部分ハ何人ニ屬スルモノトノ意味ナルヤ其「元所有者古野三郎入江惣兵衛ノ持分タリシ」云々ト
 アルニ因レハ此部分ハ被上告人ノ有ニ屬スルカ故ニ上告人ニ權利ナシトノ意ナルヤニ解セラル、ト雖
 トモ假令強制執行手續ニ於ケル競落人タリトモ鑛業條例第二十條第二項ノ手續ヲ爲サズシテ特許權ヲ
 得ルノ理ナキヲ以テ若シ原院判示ノ趣旨前述ノ如クナリトスレハ鑛業條例ニ牴觸スル不法アルヲ免レ
 ス又此特許權ノ部分カ古野三郎入江惣兵衛ニ屬セサルモノト認メタルコトハ「元所有者」ノ文字ニ因リ
 明白ナレハ上告人名義ニ書換ヘタル後今日ニ至ル迄此部分ハ何人ノ有ニ屬スルモノトシタルヤ殊ニ原
 院ハ上告人カ入江卯太郎ヨリ讓受ケタル部分ハ有効ナリト判定シタルヲ以テ上告人ハ名義書換後引續

キ此部分ノミチ有スルモノト推論セザルヲ得ス果シテ然ラハ上告人ハ今日何人ト共ニ特許第七十九號
 ノ特許權ヲ有スルモノトナルヘキヤ原院ノ判文上更ニ之ヲ知ルコトヲ得ス要スルニ原判決ニ於テハ此
 等ノ點ニ對シ何等説示スル所ナキヲ以テ結局理由ヲ備ヘサル不法ノ判決ナリト云ヒ其十點ハ假リニ
 原判決ノ意ハ被上告人ヲ以テ今日上告人ト特許權ヲ共有スルモノト認メタルモノト解釋センカ二人以
 上共同シテ鑛業特許ヲ有スル場合ニ於テハ全員ノ承諾アルニ非サレハ他人ニ特許權ヲ讓渡シ若クハ他
 人ヲ加名セシムルコトヲ得サルハ條理ノ當然ニシテ亦鑛業條例第六條及第七條ノ明定スル所ナリ故
 ニ共同鑛業人中或者ノ持分ノミニ付強制執行手續ニ因リ讓渡シテ爲サシメ以テ他ノ鑛業人ニ共同鑛業
 ナ強ユルヲ得ヘキモノニアラス故ニ被上告人ニ於テモ此法理ヲ認メ特許第七十九號ノ特許權全部ヲ差
 押ヘ且ツ之ヲ競落シタリト主張シ未タ曾テ一部ノ競落ヲ爲シ今日上告人ト之ヲ共有スルコトヲ申立テ
 タルコトナシ然ルニ原判決ノ如ク假差押及競落共一部ニ付テノミ有效ニシテ上告人亦他ノ一部ヲ有ス
 ルモノトスルトキハ被上告人ハ競落ノ時ヨリ入江卯太郎ノ承繼人タル上告人ノ承諾ナクシテ共同鑛業
 人トナリタルモノト云ハサルヘカラス斯ノ如キハ法律上許サ、ル所ナルヲ以テ上告人カ入江卯太郎ノ
 持分ヲ有效ニ取得シタリトスル上ハ其取得後ニ生シタル被上告人、競落ハ全然其效ヲ有セサルモノト
 斷定スルヲ當然トス然ルニ原院ハ當事者ノ意ニ反シテ強制共同鑛業ノ成立スヘキモノ、如ク判示シタ
 ルハ甚シキ不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

按、スル、ニ、訴訟、ハ、相手方、ニ、對シ、或、給付、ヲ、求ムル、爲メ、之、ヲ、提起、スル、ヲ、通例、ト、スレ、ル、或、ル、場合、ニ、ハ、當事者、間、ニ、於、ル、法律、關係、ノ、ミ、ヲ、確定、スル、メ、ニ、之、ヲ、提起、シ、又、ハ、給付、ノ、請求、ト、法律、關係、ヲ、確定、スル、事、ト、ヲ、併合、シ、テ、訴、ヲ、提起、スル、ヲ、得、ル、モノ、ト、ス、然、レ、ト、モ、單、ニ、法律、關係、ヲ、確定、スル、ノ、ミ、ノ、訴、即、チ、所謂、確認、ノ、訴訟、ヲ、提起、スル、ニ、ハ、必、ス、ヤ、起、訴、者、ハ、其、法律、關係、ヲ、即時、ニ、確定、スル、ニ、於、テ、法律、上、利害、ノ、關係、ヲ、有、セ、サル、ヘ、カ、ラ、ス、換、言、ス、レ、ハ、確認、ノ、訴訟、ヲ、爲、ス、ニ、ハ、必、ス、ヤ、法律、關係、ヲ、即時、ニ、確定、スル、ノ、必要、ナ、カ、ル、ヘ、カ、ラ、ス、故、ニ、若、シ、給付、ノ、請求、ヲ、爲、シ、得、ル、カ、又、ハ、其他、ノ、事情、ヨリ、シ、テ、法律、關係、ヲ、即時、ニ、確定、スル、ノ、必要、ナ、キ、場合、ニ、ハ、確認、ノ、訴訟、ハ、絶、體、ニ、之、ヲ、提起、スル、ヲ、得、ス、是、レ、他、ヲ、シ、給付、ノ、請求、ヲ、爲、シ、得、ル、場合、其他、法律、關係、ヲ、即時、ニ、確定、スル、ノ、必要、ナ、キ、場合、ニ、在、テ、ハ、確認、訴訟、ハ、全、ク、無、用、ニ、屬、スル、ノ、ミ、ナ、ラ、ス、徒、ラ、ニ、被告、及、ヒ、裁判、所、ヲ、シ、テ、時間、ト、費用、ヲ、費、サ、シ、ム、ル、ニ、過、キ、サ、レ、ハ、ナ、リ、本、件、ニ、付、キ、之、ヲ、審、案、ス、ル、ニ、訴、狀、控、訴、狀、第一、審、第二、審、ノ、法、廷、調、書、ニ、由、レ、ハ、被、上、告、人、ノ、訴、旨、ハ、上、告、人、ヲ、シ、テ、特、許、證、ノ、無、效、タル、コト、ヲ、確認、セ、シ、ム、ル、コト、ヲ、明確、ナ、リ、被、上、告、人、ハ、本、訴、ハ、特、許、證、無、效、確認、ノ、訴、ト、アル、モ、其、意、タル、特、許、權、讓、渡、受、渡、契、約、ノ、無、效、ナル、コト、ヲ、主張、ス、ル、コト、同一、ナ、リ、ト、辯、疏、ア、レ、ト、モ、前、掲、訴、狀、等、ノ、記載、ニ、徴、ス、レ、ハ、決、シ、テ、斯、ル、趣、旨、ナ、リ、ト、認、ム、ル、ヲ、得、ス、而、シ、テ、本、件、ニ、於、テ、被、上、告、人、ハ、特、許、證、ノ、無、效、ス、ル、コト、ヲ、確認、セ、シ、ム、ル、ノ、外、即時、ニ、給付、ヲ、求、ム、ル、訴、ヲ、提起、シ、得、ザ、ル、モ、ノ、ナ、ル、ヤ、否、ヤ、ヲ、案、ス、ル、ニ、被、上、告、代、理、人、ノ、辯、明、ニ、由、レ、ハ、被、上、告、人、ハ、元、來、上、告、人、ヲ、シ、テ、同、人、ノ、名、義、ト、ナ、リ、居、ル、特、許、證、取、消、ノ、手、續、ヲ、爲、サ、シ、メ、以、テ、自己、ニ、其、特、許、證、ヲ、得、ノ、ト、ス、ル、モ、ノ、ナ、ル、コト、付、キ、裁判、上、果、シ、テ、此、目

的、ヲ、達、ス、ル、コト、ヲ、得、ル、ヤ、否、ヤ、ハ、姑、ク、措、キ、被、上、告、人、ハ、此、場合、ニ、於、テ、直、ニ、上、告、人、ニ、對シ、特、許、證、取、消、ノ、手、續、ヲ、目、的、ト、爲、シ、之、ヲ、取、消、サ、シ、ム、ル、コト、ヲ、求、ム、ル、訴、ヲ、提起、シ、得、ヘ、キ、モ、ノ、コ、シ、テ、即、チ、給付、ノ、請求、ヲ、爲、シ、得、ル、モノ、ナ、リ、然、レ、ハ、本、件、ハ、上、文、ノ、說、明、中、給付、ノ、請求、ヲ、爲、シ、得、ル、場合、ニ、相當、ス、ル、ヲ、以、テ、確認、訴訟、ハ、不、適、法、ト、シ、テ、却、下、ス、ヘ、キ、モ、ノ、ト、ス、是、レ、主、文、ノ、如、ク、判決、ス、ル、所、以、ナ、リ

○借地條件確定請求ノ件
明治三十一年第三百八十號
明治三十二年二月十日第二民事部判決

○判決要旨

一 權利存在ノ確認ヲ目的トスル確認訴訟ハ其權利關係ヲ即時ニ確定スルコトノ必要アル場合ニ非ザレハ之レカ提起ヲ許サ、ルモノトス(判旨第一點)

第一審 廣島地方裁判所 第二審 廣島控訴院
上告人 宮崎萬太郎 訴訟代理人 上原鹿造
被上告人 中山雷響 外十名
確認訴訟ヲ許ス場合

右當事者間ノ借地條件確定請求事件ニ付廣島控訴院カ明治三十一年六月二十二日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告論旨第一點ハ原判決ノ理由中前略「然レトモ確定ノ訴ハ債權者カ債務者ニ對シ未タ債務ノ履行ヲ請求スルヲ得サル時ニシテ且豫メ其權利關係ヲ確定シ置クノ必要アル場合ニ於テノミ其提起ヲ許スモノニシテ既ニ債務ノ履行ヲ要求シ得ヘキ場合ニ在テハ單ニ其權利關係ノミヲ確定シ置クノ必要ナキヲ以テ確定ノ訴ヲ提起スルヲ許サハルモノトス故ニ被控訴人カ控訴人ニ對シ西正寺ノ敷地ニ付明治三十年六月即チ本訴提起ノ時ヨリ明治三十五年五月迄ニ於ケル借地料ノ確定ヲ請求スルハ相當ナルモ其以前ニ屬スル借地料ハ何時ニテモ之レカ支拂ヲ請求シ得ヘキヲ以テ此點ニ付確定ノ請求ヲ爲スハ其當ヲ得サルモノナリ」トアリ其前提ハ確定ノ訴ニ關スル法則ヲ不當ニ適用シタルモノアリ何トナレハ凡ソ權利關係確定ノ訴ハ事將來ノ利害ニ關スルカ爲メニ提起スルモノニハ相違ナキモ其確定スヘキ權利關係ハ必スシモ將來ニ限ラス過去現在未來ヲ通シテ之ヲ確定シ得ヘキモノナレハナリ例ヘハ起訴當日迄ニ原告ヨリ被告ヘ支拂フヘキ債務ナキコトヲ確認セシムルカ如キ今日尙被告ハ原告ヘ或給付ヲ爲スヘ

キ義務アルコトヲ確認セシムルカ如キ若クハ自分被告ハ原告ノ借地料ヲ支拂フヘキ義務アルコトヲ確認セシムルカ如キ事過去現在未來ノ三種ニ屬スルモ何レモ確認ノ訴トシテ受理セラル、ハ何人モ知ル所ナルニアラスヤ特ニ確定ノ訴ハ債務ノ履行ヲ請求シ得サルトキニシテ豫メ其權利關係ヲ確定シ置クノ必要アルトキニ限りテ提起スヘキモノナリト云フニ至リテハ故ナク其範圍ヲ縮少シタルモノナリ何トナレハ確定ノ訴ナルモノハ事荷モ原告ノ利害ニ關スル以上ハ如何ナル種類ノ權利關係タルヲ問ハス其時期ノ如何ニ論ナシ裁判ヲ以テ一定ノ歸着ヲ得ントスルトキハ常ニ提起スルコトヲ得ヘキモノナレハナリ管ニ其前提ノ法則ニ違背セルノミナラス本件ニ於テ起訴以前ニ屬スル借地料ハ何時ニテモ之レカ支拂ヲ請求シ得ヘキモノナリトシ確定ノ訴ヲ不要不可許ノモノト斷シタルハ爭點ヲ無視シタルニアラサレハ誤認シタル不法アリトス蓋シ被告人ノ主張ハ起訴以前ノ借地料モ勿論之レヲ支拂フ義務ナク假リニ其義務アリトスルモ上告人主張ノ如キ多額ノ割合ヲ以テ支拂フノ義務ナシト云フニ在レハ決シテ何時ニテモ請求シ得ヘキモノニアラス上告人ニ於テ之レカ請求ヲ實行セント欲セハ必スヤ第一ニ支拂ノ義務アルヤ否ヤ第二義務アリトスレハ何程ノ借地料ナルヤノ二點ヲ定メ而シテ後ニアラサレハ專ラ額ヲ定メ請求ニ着手スルヲ得サルハ本件雙方ノ主タル爭點ニ徴スレハ一目瞭然タリ原院ノ意ハ或ハ起訴以後ノ借地料ノ義務及割合此判決ヲ以テ一定シタル以上ハ起訴以前ノ分ハ專ラ判明スヘク之レカ確定ノ必要ナシトノ意ナリトセンカ理由不備ト云ハサル可カラス蓋シ起訴以後ノ割合定リタレハト

テ直ニ以テ以前ノ割合ヲ發見スルコトヲ得サルノミナラス本件ノ如キ時期ニ依リテ借地料ヲ異ニスル
 場合ニ於テハ起訴後ノ割合ハ起訴前ノ割合ニ準用スルコトヲ得サルハ勿論ナレナリ況ンヤ原判旨ハ
 確定ノ訴ヲ許スヘキ場合ニ付テノ解釋ヨリシテ起訴以前ノ借地料ヲ排斥シタルモノニシテ起訴以前ノ
 分ハ自カラ明ナリトノ理由ヨリ成リ居ラサルヲ以テ原判旨ヲ斯ル意ナリト解スルコトヲ得サルヲヤト
 云フト在リ○依テ按スルニ凡ソ訴訟ハ權利ノ侵害ヲ除去スルコトノ必要アル場合ニ限リ提起スルコト
 ナリ許スヘキモノニシテ權利確定ノ存在ヲ目的トスル確定訴訟ニ於テモ亦然リ原告カ被告ニ對シ或權利
 ナ有スルモ其履行ヲ請求スルコト能ハサルトキ獨立シテ若クハ履行ヲ要求スル訴訟ト併合シテ其權利
 關係ヲ即時ニ確定スル必要アル場合ニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ許サス是レ他ナシ既ニ履行ヲ要
 求スルコトヲ得ル場合ニ在リテハ確定訴訟ハ履行ヲ求ムル訴訟ノ提起ニ因リ無用ニ屬シ履行ヲ求ムル
 訴訟ニ先チテ特ニ獨立シテ確定訴訟ヲ提起スル必要之レナキハ此ノ如キハ徒ラニ被告事件并
 ニ裁判所ヲシテ二重ノ時間及ヒ費用ヲ費サシムルモノナルヲ以テ此場合ニ於テ確定訴訟ノ獨立ノ提起
 ハ法律上決シテ許スヘキモノニアラス而シテ上告人(控訴人)カ本件ニ於テ借地料額ノ確定ヲ請求スル
 明治三十年六月即チ本件訴訟提起以前ニ係ル西正寺ノ借地料ニ對シ縱令ヒ被告上告人カ其數額ヲ爭フト
 雖モ之レニモ拘ハラス上告人ハ直ニ借地料ノ請求ヲ爲スコトヲ得ルハ勿論ニシテ其借地料額ノ確定訴
 訟ヲ提起スルコトヲ得サルヲ以テ原院カ右ノ部分ヲ棄却シタルハ相當ナリトス依テ原判決ハ上告人所

論ノ如キ不法ナキヲ以テ本論旨ハ上告理由タラサルモノトス

上告第二點ハ原院ニ於テ鑑定人河野護一林十之助ノ鑑定ヲ非認スル理由トシテ實地ヲ調査セサル鑑定
 ナル旨ヲ明示セリ是レ裁判所ノ空想ニシテ一件記録中斯ル事實ノ見ルヘキ毫モ之レナキナリ是レ不當
 ニ事實ヲ確定シタルモノナリト云フニ在リ○依テ按スル鑑定人河野護一林十之助ハ呼出ヲ受ケタル廣
 島地方裁判所法廷ニ於テ直ニ鑑定シ實地ヲ調査シタル上鑑定セシモノニアラサルコトハ同裁判所ノ法
 廷調書ニ徴シテ明瞭ナレハ本論旨ハ上告人所論ノ如キ不法ナシ

上告第三點ハ原院ニ於テ甲第六號證ヲ援用シ教順寺ノ敷地料ヲ參照シテ本件ノ敷地料ヲ斷定シタルハ
 不法ナリ本件ノ地所ハ時期ニヨリテ敷地料ノ高下アルハ當事者間ニ爭ヒナキ所ニシテ明治二十一年ノ
 昔ニ於ケル甲第六號證ノ敷地料ヲ參照シ本件ノ材料トスルカ如キハ探證法ノ許サ、ル所ナレハナリト
 云フニ在リ○依テ按スルニ原院ハ明治三十年以後ノ借地料額ヲ定ムルニ付甲第六號證即明治二十一年
 ニ於ケル隣地ノ借地料ヲ其儘採リテ以テ本件ノ借地料ト爲シタルニアラス鑑定人ノ鑑定ト共ニ之レヲ
 參照シタルコト過キス而シテ借地料ヲ定ムルニ付數年前ノ借地料ヲ參照ニ供スルコトヲ法律上禁シタル
 モノニアラサルヲ以テ原院カ本件ニ付キ甲第六號證ノ借地料ヲ參照シタルハ毫モ不法ニアラス依テ本
 論旨モ亦上告理由タラサルモノトス

以上説明スルカ如ク本件上告ハ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第二項ノ規定ニ依リ

之レヲ棄却スルモノナリ

〇損害要償ノ件

明治三十一年第三百八十七號
明治三十二年二月十三日第二民事部判決

〇判決要旨

一 控訴狀ニ控訴セル原判決ハ如何ナル判決ナルヤヲ表示シ次ニ此判決ニ對シ控訴ヲ爲スノ旨趣ヲ前後ノ文詞ニ於テ表出シタルトキハ其控訴狀ハ適式ノモノト看做シ受理スルニ妨ケナキモノトス(判旨第一點)

一 契約ノ要素ニ錯誤アルモノハ民法實施前ト雖トモ當然無效タリ(判旨第二點)

第一審 富山地方裁判所高岡支部 第二審 大阪控訴院

上告人 伊藤清造 訴訟代理人 長島鷲太郎

被上告人 伊藤清右衛門

右當事者間ノ損害事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年七月五日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ控訴狀ニハ「第一控訴セラルル判決ノ表示第二此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ具備スルコトヲ要スルハ民事訴訟法第四百一條第一項第一號第二號ノ規定スルトコロナリ而シテ若シ此要件ノ一ヲ欠クトキハ不適式ノ控訴タル可キコトハ同第四百二條並ニ第四百十九條ノ明規スルトコロナリ」本件被上告人ノ原院ニ提出シタル控訴狀ヲ閱スルニ「控訴ヲ爲ス旨ノ陳述」ト見ルヘキ表示アルコトナシ偶々「不服ノ理由」ト題シ記載セルモノアルモ是レ或ハ「判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ」ノ規定(民事訴訟法第四百一條第二項中)ニ恰當スルカ如キモ未ダ以テ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ナリト云フヲ得ス其他控訴狀又ハ損害要償事件ノ控訴ナト記載アリト雖トモ是亦前示第二號ノ要件ヲ具備シタリト見ルコトヲ得サルハ勿論ナリ又其後被上告人ハ口頭辯論ニ於テ一定ノ申立補充書ナルモノヲ提出シタリト雖トモ當時已ニ控訴期間ノ滿了後ニ屬スルヲ以テ該補充書ハ何等ノ效果ヲ生ゼサルノミナラス縱シヤ期間内ニ提出シタリトスルモ爲メニ其以前ニ於ケル不適法ノ控訴ヲ適法ト爲スコ足ラサ

ルナリ要スルニ本件控訴ハ不適式ノ控訴トシテ原院ニ於テ須ラク之ヲ棄却セサル可カラサルニモ拘ハ
 ラス此違法ヲ看過シテ直ニ本案ノ判決ヲ與ヘラレタルハ法律ニ違背シタル不法ノ判決ナリト云フニ在
 リ○按スルニ民事訴訟法第四百一條第一號第二號ノ要件中其一ヲ缺ク控訴狀ヲ以テ控訴ヲ提起スルト
 キハ不適式ノ控訴トシテ却下スヘキモノナルコトハ上告人所論ノ如シ然レトモ其要件ヲ記載スルニハ
 一定ノ書式アルニアラサレハ先ツ控訴セル所ノ原判決ハ如何ナル判決ナルヤヲ表示シ次ニ此判決ニ對
 シ控訴ヲ爲ストノ旨趣ヲ前後ノ文詞ニ於テ表出シアレハ適式ノ控訴狀ト看做シ受理スルニ妨ケナキモ
 ノトス今本件控訴狀ヲ閱スルニ起頭ニ「控訴狀ト題シ次ニ當事者ノ住所氏名等ヲ表記シ其次ニ「損害要
 償ノ控訴」ト標目ヲ掲ケ其次ニ原判決即チ富山地方裁判所高岡支部ノ爲シタル判決ヲ表示シ其次ニ「不
 服ノ理由」ト掲ケ「一係争ノ高岡銀行ノ株券ハ控訴人主張ノ如ク被控訴人長女伊藤ハツ名義ノ株券ヲ指
 稱シタルモノト認めナカラ乙第一號證ノ主旨ヲ曲解シ控訴人ニ於テ損害ヲ要償ス可シト判決セラレタ
 ルハ不服ニ御座候」ト記載シアレハ之ヲ以テ右高岡支部ノ爲シタル判決ニ對シ控訴ヲ爲スト云フノ旨
 趣ヲ認ムルニ充分ナレハ原裁判所カ之ヲ適法ノ控訴トシテ受理シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ其理由
 ナシ其第二點ハ原院判決ヲ見ルニ「ハツノ手ニ現存セサリシ事實ヲ知ラスシテ當事者カ之ヲ契約ノ目
 的ニ供シタルハ其事實ヲ錯誤シタルモノナリ而シテ斯ル錯誤ノ契約ハ本來無効ナルコト勿論ナルニ依
 リ云々」ト判斷セラレタルモ凡ソ贈與契約ハ當事者ニ於テ其事實ヲ知ルニ拘ラスシテ契約ヲ締結シタ

判旨第二點

ル場合ニ於テハ之ヲ無効ニ歸シ得ヘキモ當事者カ欠缺ノ事實ヲ知ラスシテ契約シタル場合ノ如キ之ヲ
 無効ト爲スヘキモノニアラス此判決タル明カニ法則ヲ誤解シタルノ判決ナリト云フニ在リ○依テ按ス
 ルニ原裁判所カ認ムル如ク特定物タル本訴ノ株券ヲ目的トシテ贈與契約ヲ爲スノ當時當事者雙方其物
 件カ伊藤ハツノ手裏ニ現存セサリシ事實ヲ知ラス現ニ同人ノ手ニ存在スルモノト確信シ之ヲ契約ノ目
 的ニ供セシモノトスレハ當時當事者カ現存セサル事實ヲ知リタランコトハ贈與ノ契約ヲ爲サザリシモノ
 ト推定セラル可キモノニシテ即チ契約ノ要素ニ錯誤アルモノトス而シテ錯誤ト認メラレタル甲第一號
 證ハ其成立ノ當時ハ未ダ新民法實施セラレサルモ斯ノ如ク契約ノ要素ニ錯誤アルモノハ之ヲ無効ニ歸
 セシム可キハ法理上當然ノ筋合ナルヲ以テ原判決ハ相當ニシテ法律ヲ誤解シタル如キ不法ノ裁判ニア
 ラス故ニ本點ノ論旨モ亦其理由ナシ

其第三點ハ株券引渡ノ契約ノ如キ和解契約ノ一條項ナリ原判決ハ和解契約ノ有效ヲ認メナカラ此契約
 中ノ一項ヲ無効ナリト判斷シタリ然レトモ和解契約ノ一項ニシテ本來無効ナリセハ和解契約ハ當然解
 除セラルヘキモノナレハ原院ノ判斷タル理由不備ノ判決ト云ハサルヘカラスト云フニ在ルモ○原判文
 ナ査閱スルニ原裁判所カ和解契約ハ株券引渡ノ條項ヲ除キ其他ハ惣テ有效ナリト認メタルニアラス又
 株券引渡ノ條項ノミ無効ナリト判示シタルニモアラス而シテ本訴ハ和解契約中株券引渡ニ關スル條項
 ノミニ付相争フモノニシテ和解契約ノ全部ニ涉リ有效無効ヲ争ヒタルニアラサレハ原裁判所カ其争ニ

係ル條項ニ對シ判斷ヲ爲シ爭ナキ條項ニ涉リ判斷ヲ爲ササルハ相當ト云ハサル可カラス要スルニ原判決ヲ誤解スルモノニシテ本點論旨モ亦理由ナシ以上説明スル如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ棄却ス可キモノトス是主文ノ如ク判決スル所以ナリ

○地所取戻登記名前替請求ノ件

明治三十一年第三百八十九號
明治三十二年二月十三日第二民事部判決

○判決要旨

一 控訴狀ノ末尾ニ判決^四ノ表示トシテ第一審判決正本ノ全部ヲ騰寫シテ添付シアルトキハ原判決ノ表示ヲ缺キタリト云フヲ得ス(判旨第一點)(第四輯第一卷所載明治三十一年第四百二十五號判決參看)

一 親權ヲ有スル實母カ自ラ其幼兒ノ後見ヲ爲サスシテ他人ヲ其後見人ニ選定スルモ之ヲ以テ其實母ハ全ク親權ヲ拋棄シタルモノト云フヲ得ス(判旨第六點)

第一審 長崎地方裁判所

第二審 長崎控訴院

上告人 狩野輪七

訴訟代理人 松田道夫

被上告人 狩野キチ

右當事者間ノ地所取戻登記名前替請求事件ニ付長崎控訴院カ明治三十一年六月二十日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之レヲ棄却ス

理 由

上告論旨第一點ハ被上告人カ原院ニ提出セル控訴ハ控訴狀ノ要件タル原判決ノ表示ヲ欠キ即チ法律上ノ方式ニ從ヒ提起シタル控訴ニアラサレハ原院ハ宜シク職權ヲ以テ却下ノ判決ヲナスヘキモノナルニ之レヲ漫然看過シ判決ヲ與ヘタルハ不法ノ裁判ナリト云フニ在リ○依テ一件記録ヲ調査スルニ被上告人カ原院ニ提出シタル控訴狀ノ末尾ニハ判決ノ表示トシテ第一審判決正本ノ全部ヲ騰載シテ添付シ契印ヲ捺シアレハ該控訴狀ハ原判決ノ表示ヲ欠キタルモノト云フヲ得ス故ニ原院カ之レヲ適法ノ控訴トシテ受理シ本案ニ對シ判決ヲ與ヘタルハ相當ニシテ原判決ハ上告論旨ノ如キ不法ナル點ナシ

其第二點ハ本件爭點ノ歸着ハ甲第一號證ノ完全ニ成立セシヤ否ヤニアリ而シテ該證ノ本人狩野長七ハ

全ク意思能力ノ欠缺セルモノニシテ到底法律行為ヲナスヲ得サルモノナルコトハ第一審裁判所ニ於ケル長七ノ訊問調査ニ徴シ明瞭ナルノミナラス良シ假リニ事實上法律行為ヲナシタリトスルモ全ク無効ナル事ハ法律行為ノ法律ニ照ラシテ明瞭ナルモノナリ然ルニ原院カ此重要ナル上告人ノ申立ヲ漫然看過シテ判決ヲ與ヘタルハ事實ヲ不當ニ確定シタル不法ノ裁判ナリト云ヒ」其第三點ハ上告人ハ原院ニ於テ被上告人狩野キチカ第一審裁判所ニ於ケル訊問ニ對シ「甲第一號證ハ知ラス云々」輪七カ長作ヨリ讓受ケタル地所ノ事ニ就キ原告ト輪七ト談合ヲ爲シタルコトナシ云々」ト申立タルコトヲ立證方法トシテ採用シ甲第一號證ハ被上告人ニ對シ差入レタルモノニ非サル旨ヲ抗辯シタルニ原院ハ此重要ナル上告人ノ申立ヲ漫然看過シ事實ヲ不當ニ確定シタルハ不法ノ裁判ナリト云フニアルモ○抑モ甲第一號證ノ成立セシ基因ハ本訴論地ハ元狩野長作ノ所有ニ係リ長作ハ明治二十八年三月十六日死亡セシ故ニ該地ハ當時幼者タル狩野長七ノ相續スヘキモノナルニ上告人輪七ハ明治二十八年一月十六日付ヲ以テ該地ヲ長作ヨリ買受ケタルモノ、如ク假裝シ登記名前替ヲ爲シ幼者長七ノ後見人ニアリナカラ之レヲ長七名義ニ爲サ、ルニ因リ岩崎休彌ハ幼者保護ノ爲メ右地所取戻方談判ニ立入り明治二十八年十一月中岩崎休彌カ長七ノ爲メニ約定書ヲ上告人輪七ヨリ受取ルニ當リ岩崎休彌狩野長七兩名宛ニ之レヲ作製セシメ取置キタルモノナリト云ヒ而シテ岩崎休彌ハ右緣故ヲ以テ被上告人狩野キチト共同原告トナリ第一審裁判所ニ本訴ヲ提起シタルモノナリトノ事實ハ第一審以來ノ記録ニ徴シテ明カナリ果シテ以

上ノ事實ニ因リ甲第一號カ成立セシモノトスレハ岩崎休彌カ幼者長七ノ利益ノ爲メ該約定書ヲ上告人ヨリ交付セシメタル筋合ニシテ當時長七ハ意思能力ノ欠缺セシモノトスルモ又ハ被上告人キチカ該證ノ成立セシ事實ヲ知ラス若クハ其談合ヲ爲シタルコトナシトスルモ該約定ハ幼者長七利益ノ爲メ有效ニシテ之レヲ法理ニ照ラスモ無効ニ歸スヘキ謂ハレナシ殊ニ此第二點第三點ニ論告スルカ如キ事項ハ原院ニ於テ上告人カ重要ナル點ニシテ判斷ヲ受クヘキ事項トシテ申立タルニ非サルコトハ原院ノ最終ノ口頭辯論調査中上告人申立ノ部ニ「本訴ノ爭點ハ二點ニ止マルモノニシテ甲第一號ノ所謂別紙目錄ナルモノハ五畝二十歩ノ一筆ヲ記載シタルモノ云々」控訴人即チ幼者ノ實母ハ後見行為トシテ訴訟ヲ提起スル能力ナキモノ云々」トアルニ徴シテ自ラ明カナリ然ラハ上告人カ當院至リ論告スルカ如キ事項ニ對シ原院カ判斷ヲ與ヘサルモ之レヲ以テ事實ヲ不當ニ確定シタルモノト云フヲ得ス其第四點ハ被上告人狩野キチカ第一審裁判所ニ於テ上告論旨第三點ノ如ク申立タルノミナラス「岩崎休彌高橋作平等ニ輪七ヨリ地所ヲ取戻シ吳レヘキコトヲ依頼シタルコトナシ」又ハ自分ト輪七トノ間ニ訴訟ノ起リ居ル等ノコトモ何モ知ラス」ト申立テタルコトアルニ依レハ原院ニ於テ「キチカ」ノ代理人ト稱スル阿部清ハ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺アルコト明瞭ナルニ拘ハラズ民事訴訟法第四十五條ヲ適用セス漫然之レヲ看過シ判決ヲ爲シタルハ不當ノ裁判ナリト云フニアレトモ○原院ニ提出シタル控訴狀ニハ狩野キチカ辯護士阿部清ニ訴訟代理ヲ委任スル旨ヲ記載シ「キチカ」調印アル書面委任ヲ添

付シアレハ本件ニ於テハ此他授權ノ必要アルヘキモノニ非サレハ本論旨モ上告其理由ナシ
 其第五點ハ上告人ハ始終甲第一號證ハ五畝二十歩ノ地所ノ爲メニ高橋作平ニ渡シタルモノナルヘシト
 思料スル旨ヲ申立タルモ未ダ曾テ該證ヲ狩野長七若クハ岩崎休彌ニ差入レタリト申立タルコトナシ然
 ルニ原院ハ其判決ノ事實ニ「甲第一號證ヲ同人及ヒ岩崎休彌宛ニ差入レタルコトハ之レヲ認ムルモ
 云々」ト掲ケアルハ不當ニ事實ヲ確定シタル不法ノ裁判ナリト云フニアレトモ○原判決ノ趣旨ハ敢テ
 甲第一號證ハ狩野長七若クハ岩崎休彌ニ對シ直接ニ差入レタルコトナシ上告人カ認メシモノトシテ事實
 ナ摘示シタルモノナラヌ元來該證ノ宛名ハ岩崎休彌及ヒ狩野長七ノ兩名ニシテ之レヲ間接ニ高橋作平
 ニ渡シタルニモセヨ上告人ヨリ差入レタルモノニ係ル事實ハ上告人モ敢テ爭ハサリシ所ナルヲ以テ原
 判決ハ其事實摘示ニ「甲第一號證ヲ同人及ヒ岩崎休彌宛ニテ差入レタルコトハ之レヲ認ムルモ云々」ト掲
 ケシモノナレハ該判決ハ上告所論如キ不法ナル點ナシ

其第六點ハ上告人輪七ハ被上告人長七ノ撰定後見人タルコトハ明瞭ニシテ即チ上告人輪七ハ被上告人
 長七ノ法定代理人ナリ而シテ本件ノ如キ後見人ト被後見人トノ利益ノ相反スル場合ニ於テ被後見人ニ
 對シ訴訟ヲナサント欲セハ相當ノ手續ヲ履行シ後見人ヲ免シ別ニ法定代理ヲ撰任シ然ル後チ前ノ後見
 人即チ法定代理人ニ對シテ訴訟ヲ提起スヘキモノナリ然ルニ原院ハ如斯場合ハ幼者ノ實母ハ親權ノ基
 礎ニ基キ幼者ヲ保護スル爲メ當然代理權ヲ有スルモノト判定セラレタルハ甚ダ失當ナリ何トナレハ幼

者ノタメニ選定後見人ヲ定メタル場合ハ母ハ固有ノ親權ヲ拋棄シタルモノニシテ即チ選定後見人ニ於
 テ親權ヲ行使スルモノナリ而シテ親權ト後見權トハ兩立スルコト能ハサルモノニシテ固有ノ親權ヲ行
 使スルモノアラサル場合ニ於テ始メテ後見人ノ撰定ヲ要スルモノナリ然ラハ如何ニ母ハ固有ノ親權ヲ
 有スルモノナリトスルモ一旦其親權ヲ拋棄シ撰定後見人ヲ定メタル以上ハ原院カ判決スル如ク親權ノ
 基礎ニ基キ幼者保護ノタメ當然代理權アリト云フ事ヲ得ンヤ苟モ親權或ハ後見權ノ如キハ法律ニ依リ
 テ其效力及ヒ其範圍ノ確定スルモノニシテ法律以外ニ親權ヲ認ムルコトヲ得ス果シテ然ラハ法律ニ依
 リ一旦拋棄シタル親權カ後見權ノ消滅セサルニモ拘ハラス母ニ親權アリトスルハ法律上所謂無キ有ト
 スルモノニシテ原院ノ判決ハ即チ法律ヲ曲解シタル不法アル裁判ナリト云フニ在リ○依テ按スルニ元
 來親權ヲ有スル實母カ自ラ其幼兒ノ後見ヲ爲サスシテ他人ヲ其後見人ニ選定スルモ之レヲ以テ其實母
 ハ全ク親權ヲ拋棄シタルモノト云フヲ得ス而シテ本件ノ如キ後見人ト被後見人トノ利益相反スル場合
 ニシテ民法ノ實施セラレサル當時ニ在テハ別ニ相當ノ手續ヲ盡スヘキ方法ナカリシ故ニ其親權ヲ有セ
 シ者カ其幼者ヲ保護シ若シハ代表スルカ如キハ當然ノ權利トシテ當院モ認メ來ル慣例ナリ故ニ原院ニ
 於テ幼者狩野長七保護ノ爲メ其實母「キチ」カ本訴ヲ提起シタルハ當然ノ處置ナリト判定シタルハ相當
 ニシテ原判決ハ上告人論告ノ如キ不法ノ點ナシ

以上説明スルノ本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ノ規定ニ依リ

之レヲ棄却スルモノナリ

○取込金請求ノ件、明治三十一年二月十四日第一民事部判決

○判決要旨

一 債務者カ將ニ身代限ト爲ラントスルニ際シ其債權者ニ對シ無資力ナルコトヲ示シ債權ノ減損ヲ求ムル目的ヲ以テ名ヲ賣買ニ假裝シ其財産ヲ他人ノ所有名義ト爲シタル行爲ハ不法ナリ

一 不法ノ原因ヲ憑據トスル請求ハ法律ノ保護スヘキモノニアラス(以上判旨第一二三點)

第一審 大分地方裁判所 第二審 長崎控訴院

上告人 草野嘉市郎 訴訟代理人 米田 實

被上告人 足立マチ 訴訟代理人 羽田彦四郎

右當事者間ノ取込金請求事件ニ付長崎控訴院カ明治三十年十一月十九日言渡シ判決ニ對シ上告人ヨリ

全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理由

上告論旨第一點ハ原院判決理由ハ「冒頭ニ於テ係争ノ家屋敷ヲ上告人先代ヨリ被上告人先代ニ讓渡セシハ假裝ノ賣買ナリト認定セラレ上告人請求ノ旨趣ヲ認メナカラ其後文ニ於テハ該假裝賣買ノ原因ハ債權者ニ對スル詐害行爲ナルヲ以テ上告人カ假裝ヲ主張シテ本訴ノ請求ヲ爲スハ不法ノ原因ヲ據憑トシテ權利ヲ主張スルモノコ外ナラス元ヨリ法律ノ保護ヲ與フヘキモノニアラサルナリ因テ控訴人ノ請求ヲ不當トシ上告人ノ請求ヲ排斥セラレタルモ上告人先代カ被上告人先代ト本訴家屋敷ノ假裝ノ賣買ヲ爲シ置キタルヲ上告人先代死亡後被上告人先代ニ於テ上告人純一郎チシテ家資分散ヲ受ケシメタルモノナレハ犯罪者ハ被上告人ニシテ上告人ニアラス然ルヲ上告人ヲ以テ不法行爲ヲ原因トスルモノトセラレタルハ法則ヲ不法ニ適用シタル違法ノ判決ナリト云ヒ」其第二點ハ原院判決理由ニ「健次郎コシテ自己ノ財産尙ホ以テ負債ヲ償却シテ餘アレハ何チ苦ンテ脱走チ企ツルカ如キ事アラン(中略)當時本訴ノ家屋敷ニシテ敬藏ノ所有名義ニ更メ置カサリシナラハ必スヤ債權者ノ請求ヲ免カレサリシナルヘシ

假裝ノ賣買○不法ノ原因

(中略)即チ債權者ヲ詐害スル行爲ナリシコト亦疑ヲ容レズト説明シ該判旨ニヨレハ當時本訴ノ家屋ヲ敬藏名義トナシタリシ爲メ上告人先代ノ債權者カ請求ヲ爲サ、リント云フニ過キス進ンテ上告人先代ノ債權者ヨリ請求ヲ受ケタリトノ事實ヲ認メラレタルニアラス果シテ然ラハ上告人先代へ本訴ノ家屋ヲ假裝ニ賣却セシ行爲ヲ以テ債權者ヲ詐害スル行爲ナリト云フヲ得ス何トナレハ當時該家屋カ上告人先代ノ所有名義タレハトテ必スシモ債權者カ請求スヘキモノナリ又其所有名義カ被上告人先代敬藏ニ移轉シタレハトテ必スシモ債權者カ請求スヘキモノニアラストノ一定ノ法理若クハ習慣アルニアラス然シテ詐害行爲ナルモノハ債權者ヲ害スル意思ヲ以テ自己ノ財産ヲ藏匿若クハ減少スルモノナレハ其之レヲ爲スヘキ當時即チ本訴ノ家屋ヲ被上告人先代敬藏ニ賣渡ノ當時債權者ヨリ請求アリシトノ事實ナカルヘカラス蓋シ請求ナキニ債權者ヲ害スルトノ行爲ヲ生セサレハナリ加之債權者ヨリ請求ナキ當時ニ在テ自己ノ財産ヲ賣却スル行爲ヲ以テ直チニ債權者ヲ詐害スルモノナリト云フカ如キハ惡意ヲ推測スルモノニテ一般惡意ハ推測セストノ法理ニ戻ルモノナリ然ルニ原院ハ相續人タル上告人ニ身代限リノ事實アルヲ以テ上告人先代カ被上告人先代敬藏ハ賣買ヲ假裝シタルハ債權者ヲ詐害スル行爲ナリトセラレタルハ法則ナリ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリト云ヒ」其第三點ハ原院ハ本訴上告人ノ請求ヲ斥クルニ當リ上告人先代健次郎カ被上告人先代敬藏へ本訴ノ家屋ヲ假裝ニ賣買セシハ債權者ヲ詐害スルモノナルヲ以テ法律ノ保護ヲ與フヘキモノニアラストセラレタルモ抑モ相續人ナルモノハ先代

ノ權利義務ハ總テ繼承スルモ先代ノ違法行爲ヲモ繼承シタルモノト云フヲ得ス然シテ本訴ノ犯罪行爲ナルモノハ上告人先代カ單ニ被上告人敬藏へ本件ノ家屋ヲ賣却シタルノミニテ成立スルモノニアラスシテ身代限ノ處分ヲ受ケ始メテ成立スルモノト去レハ家屋ノ假裝的賣買ト身代處分トノ二者ヲ併セ背法ノ所爲トナルヘキモノナリ然シテ本件ノ家屋賣買ハ先代健次郎ニ於テナシタルモ身代限ノ處分ヲ受ケタル當時ニ在テハ先代健次郎ハ既ニ死亡シ相續人タル上告人カ身代限ノ處分ヲ受ケタルモノナリ左レハ上告人ニ背法行爲アリトスルニハ少クトモ上告人カ先代健次郎ノ爲シタル賣買ハ假裝ニシテ債權者ヲ害スル詐害行爲ナリトノコトヲ知リタルトノコトヲ認メサルヘカラス何トナレハ先代ノ爲シタル行爲ノ何タルヲ知ラサル相續人ニ背法行爲アリトスルヲ得ス殊ニ上告人ハ幼者ニシテ其當時即チ身代限處分ヲ受クルトキニ在テハ先代健次郎カ爲シタル賣買ハ假裝ナルヲ將タ眞正ナルヤヲ辯知スルヲ得ス從テ之レカ處分ノ如何ヲナスヲ得サルモノナルニ原院ハ上告人カ身代限處分ヲ受クル當時ニ在テ先代カ爲シタル行爲ノ背法ナルヲ知リシヤ否ヤヲ取調ヘスシテ直チニ背法ナリトセラレタルハ法則ナリ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ

案スルニ原判決ハ上告人先代健次郎カ幾多ノ負債アリテ將ニ身代限ト爲ラントスルニ際シ其債權者ニ對シ無資力ナルコトヲ示シ債權ノ減額ヲ求ムルハ目的ヲ以テ名ヲ賣買ニ假裝シ本件ノ家屋ヲ被上告人先代敬藏ノ所有名義ニ爲シタル事實ヲ認定シ而シテ本件上告人ノ請求ハ此ノ不法ノ原因ヲ憑據トスルモ

ノナルカ故ニ法律ノ保護スヘキモノニアラスニテ其請求ヲ棄却シタルモノナルコトハ其判文上明白ナリトス而シテ原判決ノ認定シタル上告人先代健次郎ノ行為タルヤ其目的ニ於テ不法ナルヲ以テ不法ノ行為トシテ論スヘキモノニシテ假令上告人自身ニハ毫モ不法ノ行為ナシトスルモ其先代ノ爲シタル不法行為ヲ原因トシテ請求ヲ爲ス以上ハ法律ハ之ニ救済ヲ與フヘキモノニアラサルヤ毫モ疑ナ容レヌ是ヲ以テ假ニ上告論旨第一點ノ如ク被上告人先代敬藏ハ當時上告人純一郎ノ後見人タルニ拘ラス上告人純一郎ヲシテ身代限ノ處分ヲ受ケシメタルモノトスルモ又ハ其論旨第二點ノ如ク上告人先代健次郎ハ假裝ノ賣買ヲ爲スノ當時其債權者ヨリ辨濟ノ請求ヲ受ケサリシモノトスルモ將又上告論旨第三點ノ如ク上告人先代健次郎ハ身代限ノ處分ヲ受ケス且其相續人タル上告人カ身代限ヲ爲シタル當時ハ其先代ノ爲シタル賣買ハ果シテ假裝ノモノナリシヤ否ヤヲ知ラサリシモノトスルモ是等ノ事實ハ毫モ原判決ノ認定シタル不法ナル行為ノ性質ニ變更ヲ及ホスモノニアラス且原判決ハ債務者カ自己ノ財産ヲ賣買シタルコトニ假裝シタルノミノ事實ヲ認メタルニ非スシテ前陳ノ如ク不法ノ行為ヲ爲シタル事實ヲ認定シタルモノナレハ原判決ハ漫然惡意ヲ推測シタルモノニアラサルヤ論ヲ俟タス依リテ上告論旨ハ總テ原判決ヲ非難スルノ理由ト爲スニ足ラサルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ本院ハ民事訴訟法第四百五十二條ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

○貸金請求訴訟再審ノ件

明治三十一年第四百八十六號
明治三十二年二月十四日第一民事部判決

○判決要旨

- 一 再審訴訟ノ本案ニ付テ裁判ヲ爲スニ當リ再審ノ訴ヲ理由ナキモノトシテ不服ヲ申立テラレタル判決ト同一ノ判決ヲ爲スヘキ場合ニハ前判決ヲ維持スル旨ヲ言渡スヘキモノナリト雖トモ其判決主文ニ不服ヲ申立テラレタル判決ト同趣旨ノ文字ヲ記載シテ言渡ヲ爲スモ結局前判決ヲ維持スルノ旨趣ニ歸スルトキハ必スシモ不法ト云フヲ得ス(判旨第一二點)
- 一 辯論ヲ再審許否ノ點ニ制限シタル場合ニ其辯論ニ列席セサル判事カ再審許否ノ裁判ニ干與シタルハ不法ナリ(判旨第四點)
- 一 民事訴訟法第四百六十九條第三號ニ所謂判決ノ憑據トナリタル證書カ偽造ナリシトキハ必スシモ訴訟當事者ノ偽造シタル事實アルヲ要スルモノニアラス(附帶上告判旨)

再審訴訟ノ本案ノ判決主文○辯論ニ列席セサル判事ノ偽造ノ證書

再審訴訟ノ本案ノ判決主文○辯論ニ列席セサル判事ノ裁判○偽造ノ證書

六十二

(參照) 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リテ再審ヲ求ムコトヲ得第三判決ノ證據ト爲リタル證書ガ偽造又ハ變造ナリシトキ(民事訴訟法第四百六十六條第三號)

第一審 富山地方裁判所高岡支部 第二審 大阪控訴院

上告人 鷺山孫太郎

訴訟代理人

鹽谷恒太郎
石山彌平
花井卓藏

被上告人 寺垣庄三郎

訴訟代理人

森 作太郎

右當事間ノ貸金請求訴訟再審事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年三月二十一日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立及附帶上告ヲ爲シ上告人ハ附帶上告ハ棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ差戻ス
附帶上告ハ之ヲ棄却ス附帶上告ニ關スル訴訟費用ハ被上告人ノ負擔トス

理由

上告論旨ノ第一點ハ原判決ハ重要ナル申立ニ對シ判決ヲ與ヘス及理由不備ノ裁判ナリト信ス上告人ハ原院ニ於テ一定ノ申立トシテ同院明治二十九年(ネ)第五三二號貸金請求控訴事件ノ判決取消及控訴棄却ノ判決ヲ請求シ被上告人ハ本訴ノ棄却ヲ求ムル旨答辯セリ而シテ原院カ再審事件ニ關スル明治三十

一年二月十八日ノ口頭辯論調査ニハ「一定ノ申立トシテ原告代理人ノ再審ノ訴狀ニ記載ノ通り申立タリ」被告代理人ハ御廳二一九(ネ)第五三二號事件ノ判決ヲ認可セラレ本訴ヲ却下スト判決アリタリト申立タル旨明記アルヲ以テ大阪控訴院明治二十九年(ネ)第五三二號事件ニ付同院カ明治二十九年十一月三十日ニ言渡サレタル再審訴狀ニ表示ノ判決ニ對シ上告人カ爲シタル取消ノ申立ハ原院カ判決ヲ爲ス可キ重要ナル事項ナリ然ルニ原院ハ之ニ對シ何等ノ説明ヲ與ヘス又何等ノ判決ヲ爲ササルハ不法ノ裁判ナリト信スト云ヒ追加第一點ハ上告人ハ判決ヲ受クヘキ事項トシテ「大阪控訴院明治二十九年(ネ)第五三二號貸金請求控訴事件ノ判決ヲ取消シ控訴ヲ棄却ス」トノ申立ヲ爲シ而シテ被上告人ハ本訴却下ノ裁判ヲ要求セリ然ルニ原院ハ其判決主文ニ於テ前項ノ申立ニ對シ何等ノ判斷ヲ與ヘス再審ノ訴ヲ以テ恰モ移送後ノ控訴事件ト同視シ「第一審判決ハ之ヲ廢棄シ云云」ト裁判セリ右ハ判決ヲ受クヘキ事項ニ對シ裁判ヲ與ヘサル不法アルモノトスト云云在リ」又其第二點ハ原判決ハ民事訴訟法第二百三十一條ノ規定ニ違背シ申立ナキ事物ヲ當事者ニ歸セシメタル違法ノ裁判ナリト信ス原判決ハ其主文ニ於テ「原告ハ被告ニ明治十九年一月二十九日ヨリ判決執行濟ニ至ル迄元金貳千八百圓ニ一ヶ月百圓ニ付一圓ノ利子元金八百圓ニ一ヶ月百圓ニ付一圓貳拾五錢ノ利子元金百五拾圓ニ一ヶ月拾圓ニ付拾六錢六厘ノ利子ヲ附シ辨濟スヘシ」ト判決セラレタレトモ被上告人ハ原院ニ於テ毫モ前記三口ノ元利金ノ辨濟ヲ求ムルノ請求ヲ爲シタルコトナシ原院ハ其判決ニ示ス如ク上告人ノ再審請求ヲ理由アリトシテ原狀

再審訴訟ノ本案ノ判決主文○辯論ニ列席セサル判事ノ裁判○偽造ノ證書

六十三

回復ヲ許サレタルモノナレハ被上告人ハ第一審判決即チ富山地方裁判所高岡支部明治廿九年(ウ)二九號貸金請求事件ノ控訴人トシテ第一審判決ニ不服ナル程度及理由並ニ控訴審ニ於テ判決ヲ求ムル事項ヲ申立サル可ラス然ルニ被上告人ハ原院ニ於テハ一言モ本件三口ノ元利金辨濟ノ請求ヲ爲シタルコトナシ是レ答辯書及口頭辯論調書ニ徴シテ疑フヘカラサル所ナリ然ルニ原院ハ被上告人ノ意思ヲ推測シ申立サル事項ヲ恰カモ其申立アリタル如ク前記ノ通り判決ヲナシタルハ民事訴訟法第二百三十一條ノ規定ニ違背シタル不法ノ判決ナリト信スト云ヒ追加第二點ハ判決ヲ受クヘキ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之レヲ爲スコトヲ要ストハ民事訴訟法第二百二十二條ノ規定スル處ナリ而シテ此規定ヲ遵守セザルトキハ申立ナキモノト看做ストハ同條末項ノ宣明スル所ナリ本件ニ於テ被上告人ハ書面ニ基キ原院ノ判決主文ニ表示セラレタル如キ申立ヲナシタルコトナシ果シテ然レハ判決主文ニ表示セラレタル點ハ全ク當事者間ニ於テ申立テナキ事項ニ屬セリ右ハ申立テザル事物ヲ當事者ニ歸シ並ニ前記法則ニ違背セル不法アルモノトスト云フニ在リ〇仍テ案スルニ再審訴訟ノ本案ニ付テ裁判ヲ爲ス時ニ當リ再審ノ訴ヲ理由ナキモノトシテ不服ヲ申立テラレタル判決ト同一ノ判決ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ前判決ヲ維持スル旨ヲ言渡スヘキモノトス然ルニ原院ノ所措此ニ出テテ判決主文ニ不服ヲ申立テラレタル判決ト同趣旨ノ文字ヲ記載シタルハ稍妥當ヲ缺ク所アリト雖モ要スルニ前判決ヲ維持スルノ旨趣ニ歸スルヲ以テ申立ニ對シ判決ヲ與ヘス若クハ申立サル事物ヲ當事者ニ歸シタルモノト云フヲ得サルニ因リ此ハ是

未、以、テ、破、毀、ノ、原、由、ト、ス、ル、コ、足、ラ、ス、故、ニ、本、論、旨、ハ、共、ニ、其、理、由、ナ、キ、モ、ト、ノ、ス

上告論旨ノ第四點ハ原院ハ第一回ノ口頭辯論ニ於テ先ツ再審ヲ許スヘキヤ否ヤニ付辯論スヘシト命シ之ヲ制限セリ而シテ第二回ノ辯論ニ至リ別ニ再審許否ノ判決ヲ與ヘサル旨ヲ宣告シ本案ヲ續行シ遂ニ第三回ノ辯論ニ及ヘリ而シテ本案ノ判決ハ再審許否ノ裁判ト共ニ下サレタリ然ルニ再審許否ノ點ニ付テハ辯論ト判決ニ於テ構成判事ヲ異ニセリ從テ其異リタル判事ハ辯論ヲ聽カスシテ再審許否ノ判決ヲ爲シタル不法アルヲ免レスト云フニ在リ〇仍テ案スルニ原院ハ明治三十一年一月十四日ノ口頭辯論ニ於テ辯論ヲ再審許否ノ點ニ制限シテ即日終結シ而シテ其裁判ハ本案ノ判決ト共ニ爲シタルヲ以テ其辯論ニ列席セザリシ判事佐川秀實カ再審許否ノ裁判ニ關與シタルコトハ訴訟記録ニ徴シテ明白ノ事實ナリトス是レ民事訴訟法第二百三十二條ノ規定ニ違背シタルモノニシテ本論旨ハ其理由アルモノトス既ニ此點ヲ以テ原判決ヲ破毀スルコ足ルヲ以テ爾餘ノ上告論旨ニ付テハ必スシモ辯明ヲ要セス仍テ民事訴訟法第四百四十七條初項及同第四百四十八條初項ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

附帶上告ノ論旨ハ抑上告人カ原控訴院ニ於テ再審ヲ求ムルノ根據トシタル富山地方裁判所刑事部ノ判決ハ被上告人寺垣庄三郎カ高尾儀六ヲ其自宅ニ招キ延期依頼書及ヒ鷺山孫太郎ノ實印ヲ偽造セシコトヲ共謀シ庄三郎宅ニ於テ延期依頼書中寺垣様鷺山孫太郎ノ數字及九月二十九日中九廿九ノ都合十一字ハ庄三郎其他ハ儀六ニ於テ筆記シ孫太郎ノ名下及印紙ノ消印ニハ儀六カ庄三郎宅ニ於テ偽造セシ印章

ヲ押捺シ延期依頼書(即チ甲第八號證)ヲ偽造シ之ヲ大阪控訴院民事部ニ提出行使シタリト云フノ事實ニシテ被告ハ此判決ニ服セスシテ控訴ヲ爲シタル處大阪控訴院ニ於テハ前記ノ事實ヲ認ムヘキ犯罪ノ證憑充分ナラストシテ原判決ヲ取消シ更ニ被告人ヲ無罪トスト言渡サレタリ故ニ甲第八號證ハ被告人ニ對シテ之ヲ偽造ノ證書ナリト云フハ甚ダ不當ナリ隨テ此被告人ニ對シテ取消サレタル判決ヲ根據トシテ民事訴訟法第四百六十九條第三號ヲ適用シテ原狀ニ回復シタルハ不當ニ法則ヲ適用シタルモノナルヲ以テ付帶上告トシテ其判決全部ノ破毀ヲ求メ尙ホ已ニ判決ヲ爲スニ熟シタル事件ヲ以テ御院ニ於テ破毀ノ上直チニ上告人カ再審ノ訴ハ之ヲ却下ストノ御判決相成度但シ順序ニ於テ附帶上告ハ上告人カ上告ノ前ニ於テ其判斷ヲ得ヘキモノト思量スト云フニ在リ〇然レトモ民事訴訟法第四百六十九條第三ニ所謂判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造ナリシトキハ必スシモ訴訟當事者ノ偽造シタル事實アルヲ要スルモノニ非ラス而シテ原判決ノ憑據トシタル事實ニ依レハ高尾儀六ニ對スル甲第八號證偽造ノ判決既ニ確定シタルコト明カナルヲ以テ原院カ再審ノ訴ヲ許シタルハ相當ニシテ附帶上告ハ到底理由ナキモノトス仍テ民事訴訟法第四百五十二條及ヒ第七十二條初項ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

〇株式公賣效果不成立確認請求ノ件

明治三十二年二月十五日第二民事部判決

〇判決要旨

一 私證書類ハ其作製ニ關與セサル者ノ否認ノミニ依リテ直チニ其證據方ヲ失フヘキモノニアラス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 平田好 日本製糖株式會社社員 訴訟代理人 佐藤準吉

被上告人 藤田仙助 外十三名

右當事者間ノ株式公賣效果不成立確認請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年二月三日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ且ツ被上告人吉見通三、齊藤清八ハ期日出頭セサルニ付欠席ノ儘判決アリタキ旨申立被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ差戻ス

私證書ノ證據方

上告追加理由第一點ハ上告第一點ニ論スル如ク被告上告人云フカ如ク株金拂込ハ延期中ナリトセハ其舉證ノ責任ハ本案公賣處分ヲ不當ナリト主張スル原告タル被告上告人ニ存スル筋合ナルモ上告人ハ便宜上却テ乙第一號證同第四號證ヲ以テ且又該號證臨時總會議事録ニ明載セル詳細ノ議事報告カ農商務省ニ存在セル爭ヒナキ事實ヲ以テ明カニ拂込延期案否決ノ事實ヲ立證シタリ然リ而シテ該書證ノ成立ノ真正ナルコトニ付キテハ被告上告人ハ素ヨリ爭ハサルモノニシテ單ニ其效力ニ付無効ヲ主張シ即チ議決ノ效力ヲ認メサルモノナルコト原院口頭辯論調查控訴狀並ニ第一審調查等ニ於テ明瞭ナリ然ルニ原院ニ於テハ恰モ被告上告人ニ於テ絶對的ニ乙第一號證同四號證ノ署名捺印ノ真正迄ナモ否認シ居ルカ如クニ理由ヲ付シタルハ不法ニ事實ヲ確定シタルモノトス假リニ若シ原院ハ此點ニ於テ誤謬無カリシモノトセハ進ンテ其議事録ノ有效無効ヲ判斷セサル以上ハ爭チ決スルコト能ハサル理ナレハ之レニ付キ寸毫ノ判斷無キ原判決ハ理由ヲ付セサル不法アルモノト云ハサルヘカラスト云フニ在リ○依テ審案スルニ他人カ作リタル私證書類ハ其作製ニ關與セサル者即チ其署名者ナリト主張セラレサル者ノ否認ノミニ依リ直ニ其證據力ヲ失フヘキモノニアラス然ルニ原院ニ於テ上告人カ提出シタル乙第一、第四號證即チ株主總會ノ議事録ハ議長及ヒ取締役名義ノ連署株主總代ノ名義ノ副署アル私書タルニ過キサルヲ以テ被告上告人之レヲ否認スル以上ハ他ニ該證ノ真正ナルコトヲ舉證スルニアラサレハ被告上告人ニ對シ證

據トスルヲ得スト判斷シタルハ其當チ得サルノミナラス被告上告人ハ乙第一、第四號證ノ存在ヲモ絶對ニ否認シタルモノニアラスシテ該證ニ監査役ノ調印ナキ理由トシ其無効ナルコトヲ抗辯セシコトハ原院法廷調書ニ依リ明カナルニ原院ハ其爭點ニ對シ判斷ヲ與ヘスシテ被告上告人カ絶對ニ其存在ヲモ爭ヒ之レヲ否認シタルモノノ如クシテ前照ノ如ク判斷シタルハ上告人所論ノ通り不法アル裁判ニシテ破毀ノ原由アルモノトス已ニ此點ニ依リ原判決ヲ破毀スル以上ハ他ノ上告論點ニ對シ一々説明ヲ與フルノ必要ナシ仍テ之レカ説明ヲナサス

以上説明ノ如クナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ同第四百四十八條第一項ニ從ヒ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ差戻スヘキモノトス

○離婚復籍請求ノ件

明治三十一年第二百八號
明治三十二年二月十六日第一民事部判決

○判決要旨

一 復籍ハ離婚ヨリ生スル當然ノ結果ナルヲ以テ離婚請求ト復籍請求

離婚請求ト復籍請求○獨立セル二個ノ訴

離婚請求ト復籍請求○獨立セル二個ノ訴

七十

トハ獨立セル二個ノ請求ニアラス故ニ一ノ訴ヲ以テ此二個ノ請求
ヲ爲スモ明治三十三年法律第四百號第三條ニ違反スルモノニアラ
ス(第二輯第三卷所載明治二十
八年第七十九號判決參看)

(參照) 婚姻ノ不成立無効離婚又ハ同居ノ訴ニ縁組ノ不成立無効及ヒ離婚ノ訴モ亦同
シ(贅養子縁組ノ場合ニ於テハ婚姻ノ不成立無効離婚又ハ同居ノ訴ニ縁組ノ不成立無
効又ハ離婚ノ訴ヲ併合スルコトヲ得本條ノ訴ニ他ノ訴ヲ併合シ及ヒ他ノ種類ノ反訴
ヲ提起スルコトヲ得ス但本條ノ訴ノ原因タル事實ヨリ損害賠償及ヒ養料ノ請求ニ付
テハ此限ニアラス(明治二十三年法律
第四百四號第三條)

第一審 新潟地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 三國キヨ 訴訟代理人 熊谷寛治

被上告人 三國義雄 外一名 訴訟代理人 山口 憲

右當事者間ノ離婚復籍請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十一年四月十八日言渡シタル判決ニ對シ上告
人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ
立會檢事岩野新平ハ意見ヲ陳述シタリ

判 決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理 由

上告論旨ハ原院ニ於テ離婚請求ト復籍請求二個獨立ノ訴訟ニシテ明治二十三年法律第四百號第三條ノ
規定ニ背キタル訴訟トシテ之レヲ却下セラレタルモ離婚復籍ハ一個ノ訴訟ニシテ決メテ二個獨立ノ訴
訟ト云フ可カラス何トナレハ復籍ハ離婚ノ結果ニ外ナラサレハナリ然ルニ原院カ離婚ト復籍トハ二個
獨立ノ訴訟トシテ本訴ヲ棄却セラレタルハ不當ニ法則ヲ適用セラレタルモノニシテ民事訴訟法第四百
三十五條ニ該當スル不法ノ判決ナリト云フニ在リ
按スルニ復籍ハ離婚ヨリ生スル當然ノ結果ナレハ純然タル二個獨立セル請求ヲ併合シタルモノニ非ス
故ニ本訴ノ如キハ明治二十三年法律第四百號第三條ニ謂フ所ノ他ノ訴ヲ併合シタルモノト云フヲ得ス
然ルニ原院カ之レヲ不適法ノ訴トシテ却下シタルハ違法ニシテ上告ハ其理由アリ尙ホ他ニ上告追加論
旨アリト雖モ前顯説明ノ如ク原判決ヲ破毀スヘモノナルヲ以テ特ニ之レカ説明ヲ爲スヲ要セス
依テ民事訴訟法第四百四十八條第一項ニ照シ主文ノ如ク判決ス

○藍葉引渡請求ノ件

明治三十一年二月十八日第一民事部判決

○判決要旨

一番頭ト稱スル雇人ハ常ニ主人ノ爲メ商行爲ヲ爲スヲ通例トスルカ故ニ其行爲ハ主人ノ代理資格ヲ以テ爲シタルモノト認ムルヲ得ヘシ(判旨第二點)

第一審 浦和地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人 新井大右衛門

訴訟代理人 吉田 珍雄

被上告人 須永半五郎

右當事者間ノ藍葉引渡請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十一年十月十二日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ本案係争物ハ第一審相被告タル中島德次郎カ訴訟齊藤音七へ賣渡シタルモノニシテ其藍葉ハ初メ運送委託ノ品ナリト假定スルモ其荷主タル德次郎ニ於テハ自由ニ處分ヲ得ヘキハ法理ノ

認ムル處ナルニモ不拘原院ニ於テハ上告人ノ立證セル德次郎及被控訴人ノ自認音七加藤誠一郎ノ調書ニ掲クル事實ヲ無視シ德次郎カ音七へ賣渡シタル藍葉ハ本案ノ藍葉トハ別物ナリト認メ上告人ノ控訴棄却ヲ言渡サレタルハ事實ヲ不當ニ確定シタル失當ノ裁判ナリト云フニ在リ然レトモ一件記録ニ徴スルニ本件被上告人ハ勿論前記中島德次郎齊藤音七及ヒ加藤誠一郎等ニ於テ上告人カ云フ如キ本案係争物即チ貳百五十貫目ノ藍葉ハ德次郎カ音七へ賣却セシモノナリト陳供シタル事跡ハ上告人カ原院ニ於テ引用シタル調書中絶ヘテ其見ルヘキモノナケレハ原院カ其判決理由中「控訴人ハ右藍葉ハ德次郎ニ於テ之ヲ他ニ賣却シタリト云フモ證人齊藤音七カ買取リタリト云フハ藍葉貳百七拾貫目ニシテ云々本件ノ藍葉ハ貳百五拾貫目ニシテ云々齊藤音七ノ證言ヲ眞實ナリトスルモ其買取リタル藍葉ハ本訴ノ目的物ナリト認ムルヲ得ス」ト說示シ即チ德次郎カ音七へ賣却シタル藍葉ハ本案ノ藍葉ト別物ナリト認メタルハ相當ニシテ要スルニ原判決ハ上告人所論ノ如キ立證ヲ無視シテ事實ヲ不當ニ確定シタル違法アリト云フヲ得ス

其第二點ハ原判決ノ理由ニ「末吉ハ運送店ノ番頭ニシテ末吉ノ爲シタル行爲ハ控訴人(上告人)ニ代リテ爲シタルモノト」判定セラレタレトモ凡ソ雇人若クハ代理人タルモノハ法律上自己ノ取引ヲ爲ス可カラストノ禁令アラサル限リハ自己ノ爲メ何等ノ取引ヲ自由ニ爲シ得ヘキハ勿論ナリ若シ末吉ノ行爲ハ全然上告人ノ代理資格ニ出タルモノトセハ被上告人ハ其點ニ於テ立證セサル可カラズ其立證アラ

サル上ハ上告人ノ主張タル徳次郎ノ依頼ニ基ク賣買周旋則チ未吉タル個人ノ行爲ニ外ナラストノ主張
 ナ正當ト爲テサル可カラス然ルニ原院ハ控訴者タル被上告人ノ主張セル事實上ノ立證ナキヲ責メス
 テ未吉ハ上告人ノ番頭ニシテ未吉ノ行爲ハ上告人ニ代リテ爲シタルモノ云々徳次郎カ音七ニ賣却シタ
 ル藍葉ハ本案ノ係争物トハ別物ナリ云々ト斷定セラレタルハ則チ立證ノ責任ヲ無視シ事實ヲ不當ニ確
 定シタル違法ノ裁判ナリト云フニ在リ

判旨第二點

然レトモ元來番頭ト稱スル雇人ハ常ニ主人ノ爲メニ商行爲ヲ爲スヲ通例トス而シテ本件ノ藍葉ヲ受取
 リタル者ハ新井未吉ニシテ其未吉ハ上告人運送店ノ番頭ヲ爲シ居リタル事實ナル以上ハ其未吉カ爲シ
 タル行爲ハ即チ上告人ノ代理資格ニ出タルモノト論定スヘキハ當然ノ筋合ナルカ故ニ原院カ此點ニ於
 テ被上告人ノ立證ナキニ拘ハラヌ未吉ノ爲シタル行爲ハ控訴人ニ代リテ爲シタルモノト認ム故ニ新井
 未吉カ本訴ノ藍葉ヲ受取りタルト否トハ控訴人ノ責任ニ影響スル所ナシト判斷シタルハ相當ニシテ
 上告論旨ハ其理由ナシトス

其第三點ハ原判文ニ本件ハ控訴人及中島徳次郎ノ兩人ニ係争藍葉ノ運送ヲ委託シ其委託ニ基キ之ヲ提
 起シタルモノナルコトハ訴狀及ヒ被控訴人ノ主張ニ依リ明白ナリトアレトモ(被控訴)被上告人ハ曾テ
 右様ナル事實ヲ陳述シタル事ナシ當事者ノ陳述セサル架空ノ事實關係ヲ舉ケテ裁判ノ理由ト爲シタル
 裁判ハ失當ヲ免レスト云フニ在リ

依テ一件記録ヲ査閲シテ之ヲ案スルニ被上告人カ第一審裁判所ニ提出シタル訴狀中「加藤誠一郎ヨリ
 藍葉貳百五十貫目ヲ買入レ被告徳次郎ハ其引取及ヒ荷出ヲ請負ヒ本年九月下旬ニ其原告ニ引渡ス可キ
 藍葉ヲ俵ニ入レ之ヲ被告新井太右衛門ニ運搬シ而シテ原告ニ送り届ク可キノ手段ヲ爲セリ原告ハ其引
 取ノ爲メ人夫ヲ用意シテ被告太右衛門方ニ至ルニ被告太右衛門ハ假令送り狀ニハ原告ニ到ル可キ指圖
 ナルモノ云々抑留スル旨ヲ主張シ引渡サヌ云々因テ茲ニ請求仕候也」ト在リ而シテ原院カ引用シタル第
 一審判決事實摘示中被上告人ノ陳述ニモ右ト同一ノ事實ヲ主張シアレハ原院カ前掲ノ如ク判示シタル
 ハ亦相當ニシテ上告人所論ノ如キ當事者ノ陳述セサル架空ノ事實關係ヲ舉ケテ裁判ノ理由ト爲シタル
 不法アルモノト云フヲ得ス
 上文辯明ノ如ク本件上告ハ一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ之ヲ棄却ス
 ル所以ナリ

○保證義務履行請求及保證義務消滅確認反訴ノ件

明治三十一年第八十八號
明治三十二年二月二十日第二民事部判決

○判決要旨

一 職權調査ニ屬セサルモノニシテ原院ニ提出セサルモノハ上告論旨ノ基礎ト爲スヲ得ス

第一審 廣島地方裁判所

第二審 廣島控訴院

上告人 吉川金藏

訴訟代理人 上原鹿造

被上告人 森信正市

右當事者間ノ保證義務履行請求及保證義務消滅確認ノ反訴事件ニ付廣島控訴院カ明治三十一年二月十九日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告論旨ハ本件上告人ト被上告人トノ間ノ契約ニハ被上告人ノ爲メニ設ケタル期限アルコトナシ換言スレハ或ル期間内ハ家賃ヲ支拂ハナル可カラサル特約アルコトナシ甲第一號證第六條但書ニハ六十ヶ月間ハ必ス家屋ヲ返却セス良シ之レヲ返却スルモ家賃ハ之レヲ支拂フヘシトノ旨ヲ明定スルモ這ハ借

主ト被上告人カ勝手ニ約定シタルモノニシテ上告人ノ干知セサル所ナリトハ上告人カ原院ニ於テ極論シタル所ナリ別言スレハ第六條但書ハ上告人ノ否認シタル所ナリ而シテ此但書カ上告人ニ對シテ效力ヲ生スルヤ否ヤハ本件ノ曲直ニ直接至重ノ影響ヲ生シ若シ效力ヲ生セスト決スルニ於テハ被上告人ノ主張ヲ言渡スコトヲ得サルニ至ルヘシ然ルニ原院ニ於テハ此争點ニ對シ相當ノ判斷ヲ與ヘス剩ヘ上告人カ甲第一號全部ヲ認メタルカ如キ判定ヲ表示セラレタリ是レ理由不備ニアラサレハ認メサルコトヲ認メタリト誣ヒタル不法アルモノナリト云フニ在リ○依テ按スルニ上告人ハ原院ニ於テ單ニ甲第一號證第六條ノ但書ハ保證セシモノニアラサル旨ヲ申立テタルニ止リ該但書ハ被上告人ト本件家屋ノ借主(訴外人瀧村朝次郎)トノ間ニ於テ擅ニ約定シタルモノニシテ上告人カ本件ノ保證ヲ爲ス際記載シアラサリントノ抗辯ハ原院ニ提出シアラサルナリ而シテ本點ノ如キハ職權調査ニ屬セサルモノニシテ原院ニ提出セサルモノハ上告論旨ト爲スヲ得ス加之ナラス原院カ上告人ニ本件ノ保證義務アリト判定シタルハ單ニ甲第一號證第六條ノ但書ノミニ依リテ爲シタルニアラスシテ甲第一號證全般ニ依リタルコトハ原判文ヲ一讀スルトキハ明瞭スルヲ以テ原判決ハ上告人所論ノ如キ不法アルコトナシ本論點ハ上告ノ理由タラサルモノトス

以上ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク言渡ス所以ナリ

○地所取戻並ニ損害賠償請求ノ件

明治三十一年第二十九號
明治三十二年二月二十日第二民事部判決

○判決要旨

一 裁判ノ言渡ニ付キテ辯論及ヒ裁判ニ參與セサル判事カ加ハルモ違
法ニアラス(判旨第二點)(第二輯第二卷所載明治二十
八年第三百八十號判決參看)

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 長崎控訴院

上告人 古城甚右衛門 訴訟代理人 岸本辰雄

被告 小城宗一 小島重太郎

右當事者間ノ地所取戻並ニ損害賠償請求事件ニ付長崎控訴院カ明治三十一年三月二十一日言渡シタル
判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告論旨第一點ハ原裁判所ハ主要争點ニ判斷ヲ遺脱シ且ツ理由不備ノ不法ノ裁判ナリト思料ス甲號證

ハ二千五百九十五番地ノ來歴即チ沿革ヲ證スル公正ノ書證ニシテ上告人ハ該證ニ依リテ係争地ノ實地
及ヒ乙一號證ハ甲號證ノ沿革ト相沿ハサル地旨ナレハ該地ハ繪圖面ト實地トハ位置ヲ異ニシ且ツ乙一
號證ハ到底錯誤ヲ含蓄スルモノナレハ信スルヲ得ヘキモノニアラスト主張シタルモノナリ故ニ甲號證
ニ依リテ該地ノ來歴即チ沿革ヲ證スルヲ得ルモノトセハ乙一號證及ヒ實地ノ形狀ハ果シテ之ト牴觸ス
ルコトナキヤ否ヤ若シ牴觸スルモノトセハ實地ノ位置ニ相違アルヤ否ヤ及ヒ乙一號證ハ錯誤ヲ含蓄ス
ル不當ノ繪圖面ナルヤ否ヤヲ判示シ以テ之カ取捨ヲ判定セサルヘカラスナリ然ルニ原院ハ一面ニ於
テハ甲號證ニ於テ該地ノ來歴ヲ證スルモノトシタルニ拘ハラス上告人カ依テ以テ實地ノ位置ニ相違ア
ルコト及ヒ乙一號證ヲ攻撃スル論點ニ對シテ何等ノ判斷ヲ與ヘスシテ單ニ乙一號證ハ從來村役場ニ存
在スル繪圖面ナリトノ理由ノミニテ之ヲ採用シタルハ不法ナリト云ハサルヘカラス殊ニ甲號證ニ依リ
二千五百九十五番地ノ來歴即チ沿革ヲ證スルニ足ルモノトセハ係争地ノ實地ノ形狀ニシテ該證ノ沿革
ト相沿ハサルニ於テハ二千五百九十五番地ノ所在地ハ係争地ニ該當スル地ニアラサルコトヲ知ルヘキ
ナリ甲號證ニ依レバ二千五百九十五番地ハ明治十九年迄敷地ナリシ地押ノ際一部チ山林トナシ一部
チ畑ト改メタルモノナルニ該證調書ニ依レハ係争地カ全部一樣ニ山林ナルカ如ク乙一號證ニ依レハ全
部畑地ナルカ如クシテ乙一號證ハ實地ト相沿サルモノナレハ二千五百九十五番地ノ一部畑地一部山
林合計四畝歩ノ土地ハ他ニ存在スルモノト論定セサルヘカラス果シテ然ラハ甲號證及ヒ檢證調書ハ共

三上告人ノ申請ニ係ル證人ノ證言ト相待テ上告人ノ主張ヲ證スルニ足ルヘキモノナルニ原院ハ甲號證
 ハ二千五百九十五留地ノ來歴即チ沿革ヲ證スルコトヲ認メタルニ拘ハラズ此沿革ト實地及ヒ乙一號證
 トノ關係相符合スルヤ否ヤニ付キ判斷ヲ與ヘサルハ主要ノ争點ニ判斷ヲ與ヘス即チ理由ヲ具備セサル
 不法ノ裁判ナリト思料ス且ツ甲號證ハ二千五百九十五番ハイ號二十九歩ロ號畑二畝一步合計四畝歩ナ
 ルコ金竹ノ所チ境トセス四反一畝九步即チ十倍以上ノ増畝歩ナルヲ以テ乙一號證ハ實地ト符合セサル
 モノナルコトヲ立證シタルニ單ニ來歴ヲ見ルニ止マルトシタルハ不法ナリト云フニ在リ○依テ記録ヲ
 調査スルニ上告人カ原院ニ提出シタル控訴狀中事實理由ノ部ニハ「原裁判所ハ係争地中云々被控訴人
 主張ノ如クスルトキハ二千五百九十五番ハ比例上非常ノ増畝歩トナリ二千五百九十四番ロ號ハ實在セ
 ス若クハ境界不明ノ所ニ些少ノ畝歩ヲ存スルモノトナルコト等ノ本件ニ付キ重要ノ事實ヲ顧ミス單ニ
 控訴人カ其調製ニ關與セサリシ字圖ニ拘泥シ且ツ利害ノ關係ヲ有スル池田盛直ノ證言ヲ採用シテ控訴
 人ノ請求ヲ却下シタルハ失當ノ判決ト存候」トアルマテニシテ而シテ原院ノ法廷調書中上告人陳述ノ部
 ニハ「準備書面ニ基キ一定ノ申立ヲ爲シ且ツ事實理由ヲ陳述シタリ」トアリ且證據提出ノ部ニ於ケルモ
 「控訴代理人ハ新甲第二三號證ヲ被控訴代理人ハ乙第一二號證ヲ提出シ各書面ニ基キ其立證方法ヲ陳
 述シタリ」トアリ又「控訴代理人ハ證人鶴留兼次郎時任助左衛門西郷八郎太郷田定太郎ノ證言ヲ採用
 シ尙ホ檢證調書ヲ援用スル旨申立タリ」トアルニ止マリ即チ上告人ハ原院ニ於テ比例上非常ノ増畝歩

トナリ云々トノ情況ヲ主張シタルノ外敢テ本論旨ノ如キ事項ヲ主張シタリト見ルヘキ事項ノ存スルモ
 ノナシ而シテ原判決ハ其理由中ニ說示スルカ如ク上告人ノ舉證ハ總テ其主張スル事實ヲ確カムルニ足
 ルモノナシトシ被上告人ノ提出シタル乙第一號證ニ信用ヲ置キ依テ以テ係争地ハ被上告人ノ所有ナリ
 ト斷定セシモノナレハ右増畝歩云々ノ情況タルヤ之ヲ以テ心證ヲ得ルノ證據トスルニ足ラストセラレ
 シ筋合ナルコト推シテ知ルヘシ要スルニ本論旨ハ概シテ上告人カ原院ニ於テ主張セサリシ事項ヲ舉テ
 原判決ヲ批難スルニ歸スルヲ以テ上告其理由ナシ

其第二點ハ原裁判ハ口頭辯論ニ臨席セサル判事松平信英カ言渡ニ臨席シタリ是レ裁判所構成法第百十
 九條ニ違背スル不法アルモノナリ裁判所構成法第百十九條ニハ合議裁判所ノ判決ハ此法律ニ從ヒ定數
 ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ言渡ストアリテ言渡ヲナス判事ハ即チ裁判ヲナス判事タルヲ要スルコト明カ
 ナリト云フニ在リ○然レトモ裁判言渡ニ臨席スル判事ノ如キハ縱シヤ口頭辯論ニ臨席シタル判事ト異
 動アルモ法律ニ規定スル定數ノ判事臨席セル上ハ裁判所ヲ構成セサルモノニ非ス且裁判言渡ノ如キハ
 口頭辯論ニ立會ヒタル判事カ評決シタル裁判ヲ外部ニ表明スルニ過キスシテ當事者ノ利害ニ關係ナキ
 チ以テ之ヲ違法トシテ上告ノ理由ト爲スヲ得セシメサルコトハ既ニ當院ノ判例トスル所ナリ故ニ此論
 旨モ上告適法ノ理由ナシ

其第三點ハ原裁判ハ法則ニ違背シテ事實ヲ不當ニ確定シタル不法アルモノナリ檢證調書ニ(ホ)(ハ)

ノ間ニハ金竹ノ近傍ニ細少ナル徑路ヲ存スルモ大小ノ杉木生立セル山木ニシテ左右林相ニ於テ差異ノ見ルヘキモノナシトアル此實地ノ形狀ハ二千五百九十四番イ號及ヒロ號ハ共ニ以前一ヶ所ノ地所ナリシコト及ヒ乙一號證ニ依レハ該地ハ畑地ナルヘキニ其實地ハ一様ノ林相ヲ備ヘタル山林ナルヲ以テ乙一號證ノ畑地ニ該當スル地ニアラサルコトヲ推知スルニ足ルヘキモノナルヲ以テ上告人ノ申請ニ係ル數多ノ證人ノ證言ト相待テ上告人ノ主張ヲ證スルニ足ルヘキモノナリ故ニ原院ニ於テ檢證調書ノ此記載及ヒ上告人ノ申請ニ係ル證人ノ證言ト之ニ反スル乙一號證及ヒ被上告人ノ申請ニ係ル證人ノ證言トヲ兩々相對比シテ判決ヲ與フルニ於テハ格別ナルモ然ラスシテ漫然當事者雙方ヨリ申立テタル證人ハ孰モ各申請人利益ノ供述ヲ爲シ其申立全ク相牴觸シ到底該證言ノミニ據リ本件ノ事實ヲ判定スルニ由ナキナリ云々又檢證調書ノ如キ毫モ控訴人ノ主張ヲ確ムルコ足ルヘキモノナシ云々ト判示シ恰モ檢證調書ニハ上告人ノ申請ニ係ル證人ノ證言ニ符合シ若クハ之ヲ補助スル前述ノ記載ナキモノ、如ク檢證調書ノ記載ヲ無視シ依テ不當ニ事實ヲ確定シタルハ不法ナリト云フニアレトモ○本論旨ノ如キハ原院ノ職權ニ屬スル事實ノ認定及ヒ證據ノ取捨ヲ論難スルニ過キササルヲ以テ是亦上告ノ理由ト爲ヌヲ得ヌ以上説明ノ如ク本件上告ハ一モ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ノ規定ニ依リ之ヲ棄却スルモノナリ

○分配金請求ノ件

明治三十年第四百七十一號
明治三十二年二月二十一日第一民事部判決

○判決要旨

一、事實裁判所ハ事情ニ依リ契約ノ眞意ト其契約書ノ明文トカ相符合セサルモノト認ムルトキハ其明文ニ反シテ契約ノ旨趣ヲ解釋スルコトヲ得ヘシ(判旨第一點)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院
 上告人 大竹逸藏 訴訟代理人 古田兼三
 外一名
 被上告人 青木庄太郎 訴訟代理人 武藤直中

右當事者間ノ分配金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年九月二十四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之レヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之レヲ負擔ス可シ

契約ノ解釋

理由

上告論旨第一點ハ原院ノ判決説明ニ依レハ甲第一號證ノ請負金ノ利益一割トアルハ是レ素ト一ノ見込
 ナ記載シタルモノナリト云フコ在レトモ甲第一號證ノ利益チ一割ト見積リタルハ契約者相互ノ間ニ於
 テ他日利益ノ高ニ付キ争ノ生セシ事ヲ慮リ其利益高ノ幾何ニ當ルニ拘ハラス利益ハ總テ一割ト豫定シ
 ダルモノニシテ此一割ハ當事者間ニ於テハ確定不動ノ高ナリトス然ルニ原院ハ當事者間ノ契約明文ニ
 反シ判決シタルハ不法ナリト云フコ在リ

判旨第一點

然レトモ甲第一號證ニハ上告人論述スルカ如キ明文ナキヲ以テ原院ハ敢テ契約ノ明文ニ反スル解釋ヲ
 爲シタルモノニアラス加之元來事實裁判所ハ事情ニ依リ契約ノ眞意ト其契約書ノ明文トカ相符合セサ
 ルモノト認ムルトキハ契約書ノ明文ニ反シ契約ノ旨趣ヲ解釋スルモ毫モ妨ケアルコトナシ何トナレハ
 契約書ハ必スシモ當事者ノ合意ヲ誤リテ記載スルコトナキヲ保セサレハナリ故ニ本點ノ上告論旨ハ結
 局原院ノ職權ニ屬スル契約ノ解釋ヲ謂レナク非難スルニ外ナテサレハ固ヨリ上告ノ理由ト爲スニ足ラ
 ス

其第二點ハ原院ノ判決ハ争點以外ニ於ケル判決ナリ何トナレハ被告上告人ニ於テ第一審裁判所ニテ争ヒ
 タルハ要スルニ甲第一號證ノ契約ハ隨意契約ヲ以テ請負ヲ爲ス爲メニ結ヒタル假契約ニシテ該工事ハ
 他ノ人ノ請負フ所トナリタルハ右契約ハ消滅シタリト云フニアリ而シテ第二審ニ於テ争フ所モ答辯書

及ヒ判決書ノ事實摘載ノ部ニ記シアル如ク第一審ト同一ニシテ甲第一號證ノ利益一割ノ點ニ付キ毫モ
 上告人ノ主張ニ對シ争ハサル所ナリ然ルニ原院ハ争點以外ノ利益高ヲ基トシテ判決シタリト云フニ在
 リ

然レトモ原院ノ口頭辯論調書ヲ調査スルニ被告上告代理人ハ「甲第一號證ハ利益ナキモ控訴人(上告人)
 ニ分配スルトノ意思ニアラス」ト辯論シタルコトヲ記載セリ然ラハ則チ被告上告人ハ原院ニ於テ甲第一
 號證ノ契約ハ實際ノ利益如何ニ關セス請負金ノ一割ヲ以テ利益ト見做シ之レヲ分配スヘキモノナリト
 ノ上告人ノ主張ニ對シ論争シタルコト明白ナレハ本點ノ論旨ハ其根據ナシ隨テ其理由ナキヤ論ヲ竣
 タス

其第三點ハ原院ハ被控訴人ニ於テ請負代金ヲ控訴人主張ノ如ク請取リタリトノ證明ナキ如ク説明シタ
 リ然レトモ請負代金ノ受取高ニ對シテハ被告上告人ニ於テ争ハサル所ナリ然レハ證據法上對手タル被
 上告人ハ之レヲ認メタル者トセサル可カラス然ルニ原院ハ受取金高ノ證明責任上告人ニアル如ク論斷
 シタルモノニシテ舉證ノ責任ヲ顛倒シタル判決ナリト云フコ在リ

然レトモ原判決ノ摘示スル事實ニ依レハ被告上告人ハ結局、甲第一號證ノ契約ハ已ニ消滅ニ歸シタルヲ
 以テ其效ナク被告上告人ハ石川島造船所へ石材ヲ納付シ一二回若干ノ下ケ金ヲ受取リタルモ甲第一號證
 ノ請負金トハ全ク別口ノモノナリト云フニ歸着スルヲ以テ假令被告上告人ハ上告人ノ主張スル請負金ノ

受取高ニ付キ特ニ論争スル所ナシトスルモ甲第一號證ノ請負金トシテ上告人主張スルカ如キ金額ヲ受
取リタルコトヲ認メタルモノト爲スコトヲ得サルヤ明カナリ假リニ被上告人ヲ以テ之ヲ認メタルモノ
トスルモ原判決ハ甲第一號證ノ請負契約ニ付キ利益ノアリタル事實ヲ認ムルコトヲ得サルノ理由ヲ以
テ上告人ノ請求ヲ棄却シタルモノナレハ其之レヲ認メタルト否トハ原判決ニ何等ノ影響ヲ及ホスモノ
ニアラス故ニ本點ノ論旨ハ孰レノ點ヨリ觀察スルモ其理由ナシ
以上説明スルカ如ク本件上告ハ一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條ニ依リ主文ノ如ク判
決スヘキモノトス

○縣會議員選舉人名簿削除請求ノ件

明治三十一年第七十七號
明治三十二年二月二十二日第二民事部判決

○判決要旨

一 土地臺帳記名者ニシテ其所有權ヲ他人ニ移轉スルモ其移轉登記ヲ
爲ササル間ハ尙ホ土地臺帳記名者タルノ故ヲ以テ依然其土地ニ對
スル地租ヲ納ムルノ義務アリ從テ納租ニ附隨スル府縣會議員選舉

權ヲ持續スルモノトス

第一審 福島地方裁判所白河支部 第二審 宮城控訴院

上告人 武藤宗彬 訴訟代理人 江木 衷

被上告人 戸部庄次郎 外一名 訴訟代理人 齊藤 二郎

右當事者間ノ縣會議員選舉人名簿削除請求事件ニ付宮城控訴院カ明治三十年十二月二十八日言渡シタ
ル判決ニ對シ全部破毀求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ
立會檢事古賀廉造ハ意見ヲ陳述シタリ

判 決

原判決ハ之ヲ破毀ス

被上告人ノ請求ハ之ヲ却下ス

訴訟費用ハ被上告人ニ於テ負擔スヘシ

理 由

上告論旨ハ私人相互ノ間ニ土地ノ賣買讓與ヲ爲スモ登記ヲ經ルコトアラサレハ地租ヲ徵スルノ道ナキヲ
以テ縣會議員選舉有權者タルニ必要ナル納租ノ標準ハ登記簿ニ依リ既ニ納租ヲ爲スモノヲ以テ有權者
ト爲ササルヘカラス是府縣會議規則第十四條ニ「地租五圓以上ヲ納ムルモノニ限ル」ト明記セル所以ナリ

土地登記名者○府縣會議員選舉權

然ルニ原判決ハ登記ヲ經サル私人間ノ賣買ニシテ未ダ公租ヲ納メサル買受人ヲ以テ官衙ニ對スル納租者ト爲シ登記上納租ノ義務アリ殊ニ現ニ納租セル者ヲ以テ縣會議員選舉者タル資格ナキモノトシタルハ不當ナリト云フニ在リ

按スルニ土地所有者タルノ名義ヲ以テ地租五圓以上ヲ納ムル義務アル者ハ其土地所在ノ府縣會議員ヲ選舉スル權利ヲ有スルコトハ府縣會議規則第十四條ノ規定スル所ナリ而シテ地租ハ土地臺帳記名者ヨリ徵收スヘキモノニシテ即チ土地臺帳ニ所有者トシテ其氏名ヲ登錄セラレタル者ハ其土地ニ對スル地租ヲ納ムル義務アルコト是亦地租條例第十二條ニ明定スル所ナリ然リ而シテ土地臺帳記名者ノ賣買讓與ニ因ル所有權移轉ハ獨リ土地所有權移轉ノ登記ノミニ基キ登錄セラレルモノナレハ縱令土地臺帳記名者ニシテ其所有權ヲ他人ヘ移轉スルモ其移轉登記ヲ爲サル間ハ尙ホ土地臺帳記名者タルノ故ヲ以テ公法上依然其土地ニ對スル地租ヲ納ムル義務アリ從テ納租ニ附隨セル府縣會議員選舉權持續スルハ辯ヲ要セサル所ナリトス今夫レ本件福島縣東白川郡縣會議員選舉人名簿ニ記載セラレタル野中親寬外百貳拾名ハ其縣内ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムヘキ土地ヲ所有シタルモ之ヲ他人ヘ讓渡シ未ダ其登記ヲ經サルモノナルコトハ當事者間ニ爭ヒナキ所ニシテ原裁判所モ亦認メタル事實ナリ縱令野中親寬外百二十名ニ於テ土地ノ所有權ヲ他人ヘ移轉シタルモ未ダ其移轉登記ヲ爲ササル以上ハ尙ホ其土地ニ對スル地租五圓以上ヲ納ムヘキ義務アルヲ以テ縣會議員選舉スル權利ヲ持續スルハ當然ナリ左スレハ上告

人東白川郡長ニ於テ野中親寬外百二十名ヲ其縣會議員選舉人名簿ニ記載シタルハ其當ヲ得タルモノニシテ被上告人ニ於テ上告人ニ對シ本訴請求即チ野中親寬外百二十名ノ氏名ヲ右選舉人名簿ヨリ削除スヘントノ請求ヲ爲スヘキ當ヲ得サル明カナリ然ニ原裁判所ニ於テ府縣會議規則第十四條ハ實際土地ヲ所有シ尙ホ其租稅ヲ納ムル者ノミニ選舉權ヲ與ヘタルモノナリ故ニ野中親寬外百二十名ニシテ登記ヲ經サルモ土地所有權ヲ他人ヘ移轉シタル以上ハ選舉權ヲ喪失シタルモノナリト斷定シタルハ即チ右規則ヲ不當ニ解釋シタルモノト謂ハサルヲ得ス何トナレハ前顯說明ノ如ク該規則ハ土地所有者タルノ名義ヲ以テ地租五圓以上ヲ納ムル義務アル者ニ對シ府縣會議員選舉スル權利ヲ與ヘタルモノナルコトハ其法文ニ徵シテ明カニシテ更ニ地租五圓以上ヲ納ムル外尙ホ其土地ノ實際所有者タルコトヲ要ストノ法意ノ見ルヘキ者ナケレハナリ

以上說明ノ如ク原判決ハ府縣會議規則第十四條ヲ誤解シ遂ニ之ヲ適用セサルモノニシラ本件上告ハ適法ノ理由アルモノナリ而シテ本件ハ審判上前判例ト相反スル所アルヲ以テ裁判所構成法第四十九條ニ據リ民事第一第二部聯合シテ審理判決シ且原裁判所カ認メタル事實ニ依リ裁判ヲ爲スニ十分ナルヲ以テ當院ニ於テ直ニ裁判スヘキモノナリ依テ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ前顯說明ノ理由ニ據リ同第四百五十一條第一號ニ從ヒ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

○不合法讓與取戻請求ノ件

明治三十一年第二百二十三號
明治三十二年二月二十二日第二民事部判決

○判決要旨

一 法律上代理人タル資格ナキ者ニ於テ提起シタル不合法ノ訴訟ト雖
トモ其本人若クハ正當ナル法律上代理人カ之ヲ追認シ其訴訟ヲ受
繼スル以上ハ既往ノ欠缺ハ之カ爲メ自カラ補正セラル、モノトス
(判旨第一、二點)

第一審 大阪地方裁判所

第二審 大阪控訴院

上告人 横井ヨ子

訴訟代理人

川中五郎平
石橋良三郎
友吉

被上告人 横井ミナ

訴訟代理人

小島忠里

右當事者間ノ不合法讓與取戻請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年三月二十五日言渡シタル判決ニ對
シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第一點ハ被上告人横井フサハ横井ミナノ實母タルコト原判決ノ認ムル處ナレトモ實母ナルモ
ノハ絶對的ニ親權ヲ有スルモノニアラス横井フサハ疑ニ甲第一號證ノ和解契約ニ基キ横井家ニ對シ一
切容喙セサルコトヲ誓ヒ爾後離籍シテ横井家ノ關係ヲ絶テタルヲ以テ假令實母ナリトスルモ離籍セラ
レタル上ハ親權ヲ有スルモノニアラサルコトハ民法第八百七十七條ノ規定スル所ニシテ且其實施セラ
レサル以前ト雖モ公ニ認メラレタル普通ノ條則ナリトス此點ニ關シテハ原院辯論調書末尾上告代理
人(控訴代理人入江辯護士ノ部)ニ「假リニ實母子ナリトスルモ今日ハ別居別籍ノモノナレハ親權ナシ」
ト主張シ被上告人横井フサハ横井ミナヲ代表スヘキ資格ナキコトヲ爭ヒタルニモ拘ラス原判決ハ果シ
テ其別籍ナリヤ否ノ點ヲ觀察セスシテ單ニ實母ナルカ故ニ親權アリト説明シタルハ實母タルモノ如何
ナル場合ニ於テモ親權ヲ行フヲ得ルモノト解釋セラレタルモノニシテ即チ法則ニ違背シ且説明ノ理由
ニ不備アルモノナリト云ヒ」其第二點ハ上告人ノ分配ヲ受ケタル財産ハ乙第六號證ニ基キ亡横井勘市
ノ遺贈ニヨリタルモノナルコトヲ主トシテ論争シタルコトハ一件書類ニ徴シ明瞭ナリ然ルニ「其記事
遺言ニタリト見ル可キモノナキヲ以テ勘市カ死跡ノ相續上ニ關スル遺言書トシテ作成シタルモノト
認ムルヲ得ス」ト説明シ即チ勘市ノ相續上ニ關スル遺言ナリト認ムルヲ得サルノ理由ノミナ説明シ果
シテ上告人ニ對シ財産ノ一部ヲ遺贈スルノ意思ヲ表白セラレタルヤ否ヲ説明セサルヲ以テ主タル争點

不合法ノ訴訟○本人若クハ法律上代理人ノ追認

ニ關スル判断ヲ爲サス且説明ノ理由ヲ付セサル不法ノ判決ナリト云フニ在リ

依テ按スルニ本院ノ記録中戸籍簿謄本ニ徴スレハ横井フサナル者ハ被上告人幼者横井「ミナ」ト同籍ニシテ民法上親權ヲ有スル事實ヲ明認シ得ヘク又「フサ」ノ訴訟代理人カ當法廷ニ於ケル一定ノ申立並ニ其答辯中民法實施以前ニ於テハ別籍ノ實父母若シハ他ノ親族カ幼者ノ爲メ自ラ起訴スルコトヲ裁判上許容シ來レル慣例ナルヲ以テ實母タル至親ノ「フサ」ニアリテハ幼者「ミナ」ヲ代表シテ訴ヲ起シ其權利ヲ救護シ得ルハ勿論ナリトノ辯論ニ徴スレハ「フサ」ニ於テ原判決ヲ辯護シ之ヲ維持セントスルモノタル事實ヲ明認セラルヘシ而シテ法律上代理人タル資格ナキ者ニ於テ提起シタル不遺法ノ訴訟ト雖モ適法ニ代理セラレサル當事者又ハ其法律上代理人カ之ヲ追認シ其訴訟ヲ受繼シ得ルコトハ右等ノ人ノ自由ノ權能ナルニ付キ今日適法ニ親權ヲ有スル「フサ」カ現ニ本訴ヲ受繼スル以上本訴ハ追認ニ依テ適法ナル法律上代理人ヨリ提起セラレタルモノトナリ既往ノ欠缺ハ之カ爲メ自カラ補正セラレ此問題ハ頓ニ消滅スヘキ理合ナルヲ以テ前日「フサ」ニ於テ法律上代理人ノ資格ナカリシコトノ理由ニ因リ原判決ヲ論難スルハ無益ニシテ採用セラルヘキ限リコアラズ隨テ此上告論旨ハ原判決ヲ破毀スルノ理由ト爲スヲ得サルモノトス然レトモ原判決理由ヲ審査スルニ合併審理セル他ノ事件ノ當事者横井勘次郎ノ死跡相續ノ主張ニ對シテハ原判決ハ「乙第六號證」證書ハ乙第七號乃至第九號證書ノ勘市ノ自筆ノ氏名ニ照スモ同人ニ自筆ニ係ル書面ナリト認ムルモ其記事遺言シタリト見ル可キモノナキヲ以テ勘市カ死

判旨第一、

跡ノ相續上ニ關スル遺言書トシテ作成シタルモノナリト認ムルヲ得ス」ト説明シテ乙第六號證ニ對シ判断ヲ爲シアルモ上告人ヨネノ提出ニ係ル亡勘市ノ遺贈ヲ受ケタリトノ主張ニ對シテハ判文ノ末尾僅ニ「勘市ノ遺言ナリトシテ其遺產ヲ控訴人兩名カ各甲第四號證第一二ノ如ク讓渡サシメテ相續セシハ不當ナリトス」ト説明シタルノミニシテ如何ナル理由ヲ以テ不當ナリト認メタルヤ毫モ其理由ノ説明ナシ翻テ原審法廷調査スルニ上告人及ヒ勘次郎ノ共同代理人ハ勘市ノ遺言ナリトシテ乙第六號證ヲ提出シ立證ノ旨趣ヲ述ヘタル旨記載シタルノミナラス始終該證ハ兩事件共通ノモノトシテ論辯シタル事跡アリ且上告人ノ代理人辯論ノ部ニ「被控訴人云々ト議論スルモ財產相續ハ被相續人ニ於テ自由ニ爲スコトヲ得從テヨネカ財產ノ相續ヲ受ケタルハ當然ニシテ返還ヲ爲ス可キ筈ナシ」ト記載シアリテ上告人カ遺贈ヲ受ケタル事實ヲ主張シテ防禦シタル事跡明確ナリ夫レ斯ノ如ク上告人カ乙第六號證ヲ提出シテ防禦ノ方法ト爲シ而シテ該證ノ記載ハ勘市ノ自筆ナリト認ムル以上之ヲ排斥セントスルニハ何故ニ遺贈ノ書面ナリト認ム可カラサルヤ其事實理由ヲ明確ニ説明シテ以テ其主張ヲ排斥セサル可カラサル筋合ナルニ原裁判所ハ前掲説明ノ如ク何等理由ヲモ説明セシテ上告人ノ主張ヲ排斥シタルハ裁判ニ理由ヲ付セサル不法ヲ免レサルモノトス既ニ此點ニ付テ原判決ヲ破毀ス可キモノト認ムル上ハ他ノ點ニ對シテ説明スルノ要ナシ

以上ノ理由ヲ民事訴訟法第四百四十七條第一項ニ依リ原判決中上告人ニ對スル部分ヲ破毀シ尙ホ同法

第四百四十八條ニ依リ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ大阪控訴院ニ差戻テ相當トス是主文ノ如ク判決スル所以ナリ

○立替金請求ノ件 明治三十一年第二百四十四號
明治三十二年二月二十三日第一民事部判決

○判決要旨

一 判事カ心證ヲ以テ證據ヲ取捨スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テ其心證ノ證據トスヘキモノハ必スシモ當事者ノ申立テタル事項ニ限定セラルヘキモノニアラス(判旨第三點)

第一審 京都地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 中川新兵衛 訴訟代理人 平井恒之助

被上告人 吉川右内

右當事者間ノ立替金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十一年三月二十九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之レヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之レヲ負擔スヘシ

理 由

上告論旨ノ第一ハ本案請求ノ原因及ヒ數額ニ付テ爭アルモノナリ故ニ本案訴訟ノ曲直ヲ判決スルニハ原因ニ付キ(一)本件請負工事ハ當事者共同ノ事業ナリヤ否(二)若シ共同ノ事業ナリトセハ果シテ損失アリタルヤ否又數額ニ付テハ(一)損失ニ係ル金額ハ合計算幾何ナリヤ否(二)其損失ニ係ル不足金ハ當事者ノ内何人カ之レヲ支出シタルヤ否ヲ判決セサルヘカラサルハ當然ノ順序ナリ而シテ原院ノ説明スル處ヲ査閱スルニ(證人山田辨次郎ノ證言ニ據レハ云々控訴人主張ノ如ク明治廿九年一月以後ハ被控訴人モ本件工事ニ干與シ共ニ成効ニ至ラシメタルモノト認メ得ヘケレハ若シ該工事ニ因テ損失ヲ生シタルトキハ被控訴人ニ於テモ之レカ責ニ任スヘキハ當然ノ筋合ナリ)云々ト説明シ即チ原因ノ第一爭點ニ付テハ上告人ノ主張スル事實ヲ眞實ナリト認メラレタリ然ルニ他ノ三箇ノ爭點ニ付キ原院ハ(控訴人ニ於テ明治二十九年五月一日以後支出シタルト云フ金參千九百九拾五圓九拾七錢五厘ノ工事費ヲ證明スヘキ甲第一號證ハ云々被控訴人ハ甲第一號證計算上ノ事ニ付テハ爭ヒナカリシコトヲ認メ得ヘキモ同號證所載ノ支出ヲモ爭ハサルモノト認メ難シ云々要スルニ控訴人ハ甲第一號證所載ノ支出金額

ナ證明シ能ハサルモノナレハ本件工事ニ因リ生シタル損失ノ幾何ナルヤヲ確認スルニ由ナシ云々ト
 説明シ本件控訴ヲ棄却セラレタルモ右説明スル所ハ漠然前記三箇ノ爭點ヲ混同シタルモ以テ上告人ノ
 主張スル所ノ如何ナル爭點ヲ不當ナリトシ棄却セラレタルヤ之レヲ知ルヲ得ス何トナレハ該説明中
 (被控訴人ハ甲第一號證計算上ノ事ニ付テハ爭ヒナシト陳述シタルモノニシテ素ヨリ其算數上ニ爭ナ
 カリシコトヲ認メ得ヘキモ)云々トアル所ヲ以テ見レハ損失ニ係ル數額ニ付テハ當事者間ニ爭ナカリ
 シトノコト即チ數額ニ關スル第一事實ヲ認メタル如ク左スレハ共同事業上損失アリシトノコト即チ原
 因ニ關スル第二ノ事實モ隨テ原院ニ於テ認メタルモノ、如シ而シテ其下文ニ於テ(要スルニ控訴人ハ
 甲第一號證所載ノ支出金ヲ證明シ能ハサルモノナレハ)トアルヲ以テ見レハ原院ニ於テハ本件ニ付キ
 上告人ノ主張スル事實ニ關シ本件工事ハ當事者共同事業ナリシコト及ヒ其共同事業上ヨリ損失ヲ被リ
 シ事實アリシコト並ニ其損失ニ係ル數額ニ付テハ當事者間ニ爭ナキ事實ナルコトヲ認メ唯其損失ニ係
 リ不足金ノ内上告人カ幾何ヲ支出シタルモノカチ上告人ニ於テ證明シ能ハサルモノナリトノ理由ヲ
 以テ本件控訴ヲ棄却セラレタルモノトノ趣旨ニ解釋シ得ヘシ然ルニ又下文ニ至リ(本件工事ニ因リ生
 シタル損失ノ幾何ナルヤヲ確認スルニ由ナク結局控訴人ノ要求不相立)トアルヲ以テ見レハ上告人ハ
 共同事業上損失ヲ生セシコト即チ原因ニ關スル第二ノ事實ヲ證明シ得アリシト云フナ理由トシ棄却セ
 ラレタルカ如シ果シテ然ラハ上文ニ(素ヨリ其算數上ニ爭ナカリシコトヲ認メ得ヘキモ)ト説明シタル

處ハ即チ當事者間ニ於テ損失ニ係リシ數額ニ爭ナカリシ事實ヲ認メタル事實ト相容レサルノ結果ヲ生
 ス元來上告人ニ於テハ被上告人カ第一審廷ニ於テ爲シタル甲第一號證ハ計算ノ事ニ付爭ナシトノ陳述
 ナ援用シ以テ明治廿九年五月一日以後ノ支出ニ係ル工事費額ノ正確ナルコトヲ立證シ隨而損失アリシ
 事實ヲ立證セル尤モ上告人カ提出セシ計算書ハ被上告人ニ於テ之ヲ認メサルモ右計算ニ記載セル該工
 事ニ關スル總收入金四千三百四拾貳圓五拾錢五厘ノ内請負金四千四百九拾貳圓五拾錢貳厘及森川久次
 郎身元保證金百五拾圓ナルコトハ乙第一號證ニ明記アル所ニ被上告人モ爭ナキ所ナリ又總支出金六
 千百六拾五圓九拾七錢九厘ノ内五月一日マテ平田重吉支拂セシ金貳千三拾圓ハ乙第三號證一乃至四ノ
 工事費請取證又梅ヶ畑村へ交付セリト云フ金三拾圓ハ甲第十六號證ヲ以テ被上告人ニ於テモ其支拂ヲ
 認メ居リ又羽田喜兵衛へ交付セシ金百拾圓ハ甲第十六號證ヲ以テ立證セリ而シテ明治廿九年五月一日以
 後支拂金參千九百九拾五圓九拾七錢九厘即チ上文ニ陳述スル所ノ金額ニシテ此支出金額ノ收入金額ニ
 超過スルコト實ニ壹千貳百貳拾參圓九拾貳錢七厘ナルコト明瞭ナリ左スレハ此超過額即チ不足金ハ工
 事上生セシ處ノ損失ニシテ立證上損失ノ數額ニ付テハ總テ被上告人ニ於テモ異議ナキ事實ナリ然ルニ
 原院ニ於テハ被上告人ニ於テ承認セル事實ニモ拘ハラズ本件工事ニ因リ生シタル損失ノ幾何ナルヤヲ
 確認スルニ由ナシトノ理由ヲ以テ控訴棄却シタルハ即チ承認セル事實ヲ否認シ存在セスト確定シタル
 モノナレハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シタル不法ノ判決ナリト在フニ在リ

案スルニ原判決ノ憑據トナリタル事實ニ依レハ上告人ハ明治貳拾九年五月一日マテノ支出金額ヲ以テ業己ニ損失アリシト主張シタルニ非スシテ其後ノ支出三千九百九拾五圓九拾七錢九厘アリシカ爲ニ損失アリシトノ主張ナリシナリ而シテ原判決ニハ「控訴人(上告人)ニ於テ明治貳拾九年五月一日以後支出シタリト云フ金參千九百九拾五圓九拾七錢九厘ノ工事費ヲ證明スヘキ甲第一號證ハ控訴人ニ於テ作製シタル一ノ計算書ニシテ又其計算ノ基本ト稱スル追加甲第一號證ハ云々右甲第一號及追加證ノ其ニ該支出ヲ證スルノ具トナスニ足ラス云々要スルニ控訴人ハ甲第一號證所載ノ支出金額ヲ證明シ能ハサレハ本件工事ニ因リテ生シタル損失ノ幾何ナルコトヲ確認スルニ由ナシ」ト判示シアリテ明治貳拾九年五月一日以後ノ支出金額及ヒ損失ノ數額ハ共ニ上告人ニ於テ立證スルコト能ハサリシコトヲ説明シアルヲ以テ本論旨ノ如キ違法ノ廉アルコト無シ

上告論旨ノ第二ハ前條ニ掲載セシ如ク工事ノ損失收入上差引金壹千五百貳拾參圓九拾貳錢七厘ニシテ而シテ本件工事ハ當事者間ノ共同事業ナリトノ事實ハ原院ノ認ムル所ナレハ其損失ニ係ル金額ハ素ヨリ當事者以外ノ人ヨリ支出スヘキ筈ナク必ス當事者雙方ヨリ若クハ何レカ一方ノ者ヨリ支出シタルモノト推定スヘキハ普通ノ法則ナリ而シテ被告上告人ニ於テ本件工事費ニ對シ支出シタル金額ハ僅カニ金參拾四圓五拾七錢四厘ナルコトハ被告上告人ノ認ムル甲第十三號證ニ依リ明瞭ナリ然ラハ其餘ノ不足金ハ上告人ニ於テ之レヲ支出シタリトノ事實ハ共同事業ノ結果トシテ當然推定シ得ヘキノミナラス被告上

告人カ第一審廷以來共同事業ノ事實ハ之ヲ認メサルモ其費金ノ支出ニ付テハ(森川久次郎ニ下請負ヲ爲サシメタルニ久次郎ハ資産富裕ナラサル爲メ工事資金ヲ支出シ能ハサルヨリ平田重吉ニ於テ其資金ヲ支出シ居リタルニ中途ニテ之レヲ停止シタルヲ以テ明治廿九年五月一日ヨリ乙第五六號證ノ如ク原告ニ於テ云々支出シタルモノニシテ)ト供述セルヲ以テ即チ上告人カ其費金ヲ支出シタリトノ事實ハ被告上告人ノ認ムル所ナリ然ルニ原院ニ於テ(右甲第一號證及ヒ追加證ハ云々況ンヤ當審ニ於テ全然其支出ヲ認メサルニ於テオヤ要スルニ控訴人ハ甲第一號證所載ノ支出金額ヲ證明シ能ハサルモノナレハ)云々ト云ヒ控訴ヲ棄却セラレタルハ普通推定ノ法則ニ反シ且ツ被告上告人カ承認セル事實ヲ否認シ事實ヲ確定シタルモノナレハ即チ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ然レトモ本訴ニ於テ上告人カ主張シタル事實ハ支出ノミアリテ收入ナシト云フニ非スシテ收支計較シテ壹千五百有餘圓ノ損失アリト云フニ在リシコトハ訴訟記録ニ依リテ明白ナリ既ニ前段ニ説明シタル如ク原判決ニハ上告人ニ於テ損失ヲ證明スルコト能ハサル旨ヲ判示シ即チ上告人ノ支出金額カ收入金額ニ超過シテ損失ニ歸シタル事實分明ナラスト説明シタルモノニシテ全然支出ナシト認定シタルニ非ス故ニ本論旨ハ上告ノ理由トスルニ足ラズ

上告論旨ノ第三ハ凡ソ證據ノ取調ハ裁判所ノ自由ナル判斷ノ範圍ニ屬スルハ勿論ナリト雖モ裁判所カ當事者ノ爭ハサル事實ヲ捏造シ以テ證據力ノ如何ヲ判斷スル材料ニ供スルコトヲ得サルハ當然ナリ而

判旨第三點

シテ本件追加甲第一號證ハ第二審廷ニ於テ被告上告人ハ之ヲ否認シタルニ止リ紙數ヲ挿入編綴シタルヤ否ヤノ點ニ付テハ嘗テ爭ナキ事實ナリ然ルニ原院ニ於テ(追加甲第一號證ハ云々且ツ第一二葉及第五六葉ニハ各數字ニテ枚葉ヲ記シタルモ第三四葉ニハ其記載ナキヲ以テ見レハ後ヨリ之ヲ挿入編綴セシモノト認メラルノミナラス云々右甲第一號及ヒ追加證ハ共ニ該支出ヲ證スルノ具ト爲スニ足ラストノ判斷ヲ爲シタルハ即チ法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ判決ナリト云フニ在リ

然レトモ判事カ心證ヲ以テ證據ヲ取捨スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テ其心證ハ證據トスヘキモノハ必シモ當事者ノ申立テタル事項ニ限定セラルヘキモノニ非ス乃チ原院カ追加甲第一號證ヲ排斥スルニ其心證ハ證據ヲ當事者ノ申立テサリシ證據ノ狀況ニ取リタルハ適法ニシテ本論旨モ亦理由ナシ

以上ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條及ヒ同法第七十二條初項ノ規定ニ依リ主文ノ如ク判決ス

○土地收用補償金請求ノ件

明治三十一年第二百五十七號
明治三十二年二月二十三日第一審民事部判決

○判決要旨

一 事實裁判所ハ鑑定ノ結果ヲ信認シテ採用スルモ其理由ヲ説明スルノ責務ナシ(判旨第一點)

第一審 新潟地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人

勝間田 稔

訴訟代理人

坂本 有隣

被告上告人

鈴木 善八

訴訟代理人

山口 憲

被告上告人

高野 吾吉

右當事者間ノ土地收用補償金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十一年五月四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被告上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔スヘシ

理由

上告論旨第一點ハ原判決ヲ案スルニ「抑モ土地ノ價格ハ其位置收穫負擔等其他諸般ノ事情ヲ參酌スル

ニ非サレハ相當價格ヲ見出スコト能ハス土地收用審査委員會カ單ニ地價ノミニ依據シ算出シタル補償金額ノ當ヲ得サルコト毫モ疑ナ容レテ而シテ當院及ヒ原裁判所及任命シタル鑑定人中山本傳十郎ノ爲シタル鑑定ハ最モ其當ヲ得タルモノト認ムルヲ以テ同人ノ鑑定價格即チ原裁判所カ控訴人ニ對シ被控訴人へ償却スヘシト言渡シタル補償金額ハ相當ナリトス」ト有之而テ土地ノ相當價格ヲ見出サントスルニ當リ該土地ノ收益負擔石代利子歩合等ヲ根據トスルニ非サレハ到底真正ノ相當價格ト認ムルコト能ハサルコトハ上告人カ素ヨリ主張スル所ニシテ即チ控訴理由ノ骨子タリシナリ唯第一審裁判所ニ於テ判決ノ基本ニ供セラレタル鑑定人山本傳十郎ノ鑑定ハ果シテ右ノ根據ニ基キ鑑定シタルモノナルヤ否ヤ鑑定書中毫モ其掲記ナキヲ以テ之ヲ知ルニ由ナク到底信シテ以テ判決ノ基本ト爲スニ足ラサルモノナリトハ是レ實ニ上告人カ控訴提起ノ理由トシタル所ニシテ控訴狀之ヲ掲ケケ口頭辯論ノ劈頭之ヲ陳述シタル所以ナリ左レハ原院ニ於テ尙ホ第一審裁判所カ採用シタル山本傳十郎ノ鑑定ヲ至當ト認メ之ニ基キ判決ヲ與ヘラル、ニ當ツテハ須ラシ該鑑定カ如何ナル理由ニ依リ相當ナルカ該鑑定ハ如何ナル根據ニ基キ鑑定シタルモノト認メラル、カ是等適當ノ事實理由ヲ明示セラルヘキ筈ナルニ單ニ「尤モ其當ヲ得タルモノト認ム」トノ一言ヲ以テ判決セラレタルハ是レ上告人カ原院ニ對スル控訴ノ理由ニ對シ全ク其當否ヲ説明セラレサルモノニシテ即チ事實理由ノ不備ト稱スヘク民事訴訟法第四百三十六條第七號ニ該當スル不法ノ裁判ト云フニ在リ

判旨第一點

案スルニ元來鑑定ノ取捨ハ一ニ事實裁判所ノ職權ニ屬スルモノニシテ事實裁判所カ鑑定ヲ信認シテ採用スルモ必シモ之ヲ信認スルノ理由ヲ説明セサル可カラサルモノニ非ス而シテ原判決摘示ノ事實及ヒ原院ノ口頭辯論調書ニ徵スルニ本件ノ爭點ハ原判決摘示ノ如ク上告人カ收用シタル地所ハ收用當時ニアリテ果シテ幾何ノ價格アリシヤノ一點ニ在ルコト明ケレ而シテ原院ハ原院文ニ於テ明カナルカ如ク數名ノ鑑定人中山本傳十郎ノ爲シタル鑑定ヲ以テ最モ其當ヲ得タルモノト認メ之ニ依リテ爭點ヲ判定シタルモノナレハ原判決ニハ毫モ理由不備ノ瑕疵アルヲ視ス依リテ本點ノ論旨ハ其理由ナシ

上告論旨第二點ハ上告人ハ明治三十一年五月二日原院ニ對シ控訴理由追加申立書ヲ提出シ「被上告人カ第一審裁判所ニ請求セシ金額中上告人ノ爭ハサル金額即チ土地收用審査委員會ノ裁決額ヲ包含セルコトハ爭ヒナキ事實ナリ然ルニ第一審裁判所ニ於テハ其區別ヲ明カニセス併セテ判決ヲ與ヘラレタルノミナラス其爭ヒナキ部分ノ金額ニ對シ爭ヒアル金額ト同シク起訴ノ日ヨリ執行濟迄一ケ年六分ノ利息ヲ附シ償却スヘシト判決セラレタルハ不當ナリ」トノ申立ヲ爲シ右同日ノ口頭辯論ニ於テ該申立ヲ陳述シタリ然ルニ原院ニ於テハ此控訴理由ヲ不問ニ付シ其當否ニ付キ何等一片ノ説明理由ヲモ付セラレサルハ是レ又事實理由ノ不備ニシテ即チ民事訴訟法第四百二十五條第七號ニ該當スル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

然レトモ原院ノ口頭辯論調書ヲ閱スルニ上告人ハ一ダヒ「被控訴人ノ請求スル金額ノ内土地收用審査

會決定額ハ爭ハス其他ノ請求ハ排斥ヲ乞フ」トノ申立ヲ爲シタルモ直ニ之ヲ改メテ「右申立ハ取消シ
 第一審判決全部ノ排斥ヲ請求致候」ト申立テタルコトノ記載アリテ其後ニ至リ此申立ヲ變更シタルコ
 トノ記載ナシ然ラハ則チ上告人ハ原院ニ於テ被上告人請求スル金額全部ヲ爭フタルモノト謂ハサル可
 カラス隨フテ本點ノ論旨ハ畢竟原院ニ於テ爭フタル事實ヲ爭ハサル事實ナリトシテ原判決ヲ非難スル
 ニ外ナラサレハ固ヨリ其理由ナシ

「被上告人眞野村大字吉岡代表者高野吾吉及ヒ右近久七ノ二名ハ口頭辯論期日ヲ懈怠シテ出廷セサル
 モ本件上告論旨ハ總テ法律上ノ問題ニ屬スルヲ以テ右懈怠者ニ對シテモ對席裁判ヲナスヲ相當トス
 以上辯明スル如ク本件上告ハ一モ其理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條ニ從ヒ主文ノ如ク判決
 スヘキモノトス

○貸金請求ノ件

明治三十一年第四百十四號
明治三十二年二月二十三日第一民事部判決

○判決要旨

一 相續人カ前戸主ノ行爲ニ付キ責任ヲ負フヘキ場合ハ其相續以前ニ

係ルモノニ止リ其以後ニ於ケル行爲ニ付テハ責任ナシトス

一 先代カ隱居後ニ受ケタル裁判ノ效力ハ其相續人ニ及ハサルモノト

ス(以上判旨第二點)

第一審 仙臺地方裁判所石巻支部 第二審 宮城控訴院

上告人 佐藤榮治 訴訟代理人 宮古啓三郎

被上告人 生出柳治

右當事者間ノ無抵當貸金事件ニ付宮城控訴院カ明治三十一年十月五日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨ
 リ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告論旨第一點ハ原裁判ハ何等ノ理由ヲモ附セスシテ漫リニ緊要ノ事實ヲ判定シタル違法アルモノト
 ス抑本案甲第三號證ハ被上告人ノ先代生出松治郎ノ自筆ニシテ上告人ニ差入レタルコトハ被上告人ノ
 認ムル所ナリ而シテ該證ハ其自體ニ於テ日延證ト題スル而已ナラス明ニ明治二十六年舊六月中御借用
 仕候金年濟ミ定約仕候云々ト之レアル以上ハ他ニ同年同月ニ借受ケタルコトノ反對證明之レアル場合

相續人ノ責任 ○隱居後ニ受ケタル裁判ノ效力

ハ格別荷モ之レナキ限リハ甲第一號證ノ金員ニ對シ差入タル日延證ナリト判定セサルヘカラス何トナレハ甲第一號證ノ外ニ貸借ナケレハナリ然ニ被上告人ハ右甲第三號證ヲ差入レタルコトヲ認メナカラ別ニ本案請求金ノ外ニ尙本案金員ト同年全月ニ貸借アリタリシコトノ反對事實ノ申立並ニ立證モ之レナキニ原裁判所ハ何等ノ理由モナク漫然甲第三號證ハ甲第一號證ノ債務ニ差入レタルモノト認ムルニ足ラスト判定シ即チ原判文ニ「被控訴人ハ甲第三號證ニ依リ其主張ヲ證セントスルモ該證ハ果シテ甲第一號證債務ノ爲メ差入レタルモノト認ムルニ足ルモノナキヲ以テ採用セス」トノミアリテ何ノ爲メニ甲第三號證ニ明治二十六年舊六月中御借用仕候云々ト之レアルニモ拘ハラス甲第一號證ノ債務ニ差入レタルモノト認ムルコト能ハサルヤ必ス之レカ理由ヲ明示セサル可カラサルニ原裁判ハ事茲ニ出テス漫然前陳ノ如キ判定ヲ爲シタルハ違法ナリト云フニアリ

然レトモ原院ハ甲第一號證ニ記載アル明治二十六年舊六月ヨリノ文字ハ後日ノ挿入ニ係ルモノト認メ本件債務ノ明治二十七年舊六月ニ成立シタル事實ヲ確定シタルカ故ニ明治二十六年舊六月ノ金員貸借ノ日延證タル甲第三號證ハ甲第一號證債務延期ノ爲メ差入レタルモノト認ムルニ足ラスト説明セリ即チ明治二十六年舊六月ノ債務日延證書ハ明治二十七年舊六月ニ成立シタル債務ノ日延證書ニ適當セサルコトヲ説明セルモノナルカ故ニ特ニ上告論旨ノ如キ理由ヲ付スルノ要ナシ

同第二點ハ甲第一號證ハ明治二十六年舊六月中ノ貸金ナリトノ事實ニ於テ命令確定シタルモノナリ然

ルニ該證ノ已判力ハ何故ニ之レカ繼承人タル被上告人ニ對シ效力ヲ及サ、ルヤ必ス之レカ理由ヲ明示セサル可カラサル筋合ナルニ原判文中毫モ之レカ明示ナキハ是亦裁判ニ理由ヲ付セサル違法アルモノナリト云フニ在リ

判旨第二點

然レトモ相續人ノ承繼ニ因リ責任ヲ負フ可キ先代ノ行為ハ相續以前ニ係ルモノニ止マリ先代隱居後ニ於ケル行為ニ付テハ相續人ニ其責任アルコトナシ故ニ先代カ隱居後ニ於ケル訴訟手續ニ因リ受ケタル裁判ノ效力ハ相續人ニ對シ及ホスモノニ非ストス而シテ原判決ハ其理由冒頭ニ上告人カ明治二十七年一月十日ニ生出松次郎ノ跡相續ヲ爲シ爾後明治三十一年二月ニ隱居者生出松次郎ニ對シ發付シ且確定シタル甲第一號證執行命令ナルカ故ニ被上告人ニ對シ既判力ナキ旨ヲ説明スルモノナレハ論告ノ如キ裁判ニ理由ヲ付セサル違法ノ裁判ニ非ス

同第三點ハ本件ニ於テ被上告人ノ先代タル生出松次郎ニ對スル支拂命令ノ原本並ニ執行命令ノ原本ニハ明治二十六年舊六月成立ノ債權ナル旨記入シアリ甲第一號證ニモ亦其記入アリ而シテ甲第一號證ノ執行命令ヲ以テ生出松次郎ニ執行ヲ施シタレトモ又何等ノ異議ナカリシコトハ原院カ認ムル所ノ事實ナリサレハ被上告人ノ先代生出松次郎ニ對シテハ明治二十六年舊六月貸付ノ債權ト確定シタルモノナリ唯其訴訟手續ハ生出松次郎カ隱居ニ被上告人カ相續シタル後ニ係ルヲ以テ訴訟ノ手續ニ依ラスシテ直チニ被上告人ニ對シテ強制執行ヲ爲スコト能ハサルヲ以テ本訴ヲ起シタルモノナルモ生出松次郎ノ

相續人タル被告ノ反對ノ證據ナキ限りハ其債權カ其承繼スヘキ明治二十六年舊六月ノ生出松次郎ニ對スル債權ナルコトハ之ヲ認メサルヲ得ヘカラス故ニ若シ被告人カ此債權ヲ以テ明治二十六年舊六月ノ債權ニ非ラスト主張スルニハ之カ立證ヲ爲スノ責任ヲ有ス然ルニ原院ノ判決ヲ閱ミスルニ「控訴人カ明治二十七年一月十日生出松治郎ノ跡相續ヲ爲シタル事實ハ當事者ノ爭ハサル所ナレハ爾後明治三十年二月中ニ隱居者生出松次郎ニ對シ發付シ且確定シタル甲第一號證ノ執行命令ハ其既判力ヲ控訴人ニ及ホスヘキ理由ナキハ勿論ナレハ唯該證其他被控訴人(上告人)ノ提出シタル各證據ハ以テ控訴人(被告上告人)ニ對シ控訴人カ承繼スヘキ先代松次郎ノ債務ヲ證明スルニ足ルヤ否ヤヲ審究スルヲ要ス」云々「則チ甲第一號證等ハ未ダ以テ控訴人ニ對シ本件債務カ明治二十六年舊六月ノ成立ナルコトヲ證スルニ足ラス被控訴人ハ甲第三號證ニ依リ其主張ヲ證セントスルモ該證ハ果シテ甲第一號證債務ノ爲メ差入レタルモノト認ムルニ足ルヘキモノナキヲ以テ採用セス」云々トアリテ即チ前掲ノ被告上告人ノ先代生出松次郎ニ對シ明治二十六年舊六月ノ債權トシテ確定シタル事實アルニ拘ハラヌ猶此債權カ被告上告人ノ承繼スヘキ其先代生出松治郎ノ明治二十六年舊六月ノ債權ナルコトヲ上告人ニ於テ立證セサルヘカラサルモノトナシ其立證充分ナラサルヲ以テ明治二十六年舊六月ノ生出松次郎ニ對スル債權ト見ルコトヲ得サルモノト判決シタルハ全ク舉證ノ責任ヲ轉倒シタル違法ノ裁判ナリト云フコ在リ然レトモ前點ニ於テ說示スル如ク甲第一號證執行命令ハ被告上告人先代生出松次郎カ隱居後受ケタル裁

判ナルヲ以テ確定スルモ被告上告人ニ對シ既判力ナキモノナレハ被告上告人ハ該裁判ニ因ル先代ノ債務ヲ已ニ對シ認ムルノ義務ナシ然レハ被告上告人ニ於テ甲第一號證ニ因ル義務ヲ認メサル以上ハ起訴者タル上告人ニ於テ其主張ニ係ル本件債務ノ明治二十六年舊六月ニ成立シタリトノ事實ヲ證明スヘキ責任アルコトハ論ヲ俟タサル所ナリ故ニ原院カ上告人ニ舉證ノ責任ヲ負ハシメタルハ相當ニシテ毫モ舉證ノ責任轉倒セシメタル不法ノアルコトナシ

以上説明ノ如クナルヲ以テ本件上告ハ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ依リ之ヲ棄却スヘキモノトス

○約定金取戻請求ノ件

明治三十年第五百三十四號
明治三十二年二月二十八日第一民事部判決

○判決要旨

一出訴期限規則ヲ援用スル者ハ必スヤ辨濟ノ事實ヲ主張スルヲ要ス
而シテ其主張ノ事實ハ立證ヲ要セス(判旨第一、二點)(第三輯第三卷所載二
出訴期限規則ノ援用○手附施ノ契約

（裁判決
参看）

一手附流ノ契約ト雖モ履行時期ノ徒過ハ契約解除ノ原因タルニ止マ
リ之カ爲メニ其義務ハ當然消滅スルモノニアラス（判旨第六點）

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 水口兵次郎 訴訟代理人 城木昌支

被告上告人 中村衛平 訴訟代理人 岡崎正也

右當事者間ノ約定金取戻請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十年十一月十二日言渡シタル判決ニ對シ上
告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被告上告人ハ上告却棄ノ申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之レヲ負擔ス可シ

理 由

上告論旨ノ第一ハ原院カ出訴期限ハ辨濟ノ事實ト共ニ主張スルニ非サレハ採理ス可キ者ニ非スト判決
セリ按スルニ學理上ノ理由トシテ法律上辨濟ノ推測トカ若クハ債權ノ遺忘トカノコトハ未以テ本邦ニ
於テ採理スヘキ者ニ非サルノミナラス歴然トシテ債權債務ノ事實ヲ存シ辨濟スヘキノ事實ナリトスル

モ成法上定メタル期間ヲ經過シテ提起セシ時ニ於テ債務者ノ抗辯アルトキハ出訴期限規則ヲ直ニ適用
セサルヘカラサル所ノ者ナリ看ルヘシ明治六年第三百六十二號布告ニ曰ク右出訴期限ヲ過去リ出訴セ
サル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡ス
ヘキ義務ヲ免シ候事ト相定メ候云々トアリ故ニ本邦ノ出訴期限規則ハ條約ヲ自ラ抹殺セシ者ト看做シ
一面失權者ト定メ一面義務ノ免責者ト確定スル者ナルヤ成文上甚カ明確ナリ豈ニ辨濟ノ主張ヲ俟ツ者
ナランヤ按スルニ辨濟ノ主張ヲ俟ツ者トセハ同時ニ辨濟ノ舉證ノ責アリト云ハサルヘカラス既ニ舉證
ノ責アリトセハ時効ノ規定何ノ效用アランヤ故ニ原判決ハ出訴期限規則ニ違背セシ違法ノ判決ナリト
云ヒ其第二ハ原院判決ハ法則ヲ不當ニ適用セシ違法ノ判決ナリ判文ニ曰ク「被告上告人ハ一方ニ於テハ
手附金流トシテ之レヲ取得シタリト主張スルニ拘ハラス他方ニ於テハ出訴期限ヲ經過シタリト抗辯ス
ルハ之レヲ許ス可カラサル」トアリ蓋シ上告人ノ抗辯ハ被告上告人カ地所賣買取引約定期日ニ懈怠シテ
殘代金ヲ辨濟セサルニ手附流トシテ上告人ノ取得ニ歸シタリトノ抗辯ハ事實上ノ問題ナリ而シテ出訴
期限ヲ經過シタリトノ抗辯ハ手附流トシテ上告人カ取得スルヲ得可キ事實及權利之レ無シトスルモ取
引期日ヲ經過セシ以來甲第一號證ノ金員ハ手附トノ明文アリ甲第二三號證ノ貳千圓餘ハ手附トスルモ
内代金トスルモ取引期日ヨリ六ヶ月ノミナラス滿五年ヲ經過セシニ付既已ニ出訴期限ヲ經過シ被告上告
人ハ取戻ス可キ權利ヲ失ヒ上告人ハ引渡ス可キ義務ヲ免シタリトノ所爭ハ法律上ノ問題ニ屬ス夫レ此

ノ如ク炳焉トシテ二種ノ抗辯ニ主格アリ豈ニ之レヲ同時ニ主張スルヲ禁令ノ法則アラフヤ然ラハ即チ出訴期限ヲ經過シタリトノ抗辯ハ之レヲ許ス可カラサル者ナリト判決セシハ禁令ノ法則ヲ不當ニ適用セシト云ハサルヲ得サルモノト云フニ在リ

判旨第二

案スルニ明治六年第三百六十二號布告出訴期限規則ハ從來當院ノ判決例トナリタルカ如ク辨濟ノ推定ヲ基本トシタル規定ニ外ナラサルヲ以テ出訴期限ヲ援用スル者ハ必スヤ辨濟ノ事實ヲ主張スルヲ要ス而シテ辨濟ノ事實ハ唯主張スルノミニシテ立證セシテ可ナルコトハ即チ出訴期限ヲ援用スルノ利益ナリトス又原判決ニ「出訴期限經過ノ抗辯ハ返金ノ事實ト共ニ主張スルニ非サレハ云々之レヲ許ス可ラサルモノト」判示シカタルハ要スルニ出訴期限經過ノ抗辯ハ辨濟ノ事實ヲ主張スルニ非サレハ採用スルヲ得ストノ旨趣ニシテ手附流ノ抗辯ト出訴期限經過ノ抗辯トヲ同時ニ主張スルハ法令ノ禁止スル所ナリトノ文義ニ非サルコトハ前後ノ文詞ニ照シテ自カラ明瞭ナリ故ニ本論旨ハ共ニ上告ノ理由トスルニ足ラス

上告論旨ノ第三ハ原判決ハ理由ヲ付セス且證據採否ノ法則ヲ適用セサル違法ノ判決ナリ原判文ニ曰ク「控訴人ハ當事者間ノ地所賣買ノ約束ハ無期ニ延期セラレタリト主張スルニ拘ハラス被控訴人ニ於テハ其履行ノ期日ヲ確知ス可キ立證ヲ爲サ、ルヲ以テ出訴期限起算ノ時期ヲ定ムルヲ得ス從テ出訴期限經過シタルモノト認ムルニ由ナシ」ト判決セリ蓋シ上告人ハ出訴期限經過シタリトノ抗辯ヲ提出シ其

起算ノ時期ハ甲第一二號證ヲ引用シテ明確ニ之レヲ立證セリ裁セテ明治三十年六月十八日作成セシ原院ノ口頭辯論調査ニ在リ然ルニ賣買取引履行ノ期日ヲ確知ス可キ立證ヲ爲サ、ルヲ以テ起算ノ時期ヲ定ムルヲ得スト判決セシハ蓋シ立證ヲ看過シ其效力ノ採否ニ付判決ニ理由ヲ付セサル者ニシテ且證據採否ノ法則ヲ適用セサル違法ノ判決ナリ假リニ數歩ヲ遙リ甲第二三號證ハ印稅犯則ニ付立證ノ效力ナシト原判決理由第一點ニ於テ本案ノ起因タル地所ノ買得人ハ被上告人ニ非スシテ清水駒吉ナリト一面ノ立證ノ點ニ付「甲第二三號證ハ返濟期限ノ定メアル預リ金證書ナレハ證券印稅規則第二條ニヨリ金額相當印紙ヲ貼用ス可キ者ナルニ僅カニ壹錢ノ印紙ヲ貼用セシノミナレハ云々裁判上證據トナルヲ得サルモノナレハ之レヲ以テ清水駒吉買主ナリトノ證據トナスヲ得サル」ト買主ノ誰レ彼レニ付キテノ所爭ニ付甲第二三號證ヲ排斥セシ上ハ從テ出訴期限起算ノ立證ニ供セシ事項ニ對シテハ其立證ノ效力ノ採否ニ付判決ニ理由ヲ付セスト曰ハ「ンカ去レハ益以テ違法ノ判決ナリ何者甲二三號證ヲ上告人ノ援用セシ所内ハ出訴期限起算ノ時期ヲ立證ノ爲メナルコトハ調査ニ明載セシ筈ノ如クナルノミ果シテ然ラハ適切ナル援用ノ立證點ニ付證據力採否ノ判決理由ヲ付セサルヲ得サルナリ原判決茲ニ出テス加之凡甲第二三號證ノ金員ノ債權債務ヲ利用スルノ立證ニ供スルトキハ印稅規則ヲ適用スルハ固ヨリ其所ナル可シト雖モ單ニ其債權債務ノ金錢ノ如何ニ拘ハラス前途該證ノ記事申賣買取引期日ハ明治二十三年十二月十八日ナルコトヲ立證スルニ方リテハ印稅規則ノ適用ヲ必要トセス一片ノ手簡ヲ以テス

ルモ取引期日サへ見ルニ足ルヘキトキハ尙且其效力ヲ有スルニ非スヤ矧ノヤ甲第二三號證ニハ壹錢印紙ノ貼用アリシコトハ原院ノ認メタル所ナレハ單ニ地所賣買取引期日ヲ當事者間ニ於テ明治二十三年十二月十八日ト合意セシトノ約束ノ點ヲ證スルノ立證ニハ寔ニ效力ノ完備セシ者ナルオヤ故ニ原判決ハ孰レノ點ヨリ之レヲ觀ルモ法則ニ違背セシ者ナリト云フニ在リ

然レトモ原判決ニハ甲第二三號證ハ證券印稅規則ニ違背シタル證書ナリトシテ之レヲ排斥シタルコト明示シアルヲ以テ其立證趣旨ノ何如ヲ問ハス全然之レヲ採用セザリシコト自ラ明カナリ將證券印稅規則ニ違背シタル證書ハ其全部不適法ナルヲ以テ記載事項ノ一タル取引期日コ付テモ適法ノ證據方法トスルヲ得サルコト因ヨリ論ヲ待タス故ニ本論旨モ亦理由ナシ

上告論旨ノ第四ハ原判決ハ出訴期限ヲ適用セス且判決ニ理由ヲ付セサル違法ノ判決ナリ原判文ニハ上告人カ出訴期限起算ノ時期ヲ立證セストアリシモ上告人ハ唯甲第二三號證ノミナラス甲第一號證ヲ援用シテ出訴期限起算ノ時期ヲ立證ス明治三十年六月十八日ノ口頭辯論調書ニ徴シテ炳焉タリ果シテ然ラハ假リニ甲第二三號證ハ立證ノ效力ナシトシテ排斥セシ場合ト雖モ尙且甲第一號證ノ立證アル上ハ之レニ由ラサル可カラス蓋シ甲第二三號證ノ立證ハ其證據力無シトセシトキハ眼中甲第二三號證ナク從テ立證セサル時ト同一理ナリト云ハサルヲ得ス又被告上告人カ漠然タル口頭無證ノ陳述ヲ以テ取引期日ノコトニ合意アリト虚辯ヲ逞フスルモ何等ノ據ル可キ所ナシ果シテ然ルトキハ出訴期限起算ノ

時期ヲ立證ノ爲メ上告人カ援用セシ甲第一號證ナル者ハ當事者雙方ノ立證ノ具ニシテ且印紙貼用モ完備シアリ故ニ該證ニ定メアル取引期日ニ致反シ以テ出訴期限ヲ起算セサル可カラサル所ナリシニ該證ニ基キ出訴期限規則ヲ適用セス且甲第一號證ノ立證コ付採否ノ判決理由ヲ附セサル違法ノ判決ナリト云フニ在リ○然レトモ訴訟記録ニ依レハ甲第一號證ノ約定期限ヲ延期シタルコトハ上告人自ラ承認スル所ナリ故ニ之レヲ出訴期限ノ起算點ト爲ヌヲ得サルノミナラス原判決ハ上告人カ辨濟ノ事實ヲ主張セザリシ事實ニ據リ出訴期限經過ノ抗辯ヲ排斥シタルヲ以テ其起算ノ時期ニ關スル説明ノ如キハ附加ノ理由タルニ過キス然レハ則チ本論旨モ亦上告ノ理由トスルニ足ラサルヤ明ケシ

上告論旨ノ第五ハ原判決ハ民事訴訟法第三百十條ニ違背セシ違法ノ判決ナリ小原勝五郎ヲ證人トシテ宣誓セシメテ訊問シ其證言ヲ原院カ判決ノ資料ニ供セリ蓋シ小原勝五郎ハ被上告人ノ親族ナリ勝五郎ノ娘ヲ被上告人ニ配婚シスリ即チ勝五郎カ原院ニ陳白セシ所ニ依ルモ「當事者ト親族又ハ後見等ノ關係アリ中村衛平(被上告人ナ云フ)方ヘ私ノ女子ヲ遣シアリ」ト云々然レトモ勝五郎ハ證言ヲ拒絕ノ權利ヲ行ハサルニ付承審官ニ於テ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之レヲ訊問スルヲ得ルノミ宣誓ヲ爲サシメ證人トシテ訊問スルヲ得サル所ニ在リ然ルニ勝五郎ニ宣誓ヲ爲サシメ證人トシテ訊問シタル違法ノ證言ヲ判決ノ資料ニ供シタルハ抑モ不法ナリ案スルニ民事訴訟法第二百九十七條及ヒ第二百九十八條ハ證言ヲ拒絕スルノ權利ヲ與ヘタル者ニテ若シ其拒絕ノ權利ヲ行使セサル時ハ同法第三百十

條ニ依リ承審官ニ於テ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メニ訊問スルノ職權アルコトヲ規定セシ者ナルノミ蓋シ證言ヲ拒絕セサル時ト雖モ宣誓ヲ爲サシメ訊問スルノ職權アル者ニ非ス然リ然ルニ被上告人ノ配偶者ノ實父タル勝五郎ニ宣誓セシメ訊問シテ之レカ證言ヲ判決ノ資料ニ供シタルハ取モ直サス民事訴訟法第三百十條ノ規定ニ違背セシ判決ナリト云フニ在リ

然レトモ原審ニ於ケル證人小原勝五郎ノ訊問調書ヲ案スルニ「中村衛平ハ公務上東京ニハ居ラス其不在中家事向ハ私カ世話ヲナシ居リシ處東京ニ於ケル地所ヲ買受ケ度トノコトニ付私ハ雇人清水駒吉ヲ代人トシテ買受ケシメタリ」トアリ而シテ此小原勝五郎カ中村衛平即チ被上告人ヲ代理シタリトノ事實ニ關シテハ上告人カ争ヒタル形跡ノ徴スヘキモノナキヲ以テ假令原院ニ於テハ民事訴訟法第二百九十九條第四ニ所謂原告若クハ被告ノ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行為ニ付テ證言ヲ爲サシムル理由ヲ認メ勝五郎ヲシテ宣誓セシメタルニ非サルニセヨ其證言シタル事項ハ實ニ該規定ニ必適スルコトハ訴訟記録ニ徴スルヲ得ヘク歸スル所ノ被上告人ト姻族ノ關係アル小原勝五郎ヲシテ宣誓シテ證言ヲ爲サシメタル原院ノ處置ハ適法ニシテ本論旨ハ理由ナシ

上告論旨ノ第六ハ甲一號ノ成立及其記載ノ事實ニ付テハ當事者間毫モ争ヒナキ所ナリ故ニ第一甲一號證ニ手附流レ及ヒ手附陪返シノ制裁ヲ付シテ契約履行ノ期日ヲ確定シタルコト第二同一ノ制裁ヲ付シテ履行期限ヲ十二月八日迄ニ延期シタルコト第三前二項ノ合意ハ上告人ト被上告人ノ代理人トノ間ニ

成立シタルコトノ三點ニ於テハ當事者ノ異議ナキ處ナリ今此事實ニ基キ法理ノ存スル處ヲ研究スルニ苟モ手附金ヲ受授シ且明ニ違約者ニ於テ手附金ヲ損失スヘキコトヲ約束シテ其期間ヲ定メタル以上ハ期間ノ經過ハ當然契約ヲ消滅セシムルヲ以テ普通ノ原則ナリトス然ラハ即チ二十三年十二月八日ノ終了ト共ニ甲一號ノ契約ハ全ク效力ヲ失ヒタルモノナリ此期日ノ徒過ハ其責當事者ノ何レナルヤハ唯手附金損失者ノ誰タルヤヲ定ムルニノミ必要ニシテ甲一號ノ契約ノ將來ニ於ケル效力如何ニハ毫モ關スル所ナシ然ラハ則チ同日以後上告人ニ於テ此甲一號ノ契約ト反對シタル行為ヲ爲シタリトスルモ被上告人ハ已ニ契約ノ主旨ニ從ヒテ效力ヲ失ヒタル此甲一號ノ約束ヲ理由トシテ云々スルノ權利アラサルナリ然ルニ原院カ此手附流レノ制裁ヲ付シタル契約ノ效力ニ關スル法則ヲ無視シ何ケ年ヲ經過スルモ尙被上告人カ此契約ノ履行ヲ上告人ニ責メ得ヘキモノ、如ク判定シタルハ不法ナリ更ラニ進ンテ之レヲ論スルニ甲一號證ニシテ十二月八日以後尙ホ當事者間ニ契約履行ヲ請求スル效力アルモノトスルニハ必ラス十二月八日滿了セサル以前ニ於テ當事者カ新タニ延期ノ合意ヲ爲シタルコトヲ必要トス此故ニ被上告人ニシテ永遠ニ甲第一號ノ效力アルコトヲ主張セハ此新タナル延期ヲ主張スルヲ要シ且此主張ニ付テハ被上告人自ラ舉證ノ責ヲ有スルコト證據法ノ原則ニ依テ明ナリ然ルニ被上告人ハ此舉證人ノ責任ヲ盡ササルノミナラス右ノ如キ事實ノ主張スル原院ニ於テ之レヲ爲サス唯チ十二月九日及ヒ十日ニ貳千圓ヲ入レテ取引ハ他日ノ事ニ約束シタリト明言シ即チ十二月八日ノ終了スル迄何等ノ合意

ヲモ爲サ、リシコトヲ認メ居レリ然ラハ即チ前段述フル如ク甲一號證ハ契約ノ效力ニ關スル法則ニ從ヒ十二月八日ヲ過キタル以上ハ全ク當事者ヲシテ履行ノ義務ヲ免レシメタルモノニシテ從テ不履行ノ問題ヲ生セシメ得ヘキニ非ス然ルニ原院判決全ク之ニ反スルハ明カニ法則ニ違背シタル不法ノモノナリト云フニ在リ

然レトモ手附流ノ契約ト雖モ履行時期ノ徒過ハ契約解除ノ原由タルニ止マリ之カ爲メニ當事者ノ義務當然消滅スヘキモノニ非ス故ニ其契約ノ未ダ解除セラレサル間ハ義務履行ノ責ナシト云フヲ得ス然レハ則チ本論旨モ亦上告ノ理由ナシ

上告論旨ノ第七ハ原判文理由ノ第一ニ於テ甲一二三號證ヲ印稅規則違犯トシテ排斥シタルハ不法ニ法則ヲ適用シタルモノナリ蓋シ預金證書ニシテ金額相當ノ印紙ヲ貼用スルハ其返還ノ期限ヲ定メタル預金證書ニ限ルモノナリ甲二三號證ノ如キ預金ノ名稱アルモ決シテ返還スヘキ性質ノモノニ非スシテ他ノ名稱ニ變更セシムヘキ期限ナルコトハ甲二三號證自體ニ於テ明ナリ故ニ印稅規則ニ所謂ル期限ノ定メアル預金證書ニ非ス然ラハ則チ金額ノ多少ニ應ジテ印紙ヲ貼用スヘキモノニ非ス即チ印稅規則第二條ヲ適用スヘキニ非ス然ルニ原院カ此法文ヲ適用シテ之レヲ排斥シタルハ不法ナリト云ヒ其第八ハ原判文理由第一ノ末段ニ於テ甲第二三號ノ證書ヲ有效ノ證據ト假定シ尙ホ之レヲ排斥スルニ當リ「金錢ノ受取證ニハ現ニ之レヲ引渡シタルモノ、氏名ノミヲ記載スル場合アルヲ以テ甲第二三號證ニ控訴

人(被上告人ノ)代理タルコトノ記載ナク單ニ清水駒吉トノミ在ルノ事實ヲ以テ地所ノ買主ハ同人ナリト推定スルヲ得ト判示シタルハ舉證ノ責任ヲ顛倒シタル不法ノ裁判タルヲ免カレス甲二三號證(預證ト題スルモノ)ニ清水駒吉殿ト記シタル以上ハ此證書ノ名宛人即チ合意ノ當事者ハ清水駒吉ナルコト是レ普通ノ事態ナリト云ハサルヲ得ス故ニ反證ノ存セサル限りハ當然斯ノ如ク判定セル可カラズ證書面ノ名前入ト真正ノ當事者ト異ナル如キハ實際或ハ之レアルモ是レ例外トシテ普通ノ狀態ニ非ラス故ニ甲二三號ニ清水ト記スルモ是レ清水ノ自己ニ非ラスシテ中村衛平ノ代理タル清水ナリトノ事ハ之レヲ主張シテ自家ノ利益ヲ得ントスル被上告人ニ於テ立證ノ責ヲ盡ス可キモノ、如ク判示シタルハ此原則ニ違背シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

然レトモ證書ニ記載シタル年月日ノ果シテ返濟期限ナルヤ否ノ如キハ事實裁判所ノ裁判權ニ屬シ上告裁判所ノ判斷スヘキ限リニ在ラス又甲第二三號證清水駒吉ノ肩書ニ被上告人ノ代理ト記載ナキニ之レヲ其代理トシテ授受シタルモノト原院カ認定シタルハ畢竟本訴ノ賣買ヲ以テ上告人ト被上告人ノ代理タリシ清水駒吉トノ間ニ締約シタルモノト事實ヲ判斷シ因テ以テ甲第二三號證モ亦被上告人ノ代理タリシ清水駒吉カ上告人ト授受シタルモノト推定シタルニ外ナラス要スルニ亦事實裁判所ノ職權ニ屬スルモノナルヲ以テ本論旨ハ共ニ上告ノ理由トナラス

上告論旨ノ第九ハ原判文理由第一ノ末尾ニ於テ清水駒吉ハ其權利上ニ利害ヲ及ホスコト大ナルヲ以テ

證人トシテ供述スル所信スルコ足ラスト判定シタルハ條理ニ背キタル不法ノ裁判ナリ凡ソ直接ニ利害ノ關係ヲ有スル者ノ證言ヲ信シ難シト爲ス所以ノ者ハ必竟スルコ自家ノ利益トナルヘキ供述ヲ爲シテ眞正ノ事實ヲ言ハサルノ恐アルノ爲メノミ本件ノ如キ場合ニ於テ當事者雙方ノ争フ所地所ノ賣買ハ中村衛平カ當事者タルヤ將タ清水カ當事者タルヤニ在リ若シ中村ニシテ當事者タラハ清水ハ賣買コ何等ノ關係ヲ有セス又清水當事者ナリトスルモ乙一號ノ爲メ清水ハ賣買ニ付何等ノ利害關係ヲ有セス然ラハ則チ清水ハ此點ニ付キ何等ノ利害關係ヲ有セサルモノナリ然リト雖モ前後數回ニ清水カ上告人ニ交附シタル金圓ハ小原勝五郎ノ貸出シタルモノナルコトハ證人清水自ラ認ムル所ハルカ故ニ清水ニシテ若シ賣買當事者ナリトセハ賣買ハ消滅スルモ此金員ハ清水コ於テ尙ホ小原ニ返濟セサルヘカラス之ニ反シテ清水ハ單ニ中村ノ代人トシテ取次ヲ爲シタルモノトセハ此金員返濟ノ義務ハ決シテ清水ノ關與スヘキモノニ非ス然ラハ則チ本件ニ於テ清水若シ自家ノ利益ヲ計ラハ則チ賣買ハ中村ト上告人ノ間ノ事ニシテ自分ハ單ニ取次ナリ代人ナリト言フヘキハ當然ナリ此ノ如キ筋合ナルニ清水ノ證言ハ全ク之ト相反シ自家ニ返金ノ義務ヲ殘存スルコトヲ認メテ自己ニ不利益ノ陳述ヲ爲セリ故ニ決シテ證人ニ利害ノ關係アルヲ以テ信シ難シト論スヘキ場合ニ非ス而シテ原判決カ此條理ニ正反對ノ判定ヲ以テ此證言ヲ排斥シタルハ不法ナリト云フニ在リ

案スルニ訴訟當事者ト證人トノ間ニ於ケル利害關係ノ有無ノ如キハ事實ノ判斷ニ外ナラサルヲ以テ本

論旨ハ原院ノ爲シタル事實ノ判斷ヲ批難スルニ歸シ到底上告ノ理由トスルニ足ラス

上告論旨ノ第十ハ判決理由第二ノ末段ニ至テ「甲第一號證ノ期日ヲ合意上延期シタルコトハ當事者争ヘナキ所」ト掲ケ之ヲ根據トシテ上告人敗訴ノ判決ヲ與ヘタルハ争アル事實ヲ以テ争ナキモノト看做シタル判決ニシテ則チ必要ノ事實争點ヲ遺脱シタル不法ノ裁判ナリ本件賣買ハ廿三年十月二日ニ約定ヲ爲シ其期限チ同月廿九日ニ定メタル後右期日ニ至リ十二月八日迄第一回ノ延期チ本件當事者間ニ爲シタルコトハ甲一號證ノ通りニシテ當事者間ニ争ナキ所ナリ然レトモ此新期日即チ十二月八日迄ニ更ニ第二ノ延期チ當事者カ爲シタルヤ否ヤハ争アル點ナリトス今原院ノ辯論調書ヲ按スルニ控訴代理人(被上告人)事實關係陳述ノ部末段ニ曰ク(上略)十二月八日ニ延期シ控訴人ハ手附金トシテ五百圓ヲ入レアリシモ尙期日ニ差支アリテ同月九日及ヒ十日ノ兩度ニ内金貳千圓入レアリ而シテ取引ハ他日ノコトニ約定シタリト是レ即チ被上告人ト上告人トノ間ニ第二ノ延期チ約束シタリト主張スルモノナリ然ルニ同調書中被告(上告人)事實關係陳述ノ部ヲ閱スルニ當初被告(上告人)ト約束ヲ爲シ手附金ヲ受取リテ第一回ノ延期チ爲シタル事ハ申立アルモ第二回ノ延期ノ事ハ實ノ買主駒吉ト約定ヲ爲シ二十四年四月二十日ニ定メタル旨申立アリ則チ被上告人トノ賣買契約チ延期シタルニ非ラスシテ訴外人清水駒吉トノ間ノ契約履行チ延期シタルノミ當事者ノ申立斯クノ如ク相反シ全ク相争フタルニモ拘ハラス原院カ當事者間全ク争ナキ所ナリトシテ判決ノ基礎トシタルハ不法ナリト云フニ在リ

然レトモ甲第一號證ノ約定期限ニ付キ一旦延期ノ合意ヲ爲シタル事實ハ實ニ訴訟記録ニ徴シ明白ニシテ原判決ニハ本論旨ノ如キ爭フタル事實ヲ爭ナキモノト看做シタル事跡ナク而シテ「被控訴人(上告人)ハ控訴人(被上告人)カ契約ヲ履行セサルトノ事實ニ付テハ毫モ立證ヲ爲サ、ルヲ以テ此點ニ關スル被控訴人ノ抗辯ハ其理由ナキモノトス」ト判示シタルヲ以テ本論旨モ亦理由ナシ
上告論旨ノ第十一ハ十二月九日及十日ノ再度ニ上告人カ受取タル貳千圓ニ付被上告人ヨリ内金トシテ上告人ニ差入タルモノト主張シ(原院調書控訴人事實關係陳述ノ部)上告人ハ後日之ヲ内金トスルノ意ニテ訴外人清水駒吉ヨリ受取タルモノナリト申立アリ(同上被控訴人事實關係陳述ノ部第三項及ヒ第一項參照)然ルニ原院カ此貳千圓ノ返還ヲ命スルニ當リ單ニ「其後亦金壹千圓宛二回ニ被控訴人請取リタル事」ノミヲ説明シ被上告人ノ差入レタルモノナルヤ將テ訴外人清水駒吉ノ差入レタルモノナルヤニ付テハ何等ノ判定ヲ與ヘス是レ必要ノ爭點ニ判決ヲ與ヘサルノ不法ヲ免レヌ」且從テ上告人カ受取リタル貳千圓ハ之レヲ清水駒吉ヨリ受取タルニ拘ハラズ尙ホ被上告人ニ返還スヘキハ如何ナル理由ニ基クモノナルヤ原院カ於テ毫モ之レヲ説明セサルハ判決ニ理由ヲ付セサル不法アルモノナリト云ヒ其第十二ハ原院カ於テ提出シタル緊要ノ抗辯ヲ遺脱シ之ニ對スル判決ヲ與ヘサル不法アリ原院カ於テ事實ノ部ニ於テ爭點ヲ定メ第一被上告人カ買主ナリヤ否ヤ第二本件金員ハ手付流レナリヤ否ヤ第三出訴期限經過シタリヤ否ヤノ三箇ナリト明記シ理由ノ部ニ於テハ此三點ニ對シテ判決ヲ與ヘタルノミ

然ルニ原院辯論調書ニ付テ之レヲ按スルモ上告人ハ此三箇以外ニ於テ一ノ抗辯ヲ提出シタルヲ明ナリ即チ「壹千圓ツ、二回ノ貳千圓ハ未ダ手附金トモナク内金トモナク唯タ後ニ内金トスルトノ意ニテ入レタルモノナレハ此金ハ清水駒吉ナラサレハ權利ナシ」トアリ蓋シ此貳千圓ノ金ハ訴外人駒吉ヨリ受取リタルモノコシテ其以外ノ人ハ何等ノ關係アルモノニ非ストノ事ヲ主張シタルハ一見知り得ヘキ所ナリ然ルニ原判決ニ於テ此抗辯ヲ遺脱シタルハ不法ノ大ナルモノト謂ハサルヲ得スト云フニ在リ然レトモ訴訟記録ニ依リテ之レヲ案スルニ當事者間主要ノ爭點ハ實ニ本訴ノ賣買契約ハ清水駒吉カ自己ノ爲メニ上告人ト締結シタルモノナルヤ將被上告人ノ代理資格ヲ以テ之ヲ締結シタルモノナルヤト云フニ在リシヲ以テ原院カ既ニ駒吉ハ被上告人ノ代理資格ヲ以テ賣買契約ノ行爲ヲ爲シタルモノト判斷シタル以上ハ凡ソ駒吉カ之ニ關シテ上告人ニ交付シタル金額ハ即チ被上告人カ交付シタルニ外ナラサルモノト看做シタルコトハ原判決ノ全旨趣ニ徴シテ之ヲ知得スルヲ得故ニ本論旨モ亦上告ノ理由トスルコト足ラヌ
以上ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條及ヒ同法第七十二條初項ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

○不當利得金取戻ノ件

明治三十一年第九十八號
明治三十二年二月二十八日第一民事部判決

○判決要旨

- 一 契約ノ解除權チ有スル者カ自己ノ行爲又ハ過失ニ因テ契約ノ目的物ヲ滅失セシメ爲メニ相手方チ原狀ニ回復セシムルコトヲ得サルニ至ラシメタルトキハ其解除權チ行使スルコトヲ得サルモノトス
- 一 會社登記前ノ株式ノ讓渡ハ商法第百八十條ニ依リ無効ナリトス(以上判旨第二點)

(參照) 株金額少ナクトモ四分一ノ拂込前ニ爲シタル株式ノ讓渡ハ無効タリ(商法第百八十條)

一 商法第百八十條ノ規定ハ豫約株ト稱スルモノ、賣買ニモ亦適用スヘキモノトス(判旨第三點)

(參照) 同上

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 木村權右衛門 訴訟代理人 岸本辰雄
矢坂忍太郎

被上告人 竹原友三郎 訴訟代理人 宮本修次郎
外一名

右當事者間ノ不當利得金取戻事件ニ付大阪控訴院カ明治三十年十二月二十四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決中上告人ヨリ被上告人竹原友三郎ニ係ル勢和鐵道株式會社株式拂込金取戻請求ニ關スル部分ニ對スル上告ハ之レヲ棄却シ同會社株式賣買代金取戻請求ニ關スル部分及ヒ被上告人高木又次郎ニ係ル不當利得取戻事件ニ關スル部分ヲ破毀シ更ニ辯論及裁判ヲ爲サシムル爲メ本件チ大阪控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨第一點ハ原院ハ上告人カ勢和鐵道株式會社へ拂込ミタル金八百圓ハ直ニ被控訴人ノ利益トナリタルモノトハ云ヒ難シト理由チ付シ上告人ノ請求ヲ排斥セラレタレトモ假令該金額ハ最初ノ名義主ノ利益ニ歸スルトスルモ被上告人ハ上告人ヨリ甲第一號證チ受取り最初ノ名義主ニ對シ該金額ヲ請求シ得レハ被上告人ノ利益トナルハ明カナリ又假リニ該金額ハ被上告人ノ利益ニ歸セサルトスルモ該金額ハ無効ノ賣買ニ基因シ拂込ミタルモノナレハ賣主タル被上告人ニ於テ之レヲ辨濟スヘキハ當然ナリ然ルニ原院カ(第一回拂込金八百圓ノ如キハ最初ノ株式申込人タル天野熊次郎名義チ以テ「云々」終

契約解除權喪失○會社ノ登記前○豫約株ノ賣買

○最初ノ名義主ノ利益ニ歸スルヤモ知ルヘカラサレトモ直ニ控訴人ニ賣渡シタル被控訴人ノ利益トナレルモノトハ云ヒ難クト説明シ上告人ノ請求ヲ排斥セラレシハ違法ノ判決ナリト云フニ在リ

依テ案スルニ本件ニ於テ上告人カ被上告人竹原友三郎ニ對シ請求スル金八百圓ハ上告人カ自己ノ利益ノ爲メニ最初ノ株式申込人タル天野熊一郎ノ名義ヲ以テ勢和鐵道株式會社ニ拂込ミタル金員ナルコトハ原判決ニ於テ確定セシ事實ナリトス然ル則該八百圓ノ金員ハ原判決説明ノ如ク或ハ最初ノ株式申込人タル天野熊一郎ノ利益ニ屬スルヤモ知ル可カラサルモ之レヲ以テ被上告人竹原友三郎ノ利益ニ歸スルモノト爲スコトヲ得サルヤ明カナリ而シテ自ラ給付ヲ受ケス且自ラ利益セサル金額ヲ故ナク他人ニ辨償スヘキ責任アルニ非サレハ假令上告人カ該八百圓ノ金額ヲ勢和鐵道株式會社ニ至リタルハ上告人ト被上告人竹原友三郎トノ間ノ賣買ニ基因スルニモセヨ其賣買カ絶對ニ無効ナル以上ハ被上告人竹原友三郎ハ上告人ニ對シ之レヲ辨償スルノ責任アルモノニアラス依テ本點ノ上告論旨ハ毫モ其理由ナキヲ以テ原判決中該金員取戻請求ニ關スル部分ハ固ヨリ破毀スヘキ限リニアラストス

上告論旨第二點ハ原院ハ(最初賣買ノ際受取りタル各株ニ對スル證據金壹圓ノ領收證ノ如キハ已ニ會社ニ返還シ其證據金ノ如キハ甲第二號證ノ如ク第一回拂込金一株ニ付五圓ノ内受取ト爲リ「云々」證據金領收證ハ復タ會社ヨリ取戻スコト能ハサレハナリ要スルニ控訴人ハ元來賣買ノ無効ヲ唱ヘ取戻スコトヲ得ヘキモノヲ其所爲ニ依リ原狀ニ復スルコトヲ得サルニ至ラシメタルコト付キ本件ノ請求ハ不當ナリト判決セラレタレトモ本件ハ株式豫約ノ權利ノ賣買ナレハ賣買ノ目的物ハ株式豫約ノ權利ニシテ證據金請取ノ證ハ其權利ノ證明ノ具ニ過キス故ニ該受取證ヲ原狀ニ復スル能ハサルトテ賣買代價金ヲ取戻ス能ハサル道理ナシ況ンカ證據金受取證ハ被上告人ノ手ニアリテモ猶ホ第一回拂込ノ時ニ至レハ會社ニ返還シ其證據金ハ株金ノ一部トナルモノナルニ於テオヤ然ルニ原院カ原狀ニ復スル能ハストノ理由ヲ以テ上告人ノ請求ヲ排斥セラレタルハ違法ノ判決ナリ假リニ證據金請取證カ賣買ノ目的物ナリトスルモ本訴ハ賣買ノ無効ニ依リ代金取戻ヲ請求スルモノニシテ賣買解除ニアラス賣買解除ニハ目的物ヲ原狀ニ回復スル必要アルモ賣買ノ無効ナル場合ニハ目的物ヲ原狀ニ回復スル必要ナシ然ルニ原院カ賣買ヲ無効ト認定シナカラ原狀ニ回復スルヲ得サルニ至ラシメタルニ付本件ノ請求ハ不當ナリト判決セラレシハ賣買解除ニ適用スヘキ法則ヲ賣買無効ニ適用シタル違法ノ判決ナリ又當事者一方ノ行爲ニ依リ目的物ヲ滅失セシメタル場合ニ於テハ其行爲ハ損害ノ責メニ任スヘキモ之レカ爲メ無効賣買ノ代金ヲ取戻スコト能ハサル道理ナケレハ旁以テ原判決ハ違法ナリト云フニ在リ

案スルニ契約ノ解除權ヲ有スル者カ自己ノ行爲又ハ過失ニ因リテ契約ノ目的物ヲ滅失セシメ爲メニ相手方ヲ原狀ニ回復セシムルコト能ハサルニ至リタルトキハ其解除權ヲ行使スルコトヲ得サルヤ論ヲ俟タス然レトモ本件ニ關シテ原判文上明カナル事實ニ依レハ上告人ハ被上告人ト爲シタル契約カ法律上無効ニシテ而シテ其無効ナル契約ニ因リテ辨濟シタル金額タルヤ被上告人ニ於テ不當ニ利得シタルモ

ノナルヲ以テ其返還ヲ請求スルモノナルカ故ニ契約ノ解除ヲ原因トシテ金額ノ返還ヲ請求スルモノ
 アラスシテ不當利得ヲ原因トシテ金額ノ返還ヲ請求スルモノナリ然レハ假令上告人カ株金拂込ヲ爲ス
 カ爲メ株式申込ノ證據金領收證ヲ會社ニ返付シテ之レヲ被上告人ニ還付スルコト能ハサル事實アルモ
 上告人ト被上告人間ニ於ケル登記前ニ係ル株式ノ讓渡カ爲メニ有效トナルヘキ場合ナリ隨テ被上告人
 カ不當ニ利得シタル讓渡代金額ノ返還ヲ請求スルコトヲ妨グス然ルニ原院カ被上告人ヲ原狀ニ回復セ
 シムルコト能ハサル云々ノ理由ニ因リテ上告人ノ請求ヲ排斥シタルハ要スルニ契約解除ニ關スル法則
 ナ不當ニ適用シタルモノトス又被上告代理人ハ本上告論旨ニ對シテ本件勢和鐵道株式會社ノ株式ノ讓
 渡タルヤ登記前ニ係ル株式ヲ目的ト爲シタルモノナレハ商法第百八十條ニ從ヒ無効ナリ即チ上告人ノ
 請求ハ不法ナル原因ノ爲メニ給付シタル金額ヲ取戻サントスルニ在レハ到底法律ノ保護スヘキ限コ
 ラスト答論セリ案スルニ公ノ秩序又ハ善良ナル風俗ニ反スル行爲ハ不法ナリ又法律ノ禁制ニ違反スル
 行爲ハ概シテ公ノ秩序ニ反スル行爲ナルヘケレハ亦不法ナリト謂フヲ得ヘシ而シテ不法ナル行爲ハ概
 シテ無効ナリト雖モ又取消シ得ヘキモノナキニ非ス重婚ノ如キハ即チ其一例ナルヘシ而シテ不法ナル
 行爲カ無効ナル場合ト雖モ其行爲ニ因リテ爲シタル給付ハ必シモ取戻シ得ヘカラサルモノニ非ス不法
 ナル行爲ニ因リテ爲シタル給付ヲ取戻シ得サルカ爲メニハ其行爲ノ性質カ給付ヲ爲シタル者又ハ當事
 者雙方ニ關シテ醜汚ナルコト例ヘハ賭博ノ如キ又ハ金錢ヲ授受シテ他人ノ致死ヲ約スルカ如キモノナ

ラナルヘカラス登記前ニ係ル株式ノ讓渡ハ最初ノ讓渡人ニ關シテハ概シテ醜汚ノ行爲ナルヘシト雖モ
 讓受人ニ關シテ此事實ヲ推定スルノ失當ナルヤ論ナシ蓋シ登記前ノ株式ノ讓渡ハ其性質トシテ當然醜
 汚ナルモノニ非スシテ商法第百八十條ノ規定ニ依リ無効タルニ過キサルヲ以テナリ然レハ前掲答辯ノ
 趣旨ハ之レヲ採用セス夫レ然リ然ラハ原判決中勢和鐵道株式會社ノ株式賣買代金取戻請求ニ關スル部
 分ハ違法ニシテ破毀ヲ免カル、コトヲ得サルモノトス

上告論旨第三點ハ原院ハ(本件ノ賣買)目的物ノ京北鐵道株式會社ニ關スルモノハ甲第二號甲第六號證
 ノ如ク近畿鐵道株式會社ニ關スルモノハ甲第四號甲第八號證ノ如ク孰レモ發起認可前ニ在テ後日會社
 ノ設立センコトヲ豫期シタル一種ノ權利ノ賣買ニシテ「云云」之レニ商法第百八十條ノ規定ヲ適用スル
 コトヲ得ヘカラス隨テ其ノ賣買ハ法律上禁止セラレタルモノニアラス)ト説明セラレタレトモ商法第
 百八十條ハ發起ノ事業株式ノ申込ヲ射利ノ目的ニ歸セサラシメン爲メニ規定セラレタルモノニシ
 テ詐欺ヲ妨グ公益ニ關スル規定ナレハ該條規定ノ如ク會社設立後ニ於テモ登記前ニハ株式ノ賣買無効
 ナレハ未ダ發起認可ヲ得サル株式豫約ノ權利ノ賣買ノ無効ナルコト明カナリ然ルニ原院カ後日會社ノ
 設立センコトヲ豫期シタル一種ノ權利ノ賣買ナレハ有效ナリト判決セラレシハ不法ナリト云フニ在

依テ案スルニ凡株式ハ株式會社ノ設立アリテ初メテ存立スヘキモノナレハ其發起認可以前ニ於テハ決

シテ株式ナルモノハ存在スヘキ理由ナシ隨テ所謂豫約株ノ如キハ商法ノ所謂株式ニテラサルコトハ原
 判決ノ説明スルカ如シ然レトモ商法第百八十條ノ規定ハ前段ニ於テ説明スルカ如キ理由ニ基クモノニ
 シテ此理由タルヤ均シク所謂豫約株ノ讓渡ノ場合ニモ適用シ得ヘキノミナラス是ト彼トノ間ニ毫モ區
 別ヲ爲スノ理由アルヲ視サレハ同條ノ規定ハ所謂豫約株ノ賣買ニモ適用シ之ヲ無効ナリト論定セサル
 可カラス 依テ原判決中被上告人高木又次郎ニ係ル不當利得金取戻事件ニ關スル部分ハ不法ナルヲ以テ
 破毀ヲ免カレサルモノトス

以上説明スル理由ニ依リ本院ハ民事訴訟法第百四十七條第一項同第四百四十八條第一項及ヒ第四百
 五十二條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

○大審院民事部裁判長及部員氏名表

第一民事部

裁判長

院長 判事男爵南部 嬰 男

部員

- 判事 井上 正一
- 判事 岡村 爲藏
- 判事 本多 康直
- 判事 和田 收藏
- 判事 馬場 愿治
- 判事 志方 鍛

本部ノ所管

人事、米穀、物品、證券、金錢、損害要償

本部ノ開廷

火曜 日

民事判事氏名表

木曜 日
土曜 日

第二民事部

裁判長

部長 判事 寺島 直

部員

- 判事 西川 鐵次郎
- 判事 今村 信行
- 判事 芹澤 政温
- 判事 中尾 眞晃
- 判事 清水 一郎
- 判事 掛下 重次郎

本部ノ所管

地所附水利、建物附家賃、雜事

本部ノ開廷

民亦判事氏名表

月 曜 日

水 曜 日

金 曜 日

大審院刑事判決錄

總目録
刑法

商業帳簿ノ性質ノ事……………一
自己ノ所有名義ナル他人ノ不動産ヲ冒認販賣シタル所爲ノ事……………六
親ノ所有物ヲ冒認販賣シタル所爲ノ事……………六
刑法第三百七十七條ニ所謂兄弟ノ範圍ノ事……………七
偽造文書ナルコトヲ明言シテ行使シタル所爲ノ事……………六
毆打創傷シタル上強姦シタル所爲ノ事……………三
多額ノ證書ヲ作成シテ之ヲ少額ノ證書ナリト欺キ記名調印セシメタル所爲ノ事……………五
第三者ニ對シテ恐喝スルノ言ヲ發シタル者ノ責任ノ事……………六
新舊法ノ比照ニ關シ輕罪刑ノ輕重ノ標準ノ事……………四〇
公證文書偽造行使罪ト公印偽造罪ト併發シタル場合ニ於テ刑法第二百六條ヲ適用セサル裁判ノ事……………四〇

委託ノ意義ノ事

甲者ヨリ騙取シタル證書ニ基テ乙者ニ對シテ金圓ヲ騙取セントシタル所爲ノ事

懲治處分ノ性質ノ事

自己ノ家ニ落シ置キタル他人ノ金錢ヲ隱匿シタル所爲ノ事

強姦負傷罪ノ性質ノ事

教唆罪成立ノ場所ノ事

賣主カ未拂代金、爲メ留置スル物ヲ買主ニ於テ騙取シタル所爲ノ事

人ノ住居シタル家屋ト人ノ住居セサル家屋トヲ燒燬スルノ目的ヲ以テ火ヲ放

テ共ニ之ヲ燒燬シタル所爲ノ事

他人ノ盜捺シタル印影ヲ盜捺者ト謀リテ使用シタル所爲ノ事

子孫ニハ其配偶者ヲ包含セストノ事

父母ニハ配偶者ノ父母ヲ包含セストノ事

舊藩ノ家老職ノ違書ヲ偽造シタル所爲ノ事

委託販賣品ヲ指定價額以下ニ賣却シタル所爲ノ事

盜傷人罪ノ構成ノ事

商 法

業帳簿ノ性質ノ事

刑事訴訟法

告ノ控訴並ニ檢事ノ附帶控訴共ニ理由アル場合ノ裁判ノ事

事ノ立會ナシシテ言渡シタル判決ノ效力ノ事

科ヲ受ケタル裁判所ニ相違アルナ理由トスル再審ノ事

事ノ附帶控訴ニ反スル判決ヲナス場合ニ於ケル控訴ノ及フ範圍ノ事

事件ヲ併合審理スル場合ニ於テ數罪俱發例ヲ適用セル判決ノ事

田アル控訴ヲ棄却シタル判決ノ事

一審カ重シト認メタル所爲ヲ無罪トシナカラ同一ノ刑ヲ餘罪ニ科シタル裁

ノ事

トシテ論スヘキ所爲ニ關シ第一審ト認定ヲ異ニシタル裁判ノ事

公證文書偽造行使罪ト公印偽造罪ト併發シタル場合ニ於テ刑法第二百六條ヲ適用セサル判決ノ事…………… 壹

公訴不受理ノ判決確定前ニ於ケル起訴ノ事…………… 壹

抗告スルヲ得ヘキコト及ヒ其期間ノ記載ナキ豫審終結決定書ノ確定ノ事…………… 七

第一審ニ於テ被告人ノ主張以外ニ係ル理由ニ基キ第一審判決ヲ取消タル裁判ノ事…………… 六

豫審ニ於テ免訴シタル所爲ヲ審理シタル判決ノ事…………… 六

懲治處分ニ對スル上訴ノ事…………… 七

法律上代理人ノ爲シタル再審ノ事…………… 七

告訴狀ト題シテ告發シタル文書ノ效力ノ事…………… 七

告知ナキ反證ヲ提出シテ辯護シタル事…………… 六

公訴私訴ノ判決書ハ各別ニ作成スルヲ必要トセサル事…………… 六

共犯人中ノ一名ト身分上ノ關係ヲ訊問セスシテ作成シタル證人調書ノ效力ノ事…………… 六

大審院ニ提出シタル上告趣意書ノ效力ノ事…………… 六

審理ノ始メニ於テ立會檢事ヲシテ被告事件ヲ陳述セシメサル判決ノ事……………

第一審判決ノ認メサル前科ヲ認定シタル判決ノ事……………

事件目錄

事 件	關 係 事 項	判 決 日 月	番 號	訴 訟 關 係 人	丁 數
詐欺取財私書偽造行使ノ件	商業帳簿ノ性質、控訴ノ理由	六二	六五八號	被告 小林政雄	一
冒認ノ件	冒認販賣罪ノ構成、親ノ所有物	六二	八〇三號	被告 秦泉寺辰次 今本	六
毆打致死ノ件	檢事ノ立合ナキ判決言渡	六二	一一八八號	被告 丸山八十八	九
詐欺取財ノ件	公認スヘキ事實	六二	一二五八號	被告 藤井幸太郎	一
恐喝取財再審ノ件	前科言渡裁列所ノ相違	六二	再審五五號	被告 小島幣吉	三
詐欺取財ノ件	登記ヲ以テ所有權移轉ノ條件 トモシ詐欺、附帶控訴ノ及フ範 圍	七二	一一四〇號	被告 阿南榎次郎	五
強盜ノ件	兄弟ノ範圍	七二	一一七三號	被告 高山常三郎	七
官文書變造行使等ノ件	併合審理事件ノ判決	七二	一一〇五號	被告 青砥長藏	三
市町村會議員選舉法違反ノ件	理由アル控訴ノ棄却	七二	一一一〇號	被告 赤星庄儀助	三
私書偽造行使詐欺取財ノ件	不利益ノ變更、偽造文書ノ行使	七二	一一二一號	被告 山野邊忠平	六
強姦ノ件	毆打創傷ニ因ル強姦	七二	一二四八號	被告 武田善吉	三
證書偽造行使ノ件	印影盗用罪ノ構成	七二	一二五六號	被告 北出權四郎	三

刑事事件目錄

恐喝取財ノ件
 森林竊盜等ノ件
 盜匪故買等ノ件
 官印盜用等ノ件
 委託物費消ノ件
 強盜及監視規則違犯ノ件
 私書偽造行使等ノ件
 私書偽造行使ノ件
 詐欺取財ノ件
 懲治處分ノ件
 強盜再審ノ件
 遺失物隱匿ノ件
 誣告及偽證教唆ノ件
 偽證ノ件
 強姦毆打創傷ノ件

第三者ニ對スル恐喝
 新舊法ノ比照
 認定ノ異同
 擬律錯誤、未確定ノ公訴不受理ノ判決
 委託ノ意義
 抗告權ノ拋棄
 全部控訴ノ範圍
 訴ヲ受ケサル事件ノ審理
 騙取證書ニ基ク金圓ノ騙取
 懲治處分ノ上訴
 法律上代理人ノ再審
 遺失品ノ隱匿
 告訴狀ノ告發
 反證ノ提出
 強姦負傷罪ノ性質

十二月十六日	十二月十六日	十二月十四日	十二月十四日	十二月十三日	十二月十三日	十二月十三日	十二月十二日	十二月十二日	十二月十二日	十二月十二日	十二月九日	十二月九日	十二月七日
五六號	一二四六號	六〇號	一〇八〇號	再審一號	九四號	二一號	四四號	五號	一二六七號	一一六七號	一〇三八號	二二號	一一七二號
被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告
三浦惣彌	松島義城	田原勇太郎	坂本ノ八	桑原庄太郎	高岡敬一	山田定次郎	高橋合藏	中村勘兵衛	大室富次郎	石井佐一郎	細谷千代吉	菊地泰亮	內橋彌平
三	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七

恐喝取財及誣告ノ件
 詐欺取財ノ件
 嬰兒殺ノ件
 詐欺取財ノ件
 私書偽造行使等抗告ノ件
 放火ノ件
 私印盜用等ノ件
 毆打創傷ノ件
 官文書偽造行使ノ件
 委託物費消ノ件
 私書偽造行使ノ件
 詐欺取財ノ件
 強盜傷人ノ件

公訴私訴ノ判決書
 身分上ノ關係ヲ訊問セサル罰書
 教唆罪成立ノ場所
 留置物ノ騙取
 大審院ニ提出セシ上告趣意書
 二家屋ノ燒燬
 他人盜捺ノ印影行用
 子孫ノ父母
 舊藩家老職ノ違書
 指定價額以下ノ賣却
 被告事件ノ陳述
 前科ノ認定
 強盜傷人罪ノ構成

十二月十七日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日	十二月二十日
九〇號	九八號	七二號	一〇四號	抗告三號	一〇〇號	一一〇號	一三七號	六號	一二七號	一三三號	一三五號	一三八號	九〇號
被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告	被告
島邊彦藏	深地俊民	土田音吉	岡崎ノ之助	山村龜藏	島倉圓隆	鈴木治平	安村貞次	中村長次	進藤久右衛門	進藤修一	吉田兼三郎	山田佐吉	蓮井松助
三	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七

いろは索引

此索引ハ専ラ法律上ノ用語ニ依リ其頭音ヲ取テいろはノ順ニ從テ排列編纂ス止ムヲ得サルニ非サレハ形容詞若クハ普通名詞ヲ用ヒス〇頭音ハ必スシモ字音ノ假名遣ニ拘ハラズ人ノ通常言フ所ノ音聲ニ據ル例之ハウチほうニ入ルトカ如シ

[5]

印影盗用罪ノ構成

多額ノ證書ヲ作成シテ之ヲ少額ノ證書ナリト欺キ記名調印セシメタル所爲ハ印影盗用罪ヲ構成ス

(他人盗捺ノ印影行用。參看)

委託ノ意義

委託ハ保管等ノ爲ニスルモノト謂ニシテ委託販賣ノ如キ受託者ニ處分ヲ許シタル特種ノ委託ヲ包含セス

一審判決ノ取消

(全部控訴ノ範圍。參看)

遺失品ノ隠匿

甲ノ家ニ乙カ落シ置キタル金錢ヲ丙ニ於テ發見シ之ヲ甲ノ座側ニ投リ進リシニ甲之ヲ隠匿シタル所爲ハ遺失物隠匿罪ヲ構成ス

委託物費消罪ノ構成

(指定價額以下ノ賣却。參看)

[は]

判決言渡

刑事いろは索引

丁數

五

六

丁數

七

[6]

(檢事ノ立會ナキ判決言渡。參看)

判決ニ差異ヲ生スヘキ事實

(公認スヘキ事實。參看)

罰金刑ノ輕重

(新舊法ノ比照。參看)

反證ノ提出

反證提出ノ告知ヲ爲サトルモ現ニ反證ヲ提出シテ辯護シタルトキハ上告ノ理由ト爲スニ足ラス

犯罪ノ場所

(教唆罪成立ノ場所。參看)

配偶者

(子孫。父母。參看)

販賣品ノ指定價額以下ノ賣却

(指定價額以下ノ賣却。參看)

二個ノ控訴

(控訴ノ理由。參看)

認定ノ異同

罪トシテ論スヘキ所爲ニ關シ第一審ト第二審ト其認定ヲ異ニスルトキハ被告ノ控訴ハ理由アルモノトス

二家屋ノ焼燬

人ノ住居シタル家屋ト人ノ住居セサル家屋ト相接セルモノヲ燒燬スルノ目的ヲ以テ火ヲ放チ共ニ之ヲ燒燬シタル所爲ハ一罪ニシテ數罪俱發ニ非ス

冒認販賣罪ノ構成

他人ノ所有ニ屬スル不動産ノ自己ノ所有名義タルヲ寄託シ冒認シテ賣却シタル所爲ハ冒認販賣罪ヲ構成ス

保管の委託

(委託ノ意義。參看)

法律上代理人ノ再審

法律上ノ代理人ハ再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

併合審理事件ノ判決

二事件ヲ併合審理シナカラ數罪俱發例ヲ適用セサル判決ハ不法ナリ

騙取證書ニ基ク金圓ノ騙取

三

六

七

三

四

〔ロ〕

併合判決

(公訴私訴ノ判決書。參看)

登記ヲ以テ所有權移轉ノ條件トセシ詐欺

幼者タル甲ノ智慮淺薄ナルニ乘シ證書類ヲ授與セシメタル後其證書ニ基キ乙ニ對シテ金圓ヲ騙取セントシタル所爲ハ二罪ヲ構成ス

特別處分ノ上訴

(懲治處分ノ上訴。參看)

地所ノ騙取

(登記ヲ以テ所有權移轉ノ條件トセシ詐欺。參看)

〔チ〕

智慮淺薄ナル幼者ニ對スル詐欺

(騙取證書ニ基ク金圓ノ騙取。參看)

懲治處分ノ上訴

懲治處分ハ裁判權ニ付セラレタル特別ノ處分ニシテ刑ヲ言渡シタル公訴判決ト其性質ヲ異ニス從テ該處分ニ對シテ上訴スルヲ得ス

理由アル控訴ノ棄却

被告ノ控訴ノ理由アルコトヲ認メナカラ原則決シ被告入ノ不利益ニ變更スルコトヲ得サルヲ理由トシテ其控訴ヲ棄却シタル判決ハ不法ナリ

(認定ノ異同。參看)

留置物ノ騙取

賣主カ未拂代金ノ爲メ留置スル物ヲ賣主ニ於テ之ヲ騙取シタルトキハ詐欺取財罪ヲ構成ス

親ノ所有物ノ冒認販賣

所有者ト親子ノ關係アル場合ト雖モ其財産ヲ冒認シテ他人ニ賣却シタルトキハ冒認販賣罪ヲ構成ス

毆打創傷ニ依ル強姦

強姦スルノ意思ヲ以テ人ヲ毆打創傷シタル上其目的ヲ達シタル所爲ハ強姦負傷罪(刑法第三百五十一條)ヲ構成ス

刑事いは索引

〔カ〕

重キ刑ノ吸收

(二家屋ノ燒燬。參看)

彼此共ニ理由アル控訴

(控訴ノ理由。參看)

間接ノ恐喝

(第三者ニ對スル恐喝。參看)

家老職ノ違背

(舊藩家老職ノ違背。參看)

價額以下ノ賣却

(指定價額以下ノ賣却。參看)

豫審終結決定書ノ瑕瑾

(抗告權ノ拋棄。參看)

豫審免訴ノ所爲ヲ審理シタル判決

(訴ヲ受ケサル事件ノ審理。參看)

幼者ニ對スル詐欺

(騙取證書ニ基ク金圓ノ騙取。參看)

第三者ニ對スル詐欺

甲者ノ爲ニ周旋スル乙者ニ對シテ甲者ヲ恐喝スル言ヲ發スルトキハ恐喝者ハ其責任ヲ免カルヲ得ス

三

〔を〕

〔り〕

〔へ〕

〔は〕

體刑ノ輕重

(新舊法ノ比照。參看)

大審院ニ提出セシ上告趣意書

大審院ニ上告趣意書ヲ提出スルモ其效ナシ
他人盜捺ノ印影行用

甲者アリ乙者カ他人ノ印影ヲ盜捺セシ郵紙
ヲ所持スル。情ヲ知リナカラ共謀シテ證書
ヲ偽造行使シタルトキハ甲者モ亦印影盜用
ノ刑責ヲ免カレン

訴ヲ受ケサル事件ノ審理

數罪中豫審ニ於テ免訴セラレタル所爲ニ對
シ審理シタル裁判ノ不法ナリ

權利義務ニ關スル證書

(商業帳簿ノ性質。參看)

檢事ノ立會ナキ判決言渡

檢事ノ立會ナクシテ言渡シタル判決ハ不法
ナリ

檢事ノ附帶控訴

(附帶控訴ノ及フ範圍。參看)

兄弟ノ範圍

刑法第三百七十七條ノ兄弟ニハ其配偶者ヲ
包含セズ

權衡ヲ失シタル刑

(不利益ノ變更。參看)

輕罪刑ノ輕重

(新舊法ノ比照。參看)

檢事ノ陳述ナキ判決

(被告事件ノ陳述。參看)

不動産ノ冒認

(冒認販賣罪ノ構成。參看)

附帶控訴ノ及フ範圍

第一審判決ヲ不當トシ取消ス場合ニアリテ
ハ被告人ニ不利益ナル檢事ノ附帶控訴ニ反
スル判決ヲナスモ其附帶控訴ニシテ第一審
判決全部ノ更正ヲ求ムル趣旨ナルトキハ其
附帶控訴モ亦理由アルモノトス

不利益ノ變更

第二審裁判所ニ於テ第一審裁判所カ重シト
認メタルモノヲ無罪トシ同一ノ刑ヲ殘餘ノ
罪ニ科スルモ不利益ノ變更ニ非ス

文書偽造行使罪ノ構成

(偽造文書ノ行使。參看)

不審理ノ證人調書

(身分上ノ關係ヲ訊問セサル調書。參看)

[ひ]

體刑ノ輕重
大審院ニ提出セシ上告趣意書
他人盜捺ノ印影行用
甲者アリ乙者カ他人ノ印影ヲ盜捺セシ郵紙
ヲ所持スル。情ヲ知リナカラ共謀シテ證書
ヲ偽造行使シタルトキハ甲者モ亦印影盜用
ノ刑責ヲ免カレン
訴ヲ受ケサル事件ノ審理
數罪中豫審ニ於テ免訴セラレタル所爲ニ對
シ審理シタル裁判ノ不法ナリ
權利義務ニ關スル證書
(商業帳簿ノ性質。參看)
檢事ノ立會ナキ判決言渡
檢事ノ立會ナクシテ言渡シタル判決ハ不法
ナリ
檢事ノ附帶控訴
(附帶控訴ノ及フ範圍。參看)
兄弟ノ範圍
刑法第三百七十七條ノ兄弟ニハ其配偶者ヲ
包含セズ

[ふ]

權衡ヲ失シタル刑
(不利益ノ變更。參看)
輕罪刑ノ輕重
(新舊法ノ比照。參看)
檢事ノ陳述ナキ判決
(被告事件ノ陳述。參看)
不動産ノ冒認
(冒認販賣罪ノ構成。參看)
附帶控訴ノ及フ範圍
第一審判決ヲ不當トシ取消ス場合ニアリテ
ハ被告人ニ不利益ナル檢事ノ附帶控訴ニ反
スル判決ヲナスモ其附帶控訴ニシテ第一審
判決全部ノ更正ヲ求ムル趣旨ナルトキハ其
附帶控訴モ亦理由アルモノトス
不利益ノ變更
第二審裁判所ニ於テ第一審裁判所カ重シト
認メタルモノヲ無罪トシ同一ノ刑ヲ殘餘ノ
罪ニ科スルモ不利益ノ變更ニ非ス
文書偽造行使罪ノ構成
(偽造文書ノ行使。參看)
不審理ノ證人調書
(身分上ノ關係ヲ訊問セサル調書。參看)

[こ]

父母
刑法上父母ニハ配偶者ヲ包含セズ
不利益變更ノ意義
(前科ノ認定。參看)
控訴ノ理由
被告ノ控訴並ニ檢事ノ附帶控訴共ニ第一審
判決ノ全部ニ對スル場合ニ於テ第一審判決
ヲ取消ストキハ彼此ノ控訴共ニ理由アルモ
ノトス
公認スヘキ事實
公認スヘキ事實ヲ判決ニ明示セサル場合ニ
在テハ其事實カ現實ニ判決ニ差異ヲ生スヘ
キトキニ限り事實理由ノ不備ナリトス
行使
(偽造文書ノ行使。參看)
強姦負傷罪ノ構成
(毆打創傷ニ因ル強姦。參看)
公訴不受理ノ判決
(未確定ノ公訴不受理ノ判決。參看)
抗告權ノ拋棄
抗告スルコトヲ得ヘキコトト及ヒ其期間ノ記
載ナキ豫審終結決定書ト雖モ被告人ニ於テ
刑事いるは索引

[さ]

異議ナク第一審ノ審判ヲ受ケタル以上ハ抗
告ノ權利ヲ拋棄シタルモノトス從テ其豫審
終結決定書ハ確定ス
告訴狀ノ告發
告訴狀ト題スル書面ヲ以テ告發スルモ其書
面ハ無効ニ非ス
告知ナキ反證ノ提出
(反證ノ提出。參看)
強姦負傷罪ノ性質
強姦負傷罪(刑法第三百五十一條)ハ親告罪
ニ非ス
公訴私訴ノ判決書
公訴私訴ノ判決書ハ之ヲ各別ニ作成スルヲ
要セス
強盜傷人罪ノ構成
強盜ニシテ人ヲ傷ケタル以上ハ財物ヲ得ル
ト否トニ拘ラズ強盜傷人罪(刑法第三百八
十條)ヲ構成ス
再審
(前科言渡裁判所ノ相違。法律上代理人ノ再
審。參看)
裁判權ニ付シタル特別處分
(懲治處分ノ上訴。參看)

[九]

偽造文書ノ行使

文書偽造行使罪ハ偽造ノ文書ヲ以テ真正ノ文書トシテ行使スルニ依テ成立ス從テ偽造ノ文書ナルコトヲ明言シテ行使シタル所爲ハ文書偽造行使罪ヲ構成セス

恐喝取財犯ノ構成

(第三者ニ對スル恐喝。參看)

擬律錯誤

公證文書偽造行使罪ト公印偽造罪ト併發シタル場合ニ於テ刑法第二百六條ヲ適用セスシテ同法第三百九十條第二項ヲ適用シタル判決ハ擬律錯誤ノ不法アリ

共犯人ノ身分

(身分上ノ關係ヲ訊問セサル調書。參看)

教唆罪成立ノ場所

教唆ハ被教唆者カ重罪輕罪ヲ犯シタルニ因テ犯罪ヲ構成ス從テ被教唆者カ罪ヲ犯シタル場所ヲ以テ教唆罪成立ノ場所トス

舊藩家老職ノ違書

舊藩ノ家老職ノ違書ヲ偽造シタル所爲ハ官文書偽造罪ヲ構成ス

[め]

免訴事件ノ審判

[み]

未確定ノ公訴不受理ノ判決

公訴不受理ノ判決アリタル場合ニ於テハ判決確定前ト雖モ檢事ハ其判決ヲ相當ト認ムルトキハ之ニ對シテ上訴ヲナス更ニ起訴ノ手續ヲナスコトヲ得

身分上ノ關係ヲ訊問セサル調書

證人ニ對シ共犯人中ノ一名ト身分上ノ關係ヲ訊問セスシテ作成シタル調書ハ無効ナリ

商業帳簿ノ性質

商業帳簿ハ刑法第二百十條ニ所謂權利義務ニ關スル證書ナリ

證書ヲ僞信セシメタル所爲

(印影盜用罪ノ構成。參看)

新舊法ノ比照

新舊法ヲ比照スル場合ニ於テ輕罪刑ノ輕重ハ體刑ニ在テハ刑期ノ長キモノヲ以テ重シトナシ罰金刑ニ在テハ多額ノモノヲ以テ重シトナス

受託者ニ處分ヲ許シタル委託

(委託ノ意義。參看)

主張以外ノ理由

全部控訴ノ範圍

第二審ニ於テ第一審判決ノ不當ヲ認メ之ヲ取消シタル以上ハ縱令其取消ノ理由ニシテ被告ノ主張セシ理由ト異ナル場合ト雖モ判決全部ニ對スル控訴ナルトキハ其控訴ハ理由アルモノトス

接續家屋ノ燒燬

(二家屋ノ燒燬。參看)

數罪俱發例

(併合審理事件ノ判決。參看)

[す]

[ひ]

被教唆者犯罪ノ場所

(教唆罪成立ノ場所。參看)

被告事件ノ陳述

審理ノ始メニ於テ立會檢事ヲシテ被告事件ノ陳述ヲナサシメサル第一審判決ヲ是認シタル裁判ハ不法ナリ

[せ]

前科言渡裁判所ノ相違

前科ヲ言渡シタル裁判所ニ相違アルモ其前科ニシテ明カナル以上ハ刑事訴訟法第三百一條第五號ニ該當スル再審ノ原由ナキモノ

法 文 表

刑法

二〇六條.....	四
二一〇條.....	一
三五一條.....	三
三七七條.....	八
三八〇條.....	四
三九〇條二項.....	十
刑事訴訟法	
三〇一條五號.....	三

丁數

月日目錄

宣告月日	番號	判決結果	原裁判所	丁數
二月六日	六五八號	棄却	大阪	一
二月六日	八〇三號	棄却	大阪	六
二月六日	一一八八號	破毀	東京	九
二月六日	一二五八號	棄却	長崎	二
二月六日	再審五五號	棄却	名古屋	三
二月七日	一一四〇號	棄却	長崎	五
二月七日	一一七三號	棄却	大阪	七
二月七日	一二〇五號	破毀	大阪	三
二月七日	一二一〇號	破毀	宮城	五
二月七日	一二二一號	棄却	名古屋	六
二月七日	一二四八號	棄却	宮城	三
二月七日	一二五六號	棄却	名古屋	五

刑事月日目錄

丁數

人名音字目錄

人名	番號	原裁判所	丁數
今本ヨシ外一名被告	八〇三號	大阪	六
石井佐一郎被告	一六七號	宮城	十
蓮井松助被告	一三五號	大阪	五
星庄助外三名被告	一一〇號	宮城	三
堀岡重太郎被告	一一二一號	名古屋	七
細谷千代吉被告	一〇三八號	宮城	七
大島紋治郎外一名被告	一一七三號	大阪	七
大島萬次郎外一名被告	一二六七號	名古屋	七
岡崎之助被告	一〇四號	宮城	三
渡邊彦藏 <small>私訴被告 上告人</small>	九〇號	宮城	六
吉田兼三郎被告	一二七號	大阪	十
高山常三郎外一名被告	一一七三號	大阪	七

刑事人名音字目錄

[や]	山田定次郎外一名被告	二一號	東京	三
[ゆ]	桑原庄太郎外一名被告	再審一號	靜岡地方裁判所	三
[ゆ]	久保平吉外一名被告	一二五六號	名古屋	三
[ゆ]	内橋彌平被告	一一七二號	大阪	四
[ゆ]	室富次郎外一名被告	一二六七號	名古屋	五
[ゆ]	中村十カ外一名被告	一三七號	東京	十
[ゆ]	中村勘兵衛被告	五號	宮城	十
[ゆ]	土田音吉被告	七二號	宮城	十
[ゆ]	武田久右衛門外二名被告	六號	宮城	十
[ゆ]	田原勇太郎被告	六〇號	大阪	十
[ゆ]	高林喜市郎外一名被告	再審一號	靜岡地方裁判所	十
[ゆ]	高岡敬一被告	九四號	東京	十
[ゆ]	高橋會藏私訴被告 上告人	四四號	大阪	十
[ゆ]	武田善吉被告	一二四八號	宮城	三

[ま]	山田龜藏抗告人	抗告三號	東京	十
[ま]	安村貞次外一名被告	一三七號	東京	十
[ま]	山田佐吉被告	一三三號	宮城	十
[ま]	丸山八十八被告	一一八八號	東京	九
[ま]	松島義城被告	一二四六號	東京	九
[ま]	藤井幸太郎被告	一二五八號	長崎	二
[ま]	深地俊民被告	九八號	東京	六
[ま]	般川雛五郎被告	一三八號	東京	八
[ま]	小林政雄被告	六五八號	大阪	一
[ま]	小島幣吉被告	再審五五號	名古屋	三
[ま]	阿南假次郎被告	一一四〇號	長崎	三
[ま]	青砥長藏被告	一二〇五號	大阪	三
[ま]	赤津權次外三名被告	一一一〇號	宮城	三
[ま]	坂本興八外一名被告	一〇八〇號	函館	三
[ま]	坂本ノブ外一名被告	一〇八〇號	函館	三

刑事人名音字目録

[5]	北出權四郎外一名 <small>被告</small>	一二五六號	名古屋	四
	菊地泰亮 <small>被告</small>	二二號	東京	三
[6]	三浦惣彌 <small>被告</small>	五六號	長崎	六
	秦泉寺辰次外一名 <small>被告</small>	八〇三號	大阪	六
[7]	庄子儀隆外三名 <small>被告</small>	一二一〇號	宮城	五
	城崎城助 <small>公訴私訴 上告人</small>	四四號	大阪	三
	標德太郎外一名 <small>被告</small>	二一號	東京	六
	島田丹治 <small>公訴私訴 上告人</small>	九〇號	宮城	六
	島倉圓隆 <small>被告</small>	一〇〇號	東京	十
	進藤長藏外二名 <small>被告</small>	六號	宮城	十
	進藤修一外二名 <small>被告</small>	六號	宮城	十
[8]	森宗左衛門 <small>被告</small>	二號	宮城	十
[9]	鈴木治平 <small>被告</small>	二〇號	東京	十

大審院刑事判決録

第五輯 第貳卷

○詐欺取財私書偽造行使ノ件

明治三十一年第六五八號
明治三十二年二月六日宣告

○判決要旨

(判旨第三點) 商業帳簿ハ刑法第二百十條ニ所謂權利義務ニ關スル證書ナリ

(參照) 賣買貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス(刑法第二百十條)

(判旨第六點) 被告ノ控訴並ニ檢事ノ附帶控訴共ニ第一審判決ノ全部ニ對スル場合ニ於テ第一審判決ヲ取消ストキハ彼此ノ控訴共ニ理由アルモノトス

商業帳簿ノ性質○控訴ノ理由